
コードギアス 本編派生短編集

月城十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 本編派生短編集

【Nコード】

N1984M

【作者名】

月城十夜

【あらすじ】

コードギアス反逆のルルーシュの本編から派生したお話の短編集です。

STAGE 1・999 「未知との遭遇」(前書き)

STAGE・1「魔神が生まれた日」で死んだはずのC・Cが復活した後の独白＋です。

STAGE 1・999 「未知との遭遇」

「ああ、どうにか無事に力は与えたさ」

気だるげに呟きながら、地面に直接身体を横たえていた少女はムクリと上半身を起こした。

無意識の仕草で長い緑の髪をかき上げると、後頭部を探った手のひらにべっとり血痕が付着したのに気づいて、少女は不快そうに金の瞳を鋭く細めた。

その血痕の始末をしばらく逡巡した後に適当に服の袖で拭くと、いかにも面倒臭そうに吐息しながら独白を続けた。

「効果？ さアな、そんなものは私の知ったことではない。本体の私は完全に死んでいたんだからな」

否。

感覚的な部分で、少女はその感覚を知悉していた。

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる。おまえ達は 死ね。

少年がそう命令を発すると、周りを取り囲んでいた軍人達が嬉々として自らを死に導いた。

その亡骸が無造作に転がっている倉庫内。

むせ返るような血の匂いが周囲に濃厚に充満していて、人間の死には関わり慣れている少女ですら、しばしの間不快の色を示して、金の瞳を細めながらその光景を見つめていた。

が、それもつかの間、じきに少し怒っているような口調で独善的な告白を続けた。

「　　はア？　ギアスの委譲に関して以外は、私の知ったことではない。それくらい承知の上で、私にいつの存在を　おい、それよりおまえ、本当に構わないのか？　仮にも自分の息子を　はあ？　だから、どうしてそういう話になる？　ギアスを与えた以上、私はアレの成長を待ち、願いを叶えて貰うまでだ」

矢継ぎ早に独白を発しながら、ややあつて少女は疲れたような表情で立てた膝を腕の中に抱き寄せると、その上に、つい先ほど銃弾で打ち抜かれたばかりのひたいをギョツと無造作に押し当てた。

クツリと空気が洩れる音が聞こえたのは、少女が喉の奥から乾いた笑い声を発したからだ。

「　　ああ、いかにもおまえ達の息子らしいと思ったぞ。大した執着心だなア、アレは。アレなら十二分に私の望みに耐えられるかもしれないぞ？　自分が生き長らえることを何より優先的に、何だつて犠牲に出来るタイプさ。よっぽど私なんかより、不老不死の人生にふさわしい男かもしれないな」

淡々と言葉を発するその響きとは全く以って反比例して、自分の膝をきつく抱擁している腕の力が次第に増していき、決して高価とはいえない拘束衣の布地が引き連れるような軋み音を上げていた。少女はそれにも構うことなく、クツクツと喉の奥で笑い声を発し続けている。

「自分の息子が、ひょっとすると地獄に陥るかもしれないのに、よくもまアそうやって呑気に笑っていられるな。ひょっとして私がまた断念するとても軽視しているのか？　いいや、今の私以上に絶望を抱えた奴など居ないさ。こうなったら、あの男の生に対する執着を、心ゆくまで利用させてもらっただけさ。あの男の魂を一片たりとも逃すことなく、魔女の執念で生き地獄へと送り出してやる。結果的に私のコードが手に入るなら、おまえ達だって形式は別に構いはしないんだろう？」

ついには縫製の甘い部分がビリリと裂ける音が辺りに響くが、少女はそれでも渾身の力で掴んだ指の力を緩めようとはしなかった。むしろ繊細な少女の爪の先が過剰な圧力に耐え切れず、中指と薬指の爪の先が横から裂けるように割れてしまっが、少女はそれすら意に介した様子もなく、無気力な独白を続けている。

「まア、いずれにせよ、後は結果を御覧じろさ。そろそろ私も逃げるぞ。そうそう何度も撃ち殺されてたまるものか。私にだって痛覚はあるんだからな。　アッシュフォード？　ああ、アイツの住まいには、悪いがすぐには向かわない。おまえの言葉を信用しないわけではないんだが、しばらくの間は私だってあの男の適正を見極めるための時間を要するさ。そのうち、な。……まア、適当に何とかする」

言いながら少女は立ち上がると、面倒臭そうに服に纏い付いていた土ぼこりを払った。

傷を負ってから、まださほど時間は経過していないはずだったが、折れたはずの爪はもう既に元の形へと整形されていた。

少女は、いささか唐突にフンツと鼻を鳴らすと、先ほどまでとは少し違った冷笑を浮かべてクスリと微笑んだ。

「おまえが言うな、マリアンヌ。契約不履行のクセして。……おまえであれ、誰であれ、契約以外でこの私を使役することなど許すつもりは無いからな。シャルル？ そうだな、アイツが私の願いを叶えてくれるのであれば、或いは……フツ、まア、そう焦るな。『二兎を追うものは』と言うだろう？ ひとまず今は、あの男の資質に賭けてみるだけさ。それから先のことは、ああ、わかったから、今更四の五の言ってくるな。言っただろう？ もう既に時の歩みは進み始めてしまったんだからな。さあ、あの男にとっては地獄の、私にとっては幸福の始まりだ」

最後のそれだけは実に鮮やかな微笑を浮かべながら少女はそう宣言すると、臆したところの微塵も無い歩き方で無人の倉庫を後にした。

「……なんとも馬鹿馬鹿しい『魔女の宣誓』だな」

腰丈の高い椅子に一人悠然と腰を下ろしながら、ルルーシュは無感動にポツリと呟いた。

その呟きをふいに耳に入れたC・Cは、露骨に呆れた様子でルルーシュの背後に近づいた。

「しつこい男だな、同じシーンばかり眺めて。いい加減、嫌がらせにしか思えないぞ？」

一瞬黙り込んでいたルルーシュは、チラリと横目で振り向くと、
「よくわかつているじゃないか」

と、人の悪い表情で唇の端を歪めた。

「　　いてっ」

「おまえがそのつもりなら、私だって同じ手段で反撃してやるまでだ」

容赦なくルルーシュの後頭部に平手打ちをお見舞いしたＣ・Ｃは憤然と呟きながら、カツカツと靴音高く長い回廊の先に歩みを進めた。

空中に無数の絵画が縫い止められている幻想的な空間　　Ｃの世界。

やがてＣ・Ｃが歩みを止めた先では、暗い洞窟の中で水音がぴちやりと跳ねる音が響いていた。

「　　やっと呼んでくれたね……私の名前　　」

洞窟の中に裸身を晒して横になっている少女。

その少女の顔の上に屈み込んでいた少年が、茫然とした顔つきで腰を下ろし直すシーンが後には続いた。

ルルーシュは、いかにも慥然とした表情でＣ・Ｃの後に続くと、ややあつて無表情に自分を見上げる夕チの悪い魔女の視線に耐えた。だが次にＣ・Ｃが口を開いたとき、その口調は思いのほかに真剣なものだった。

「なア、ルルーシュ？」

「何だ？」

そこで一度言葉を切ったＣ・Ｃは、また一度絵画のほうに視線を戻した。

絵画の中では少年が、ためらいがちに血に濡れたハンカチを水た

まりの中に投棄しているシーンが続いていた。

そのシーンをしばらく無言で眺めていたＣ・Ｃは、やはり無表情に傍らに立つルルーシュの顔を見上げた。

「私なりに、いろいろ考えてみたんだがな。やっぱりどうしてもわからないんだ」

「何が？」

答えながら、だがそれを言う男の口調は、『出来れば訊ねてくれるな』と言外に物語っていた。

それを察せないほど浅い付き合いではなかったが、男の意思を無視するのに慣れていたＣ・Ｃは、構わず質問を続けた。

「どうしておまえ、私を人間扱いする気になったんだ？ たかがこれしきの出来事で」

端的に言ってしまうなら、たかだか本名を知ったことぐらいで。

ルルーシュは、しばらく惘然と顔を顰めたまま、口を開く兆しすら見せようとしなかったが、いつになく真剣みを帯びているＣ・Ｃの瞳も、返事を急かすような真似はしなかった。

ややあつてルルーシュは、いかにもげんなりとしている様子で、

当て付けのように大きくあきらめの息を吐き出した。

「三日くれ。その間に、どうにか答えらしいものを考える」

Ｃ・Ｃは、クスツと息が洩れるような笑い方をした。

「えらくまた真剣に考えてくれるんだな？」

ルルーシュは、惘然とした表情のまま、それでも断固とした口調で切り返した。

「別におまえのためじゃない。下手な答え方をして、後になってアレコレ考え直すような真似を避けたいだけだ」

Ｃ・Ｃは、きょんとした表情で小首を傾げた。

「要するに、自分のためか？」

「ああ、俺はそういう男だ」

「今も昔も変わらずか？」

「そう言う事だ」

言つて、すげなくルルーシュは踵を返したが、C・Cは後を追おうとはしなかった。

カツカツと快活に去り行く背中に向かって、C・Cはひそりと無感動に訊ねた。

「なア、ルルーシュ？」

「何だ？」

「もしも私が死ななくて、おまえも窮地に立たされことなく現場から脱出することが叶っていたら、そのときおまえは私の処遇をどうした？」

ルルーシュはぴたりと歩みを止めると、その場でしばらく黙考して、やがて肩越しに視線を返した。

「とりあえず、アッシュフォードに連れ帰っていたんじゃないのか？」

何しろシンジク・ゲッターを壊滅させるほどの危険人物なんだからな。とルルーシュは続けた。

「適当に放り出すつもりなら、最初から連れて逃げ回る必要もないだろう？」

「それから？」

「そうだな、適当に時機を見て、安全な場所に逃がしてやる方法でも模索してやっただろうさ」

これにはC・Cのほうが、驚いている表情でばちくりと大きな瞳を見開いた。

「正体不明の、いかにも身元の怪しい女に、そこまでしてやる必要があるのか？」

「だから言つたろう？」

ルルーシュは答える。肩をすくめがちに。

「俺の心の平穏のためだ。せつかく死地を脱したのに、その後に俺の責任で死なせてしまったのでは後味が悪いだろう？」

C・Cは無表情に小首を傾げると、不思議そうに訊ねた。

「なら、逃がしてやった後は」

「愚問だな。出会ったことすら、三日もしないうちに綺麗サッパリ忘れていただろうさ」

C・Cはようやく納得したような表情でクスリと微笑む。

「なら、せいぜい三日を考え事に費やすんだな。『綺麗サッパリ忘れられなかった』場合の返答を」

いかにも余裕たつぷりの表情でからかわれ、ルルーシュは「うるさい」と一言呟くと、それきり一度も振り向くことなく、無限に繋がる回廊の先に向かって歩みを進めた。

「 e n d e 」

STAGE 1・999 「未知との遭遇」(後書き)

この世界で記憶を覗いている二人。

作者は共犯者のコンビが好物なので、作品傾向もそついうお話が多いです。

少しでも愉しんで頂けましたら幸いです。

STAGE 10・55 「夜の休日」

「ルルーシュ、泳ぎたい」

現在時刻、夜中の2時。

ルルーシュは横目でちらりとふざけたことを呟く女を冷たく見下ろした。

「おまえ、今までの契約者たちに決まって言われたセリフがあるだろう？ 良い機会だから教えてみる」

「言われたセリフ？」

C・Cは一見真剣な表情で小首を傾げて素直に質問の内容を吟味した。

「そうだな…、あんまり無理をするな。淋しいならいつでも言ってくれ。ほかに欲しいものは無いのかい？ きみの笑顔は太陽だ。きみと出会えた奇跡に感謝するよ。それから…」

「ちよつと、待て」

「ああ、そうそう。いつもきみは可憐な花の香りがするね。そんなところかな？」

にっこり。

ちよつと懐かしそうに笑ってみたりして。

その笑顔に、思わずちよつと動揺してしまったルルーシュは、意味もなくコホツと空咳をしながら視線を外した。

「……ひとつ訊ねるが、男以外と契約はしていないのか？」

「いいや？」

C・Cはベッドの上に腹ばいに寝返りを打つと、両手で頬杖を突きながらつらつらと答えた。

「女男男男女男だな、今の場合だと」

「はア？」

「とことん飲み込みの悪い奴だな。さっきのセリフの順番だ」

仰向けに身体を横たえているルルーシュは、とっさに天井を睨みながら先ほどのセリフを反芻した。

しかし、男が女に代わったところで、まるきり口説いているような言葉の羅列である事実に変わりはない。

思わずそのままゴロリと無言で寝返りを打つと、Ｃ・Ｃが露骨にクスリと息を漏らして笑った。

「なんだ、妬いているのか？」

「バカか、おまえは」

「なアなア、ルルーシュ」

「だからなんだ？」

「泳ぎたい」

徹頭徹尾、思い立ったが吉日とばかりに自分のワガママを押し通すＣ・Ｃの傍若無人ぶりにほとほと呆れ果ててしまったルルーシュは、そのまま聞こえないフリを装って寝る体勢を整えた。

重ねて言うが、現在の時刻は夜中の２時。草木も眠る丑三つ時だ。そんな時間にどこの物好きが泳ぎになど出掛けるものか。

どうしても泳ぎたいと言うのなら、いくらでも好きなだけ出掛けてくると良い。ただし、自分ひとりで。

「……う、ツ？」

目を閉じたまま憤然と徹底抗戦の構えを続けていたルルーシュだったが、にわかにかぷりと耳を噛まれて思わずびくりと反応してしまった。

「おまえは…ッ、どこまでワガママを押し通せば」

「ほう？」

激昂するルルーシュの肩の上に顎の先を押し付けて意味深に声を潜めるＣ・Ｃは、指先でルルーシュの身体のラインをなぞり上げながら艶のある声音で呟いた。

「誰のせいで眠れないと思ってる？ 今夜は疲れているから嫌だといったのに、あんなにしつこくおまえが…」

「妙な言い方をするなッ！ 週末の作戦のシミュレーションに付き合ってもらったただけだろうッ！！」

「なにをそんなに赤くなってるんだ？ だからしつこく私に話を聞けと迫ってきたんだろ？ と言っているんだよ、私は。何か間違ったことを言ってるか？」

くすり。

絶対わざとやっているに違いない方法で容易にルルーシュを激昂させることに成功したC・C。は、いかにも不思議そうに小首を傾げながら微笑した。

ルルーシュはとつさに奥歯を噛み愚かな羞恥をすり潰すと、あてつけがましく大きく息を吐き出しながらベッドの中から抜け出した。……1時間だけだぞ？」

C・C。はそれこそ太陽が輝くように微笑んだ。

生徒会副会長の特権を利用して、ルルーシュは比較的自由にアツシュフォードの施設を利用していた。

そこに目をつけたのがC・C。である。

なにしろ自身は学校というものに通った経験が無かった。

無限に存在している時間を活用して本だけは無数に読んできたので、ルルーシュが時々舌を巻くような専門知識を披露することもある。

そうした部分を頼りにして時にはC・C。を相手に作戦の相談を持ちかける場合もあるわけだが、今日の場合は自分でもあまりに完璧な作戦を思いついてしまったものだから、話し始めたら止まらない

くなってしまったのだ。

まったく自分でも子供のようだと思ってしまったが、実際問題あとの祭りだ。

8月も下旬に差し掛かり、夜はずいぶん涼しくなっていた。

日本の気候で唯一厄介な夏の湿気もかなりマシになってきていて、少々強めに風が吹き付けるとちよつと涼しすぎるぐらいだ。

ルルーシュは簡単なシャツとジーンズに着替えると、珍しく露骨に喜びを醸し出しているC・C・を従えて無人の学園内を闊歩した。施設の施錠はすべて電子キーで行われているから、ほとんどの施設をフリーパスで使えてしまう特権が今は少しだけ鬱だった。

けれども、どんなに暑い夏の盛りでも、日中には海水浴ひとつ愉しめないC・C・の境遇を考えるとなんとなく同情を覚えないことも無い。やがてプールに到着した頃にはほとんど機嫌も直っていた。「おい、C・C・？ さすがにこの時間では更衣室は使えないからな、先にひとりで入って着替えている。俺は外で水温の確認をしてくるから」

そそくさと言い置いて背中を向けたが、C・C・は平然とした様子でそれに答えた。

「持ってきてないぞ？」

「……何？」

さすがに幻聴かと思って、ルルーシュはいぶかしげにC・C・の表情を窺がった。

それを『聞こえなかった』と判断したC・C・は、真面目な顔でさらに言葉を付け加えた。

「だから、水着を持ってきてないと言ったんだ」

ルルーシュは眉間に濃く皺を刻んで、ギリツと奥歯を噛み締めた。「……だったら、こんな時間にこんな場所に何をしに来たんだ？」

C・C・は怪訝そうに眉をひそめてルルーシュの表情を眺める。「泳ぐ以外にプールに何の用があるんだ？」

答えながらさっさとプールの中に姿を消した。

ルルーシュは、このままＣ・Ｃを置き去りにして部屋に帰つてやろうかと思つたが、どのみち施錠の必要があるので結局出直さなければいけないわけだった。おそらくＣ・Ｃのことだから、どれだけ深く眠つていようが関係なく「鍵を閉めにいけ」と起こしてくれるに違いない。

だったら、いつそのことＣ・Ｃが泳いでいるそばで仮眠を取つてやるとばかりに憤然と後に続いたが、あわやのところでギャッと叫びかけた口を閉ざした。

耳まで真っ赤に染めながら、とつさに回れ右をした。

「~~~~おつ、おまえには羞恥心というものがないのかッ!!!」

Ｃ・Ｃはそんなルルーシュの反応にクスリと息を漏らして微笑んだ。

「おまえがスケベ心を出さなければ月しか見ないさ。月光浴という言葉ぐらい知っているだろう?」

言うなり、プールサイドに来ていた服を脱ぎ散らかしてドブリと水の中に飛び込んだ。

月光を映していた穏やかな水の表面が、激しく乱れて水の飛沫を上げるのと同時に、Ｃ・Ｃの長い緑の髪が月の輝きを受けて美しく光った。

水音に惹かれて思わず振り向いてしまっていたルルーシュは、薄い緑の美しいベールが濃い黒の水の中に沈みゆく光景に激しく目を奪われた。

都会の環境にこの女を閉じ込めているのは自分だが、時折それが窮屈そうに見えてしまうときがある。

そのワケをこんな場合になんとも感じられるような気がしていた。

Ｃ・Ｃはどこから見ても満足げな様子で、水の中をスイスイ泳いでゆく。

平泳ぎだったのでルルーシュも特に気にすることなく思わず眺めてしまったが、しばしば水面に丸くて白い尻の表面が浮いているの

に気付いて慌てて視線を逸らせた。

「気持ちいいぞ、おまえも一緒に泳いだらいいのに」

「……勘弁してくれ」

本当に、そう願いたい心境だった。

C・Cはルルーシュの反応を面白がるようにふふつと笑ったが、じきにその笑顔もつかの間の解放感を愉しむ本物の笑顔に移行した。

ルルーシュは、ぼんやりその光景を眺めながら、そういえばこいつが無邪気に笑った顔を見たことがないなといまさらのように考えた。

「前から泳ぐのが好きなのか？」

「さア？ 自分でもよくわからないな。そうだと言ったら何か違うのか？」

「別に。……まあ、たまには付き合ってやらんこともないというだけだ」

「ふん、どうせその代わりに、また滔々と作戦を語ってみせるのだから？」

「よくわかってるじゃないか」

「おまえはそういう男だよ」

たがいに憎まれ口を叩きあいながら、プールのしじまにはクスクスと穏やかな笑いの気配が漂った。

C・Cは本当に小一時間あまりも水の中で野性に返って、ルルーシュはその間ぼんやりと月見物を続けていた。

ルルーシュ自身、こんなに長いあいだ何も考えずに過ごしていたのはずいぶん久しぶりのことだった。

「疲れた。ルルーシュ、手を貸してくれ」

やがてプールサイドに戻ってきたC・Cは、当然のようにルルーシュをこき使うことも忘れない。

それに無意識のうちに従ってしまってから、ルルーシュは慌てたように視線を逸らした。

「だから、羞恥心を少しくらいは持てと言つのに」

「目を瞑っているよ。常識だろう？」

「しゃあしゃあと返されて、それでも従ってしまう自分は甘いのか？
まあ、たしかに最近では世話になる場面も増えていることだしな、
とルルーシュは自分に言い聞かせながら、露骨に渋々プールサイド
にしゃがみ込み、目を瞑ったまま両腕を差し出した。

そこに自分のほうから捕まってきたＣ・Ｃは、遠慮なく体重を
かけるとザバリと一気に水の中から上がってきた。

「ッ！」

だが、地上に降り着くのと同時にルルーシュは唇の上に冷たい感
触を感じて、驚きに思わず目を見張った。

「……らしくもない。礼のつもりか？」

もちろん一瞬で視線を逃していたのだが、それでも間違いなく触
れていったのは唇の感触。

Ｃ・Ｃはルルーシュの手渡したタオルで悠然と身体を拭きなが
ら、クスリと息を絡めて微笑んだ。

「勘違いするな。話しただろう？ 私のはただの記憶の更新だ。そ
れ以上の意味は何もない」

「記憶の更新？ どうして今そんなものが必要になるんだ？」

「当然だろう？」

どうしてわからない？ と言いたげな声音の調子に、思わずル
ーシュは視線を廻らす。

Ｃ・Ｃは心底愉しそうな表情で笑っていた。

「たまには付き合ってやると言っただろう？ その約束を忘れられ
たら困るからな」

その笑顔がいつになく本気で愉しそうな感じで。

どうせならその笑顔を記憶しておけよと思ってしまったルルーシ
ュは、とっさに背中を向けながら内心ひそかに動揺を持て余してい
た。

[e d e]

S T A G E 1 5 ・ 5 5 「雨の休日」 (前書き)

本編の内容には1ミクロンも触れてません。

STAGE 15・55 「雨の休日」

明けても、暮れても、雨、雨、雨 …。

ようやくうるさい蝉時雨のシーズンも終わって、肌に突き刺すような陽光が穏やかになってきていると言うのに。こうも連日雨ばかりでは、嫌でも気分が気鬱に陥ってしまうというものだ。

アッシュフォード学園内のクラブハウス。

ルルーシュが10の頃から仮の住まいにしている部屋は、そのとき雨の音と、沈黙と、無機質なキー操作音だけに満たされて切っていた。

毎日勤勉に働いているメイドのおかげで洗濯物が乾かないと嘆く必要はなかったが、それでも空気中の湿度をリアルタイムに吸い込んでいっているようなベッドのシーツは、なかなか人の温もりを消失してくれないので気持ちが悪かった。

しばらくのあいだC・Cは右に左にとゴロゴロ寝返りを続けていたのだが、ついにはイライラが高じて起き上がると、すぐさまばったり大の字に上下の位置を転換した。

自分の温もりに触れていないシーツの部分が、心持ち先よりも乾いているようで心地好い。

しかし、それも一瞬のことだった。

しばらくすると、またじわりと背中から湿度が溜まっていくような不快感に襲われる。

その間も、カチカチと無機質な音に変わりはない。

「……おい、ルルーシュ」

「何だ？」

声をかけると思いのほか迅速に返事が返ってきたものだから、余計にC・Cはムカついた。

「こんなに可憐な私が、いかにも退屈そうに暇を持て余していると
言うのに、”どうした？”と氣遣う余裕もないのかこの童貞坊やが」
カチカチカチ

たゆみなくキーの操作音は続いている。

カチカチカチ、カチ、カチリ。

「では聞くが、どの可憐な女がことあるごとに他人の究極のプラ
イベートにずかずか土足で踏み込んでくるんだ？ しかも、俺はた
だの一度もそれを肯定した覚えがないんだがな？」

「えっ？ ちがうのか？」

思わずC・C・は、大の字の状態から頭だけ上に持ち上げた。

横目でC・C・を睨んでいたルルーシュは、とっさにその目を逃
がした。

「……おまえには関係ないだろう？」

カチカチカチ。

ふたたび静寂を刻むリズムが開始されてゆく。

「……ルルーシュ……」

「今度はなんだ？」

「すまなかつたな、寝ぼけていたとはいえ、ゆうべナナリーの部屋
で小一時間ほど同衾した。もつともナナリーも寝ぼけていたから大
事無い。愉しかったなア……おまえの悪口を色々聞かされて」

ツガ、ブ ！！

ビープ音。

「っあ、あっ……！」

どうやらうつかり大変な操作ミスをしてしまったらしい。

柄にもなくルルーシュが焦りの色も露わに、しばらくのあいだ猛
烈な勢いでキー操作を続けていた。

C・C・は胸の上に落ちていた髪のを束を弄って、そろそろスペシ
ヤル・トリートメントでもしてみるかと別なことを考え始める。

「まったくおまえという女はッ！ どこまではた迷惑な奴な
んだッ！」

数分して、ようやく復旧することに成功したのだろう。

C・Cの足元で騒音を生み出していたルルーシュが、手を止めて振り向くなり激昂して叫んだ。

しかしその頃には、すこし話して気の済んでいたC・Cはトロトロと襲い来る眠気に身を任せていた。

くるりと横臥に身を丸めて、自分で自分の身体を抱き締めながら寝言のように呟いた。

「……シュ、……くん……は？」

「はア？」

にわかに激しく降り始めた雨の音が邪魔をして、普通に話していても聞きづらい。

そんなところで呟きが耳に届くはずもなく、ルルーシュは「どうして俺が」と愚痴を呟きながらC・Cの枕元に近づいた。

「なんだ？ 何か言ったか？」

「……チーズくんを……どこ……」

「人聞きの悪い言い方をするな。おまえが洗えといったから、咲世子に頼んで洗濯中だ」

たちまち眉間にキリキリと皺を寄せるC・Cは、眠気で口々に動かぬ手のひらでポンポンとベッドの上を叩いた。

「……だったら……おまえ……ここ……」

「ふざけるな。人を抱き枕代わりに使うつもりか？」

「……も……いい……」

さらにキリキリと眉間の皺を深めたC・Cは、唸るようにいいながら反対側に寝返りを打った。

部屋の中には今なお濃厚に、C・Cが先ほど食べたばかりのピザの残り香が漂っているかのようだった。

要するに、食後の暇を持て余していたC・Cは、眠くてぐずる子供のするようにルルーシュに絡んで、今度は甘えさせると要求しているわけだ。

「どこまでワガママな女なんだ、おまえは……」

冷静に状況を分析し終えたルルーシュは吐き捨てるようにして呟いて、C・C・をベッドに残してまたパソコンの元に戻った。

カチカチカチ

窓の外にはにわかに雷鳴。

稲光は徐々に勢いを増していて、窓のガラスを打つ雨の飛沫もバババツとまるきりホースで水を直接吹き付けているような激しさだ。

ガラガラピカリ バリバリバリ…

とりあえず重要なデータはパソコン内部と外付けハードディスクに分散して保存した。

万が一にも帯電の可能性があるから、雷の鳴っている最中は精密機械の使用は厳禁。

それくらいの知識は当然ながらに持っている。

だが、室内での使用中に一度も被害に合ったことのないのもまた事実だ。

頭の中で言い訳がグルグルと作戦準備の邪魔をする。

そもそもどうして俺が、あんな可愛げのカケラもない女にやさしくする必要があるのだ？

言い訳が次第に説得の様相を呈してくる。

ガラガラピカリ バリバリバリ…

空気を揺るがす雷鳴に、それでなくともガタガタと振動を続けていた窓のガラスがビリリと激しく震えた。

あまりに一気に悪化してゆく天候に、おそらく小一時間もすれば止むのだろうなと判断した。

現在時点で必要な資料は3種類。2時間もあれば片付くような代物だ。

思わず鋭く目をすがめてしまいながら、壁の時計を見上げた。

午後1時 まあ、休憩するには少し早いが、誰に咎められるわけでもない。何しろ今日は休日だった。

ルルーシュは軽く前髪をかき上げながら椅子の背に背中を預けて、

しばしのあいだ恨めしそうに外の天気を見つめていた。

「……まったく、仕方のない奴だな」

忌々しそうに呟きながら、不貞腐れた態度で席を立つ。

その頃にはC・Cはスウスウと寝息を立てていた。

このうるさい状況下でよく寝られたものだなど呆れてしまったが、最前と同じようにギュツと身体を丸めた姿勢に変わりなく、いつも何かを抱えたがる空間をひどく持て余しているように見えてしまった。

起きている最中はニツコリ笑って人を斬るような性格をしているクセに、妙なところで幼児性を残している女だなとしばらく観察を続けていた。

「……まあ、どっちにしろ俺には関係のないことだがな」

呟きながらルルーシュはごそりとベッドの上に移動すると、背中合わせにC・Cの隣りに横になる。

雨の音はザアザアと暇を見つせず、きっとこの調子では学園のぐるりを囲った用水路が溢れるのも時間の問題だなとなんとなく考えた。

地下の循環システムがリアルタイムで監視を行っているので、実際に溢れたことは一度もないのだが。

昼寝の習慣はなかったので頭はスッキリ冴えているはずなのだが、どうにも思考が冗長的だなと他人事のように考えた。

「……ん……ん……」

やがて眠っている者の遠慮のなさで寝返りを打ち腕を投げ出してきたC・Cは、手ごろな対象を至近に見つけてルルーシュの腰のあたりにキュウツと抱きつきの腕を回した。

先にも一度要求され、なんとなくこうなることを予想もしていたから別段驚きもなかったが、結果的にC・Cの意識の無いところで甘えさせることに成功したルルーシュは、ふんつと鼻の先で笑い飛ばした。

「この淋しがり屋が……」

だったら普段から少しはそれらしく、しおらしく振舞っていると言っものだ。

なにやらひどく勝ち誇ったような心境でそんなことを考えていたのだが、しおらしく振る舞いナナリーのように可愛らしく甘えてくるC・Cの姿を想像して、しばらくのあいだルルシュは雨の降る音に交えて声を殺して笑い続けていた。

「 e n d e
」

S T A G E 1 5 ・ 6 5 「夜のガスパール」 (前書き)

本編の内容には1ピコグラムも触れてません。

STAGE 15・65 「夜のガスパール」

「音の絵」か。ラフマニノフの練習曲だな」

声をかけられるまで人の立っていたのにも気付かないでいたルルーシュは、とつさに鍵盤の上から指を外してギロリと背後を窺がった。

C・Cはまったく気にした様子もなく、むしろルルーシュの腰掛ける椅子の端にちょこんと腰を下ろしてきた。

ここのピアノの椅子は連弾も可能なように幅広に作ってあるので、細身な二人が腰を下ろしても充分な広さを残していたのだが、ルルーシュは露骨に機嫌を損ねた様子で視線を外した。

「……無粋な奴だ」

「どっちが無粋だ？ 演奏の途中で止めるなよ」

言って、続きを弾けとばかりに顎の先で鍵盤を示した。

ルルーシュはチツと小さく舌を鳴らしてから、ふたたび演奏を始めたが、

「なんだラヴェルか。」夜のガスパール”第2曲『絞首台』」つまりんあてつけだな」

C・Cはクスクスとひとりで愉しそうに笑った。

簡単に答えているのだが、まだ3小節しか弾いてなかったルルーシュは内心驚きを感じていた。

今度は演奏を続けたまま口を開いた。

「詳しいな。かなり意外だが」

C・Cはすぐには答えずしばらく口を閉ざしていたのだが、やがて冷淡に呟くように曲に乗せて歌った。

「鐘の音に交じって聞こえてくるのは、風か、死者のすすり泣きか、頭蓋骨から血のしたたる髪をむしっている黄金虫か

アロイジ

ウス・ベルトランの詩集の一篇だ。当時でも無名の詩人だったんだがな、有名な音楽家に気に入られたおかげで後世に残った。どうせなら第3曲の『スカルボ』を弾けよ」

「弾けるか、あんな難曲素人に」

「つまらん男だな。悪魔的な賑々しさがおまえに似合うと思ったのに」

本気で残念に思っているらしく唇の先を尖らせるようにして言うのける。

そもそも久方ぶりにピアノを弾く気になったのは、単なる気分転換と言うよりも憂さ晴らしの意味合いが強かった。

そこに横からうるさく口を挟んでくる女が存在が癪に障ってルルーシュはわざと返事をしないでいたのだが、

「飽きた。だったら」ヴァルトシュタイン」だ。ベートヴェンくらい弾けるだろう？」

と懲りずにC・C・は別な曲をリクエストしてくる。

この女が本当に忌々しいのは、いつだってルルーシュを簡単にその気にさせてしまうところだ。

「いちいち難しい曲ばかり」

「弾けるくせに」

ベートーヴェンのピアノソナタ第21番八長調。

14番の”月光”、23番の”熱情”と同じく別名のほうが有名な楽曲だ。

三楽章まで通すと30分弱の時間を要してしまうが、その間C・C・はじつと視線の先を鍵盤の上に据えたまま熱心に耳を傾けていた。

ルルーシュは3歳の頃からピアノのレッスンを受けて育ったが、まったくピアノに触れない時期も長かったため、そんな人間に簡単に弾ける曲ではなかった。

だが、なんと言っても相手はC・C・だ。そうした事情を承知の上で、平気で「ヘタクソ」ぐらいは言ってくれそうだなと思った。

だからほとんど意地でなんとか最後の和音まで無事に弾き終えて、思わず横目で「どうだ」と言わんばかりにC・Cの顔を覗いたら、見るからに目に涙を浮かべていたのでルルーシュのほうで硬直した。弾いたといっても最後までミスをしなかっただけで、曲想も何も膨らましようがない。客観的に聴くならば面白くない演奏だったと自覚していたので、余計に驚いてしまったわけだが。C・Cはふふっと照れているようにごくごく小さく笑った。

「……すまない。……つまらん思い出が、いや、いつたい何年ぶりに聴いたかな？」

思い出？

昔のことはまず絶対に自分のほうから口にしない。

その女がぼろりと言ったセリフに激しく興味を覚えてしまったが、それをあえて問い質してしまうような幼児性とは無縁でいたいタチだった。

我ながらつまらんとところにこだわる男だなと呆れながら、すぐにまた別な曲を弾き始めた。

C・Cは驚いたように横からルルーシュの顔を覗き込む。

「子犬のワルツ」？　なんだ、どうした？」

作曲者のシヨパンが、『子犬が自分の尻尾を追い掛け回している情景にヒントを得て作曲』したとも言われているとおり、先の曲に比べればあまりにテンポの軽い明るい曲だった。

「別に。…単に口直しだ。小難しい曲が続いたからな」

ルルーシュはぶつきらぼうにそう言つて、あとは寡黙に演奏を続けたが、1分少々で終わってしまう曲だったので、弾き終えた後もC・Cはニコニコとうれしそうに笑みを零していた。

それを横目に見ながらルルーシュは、専用のクロスで鍵盤の上に付着した自らの指紋を拭った。

「なんだ？　気持ちの悪い奴だな」

「別に？　けっこうおまえ私のことが好きなんだと思つてな」

「ふざけるな」

「そうか？ 私はけっこう好きなんだがなア」

「……え？」

思いがけない告白に思わずとっさに視線を返してしまったが、相手はやっぱりC・Cだった。

「おまえのその器用なところが好きなんだ。なにしろ退屈しないし、便利だからな」

と勝ち誇ったように言って笑った。

「 e n d e
」

TURN 09・125 「素朴な疑問」(前書き)

TURN・9でエリア11から中華連邦へ脱出した黒の騎士団のメンバーが抱いた「素朴な疑問」。
ほのぼのです。

「なんでアンタいつつも、その人形抱いてるのよ？」

カレンが疑問を発した瞬間に、イカルガの艦内にピンツと張り詰めた空気がみなぎった。

誰が禁句と定めたわけでもない。

けれども、皆が皆、内心ではそれを疑問に思っていた証だった。まるきり人形のような容姿をしているのに、傲岸不遜で通してしまっているC・Cのキャラクター。

その個性と、常にどこへ行くにも一緒に連れ添っているチーズくん。

ハッキリ言って違和感だ。

いや、見た目の雰囲気だけなら、これ以上もなくお似合いなわけだが。

高飛車なセリフを吐いている最中にも、まるきり手元の人形に甘えているような格好をしているわけだから、違和感に感じてしまうわけなのだ。

が、今までそれを、正面切って指摘する勇者は存在しなかった。指摘したが最後、何と言って反論されるのか想像できてしまうが故に 怖かったのだ。

誰もが皆、返事を返される瞬間を待ち、耳をそばだてているために生じてしまう沈黙。

キリリと研ぎ澄まされている緊張感は、艦首ハドラン銃砲を発射

する瞬間にも匹敵する。

こうした種類の緊張感に慣れていない扇などは、ひたいに巻いたバンダナを密かにぐっしょり汗にぬらして、思わず握り締めている拳をブルブル小さく揺らしていた。

と、そのときだった。

「C・C、頼んでいた資料だが」

ブリッジ
艦橋に通じるエレベーターの扉が開いて、にわかに姿を現したのは、仮面の男ゼロ。黒の騎士団を率いる、こちらも高飛車が似合いな男の存在だった。

「おい、おまえちったア空気読めよッ！」と我慢できずに騒ぎ出す玉城の襟首を掴んで、南が静かに首を振りながら穏便に退場してゆく。

その背中を眺めながら、ゼロが怪訝そうな雰囲気では何しろ仮面で表情は皆目検討が付けられない。訊ねたが、まるきり動じた様子もなくC・Cが「気にするな」と一笑に付してしまった。

「資料なら、綺麗に耳を揃えて部屋に置いてあるはずだろう。おまえの目は節穴か？」

「あの部屋のどこが綺麗なんだ？ 少しは自分で片づけを」

「お断りだ。私は別に困ってない」

「馬鹿が。現に今、困っているでは無いか」

「困っているのは、おまえだ。必要なら、おまえが自分で片付けろ」

「どうして私が、おまえの尻拭いばかり」

「喜べ。仕事が増えて結構なことじゃないか」

「ふざけるな。いいから、早く資料を」

「フンッ、仕方の無い男だな。直接渡してやるから付いて来い」

「いちいち偉そうな女だ。そもそも、おまえは」

そう言いながら、ふたりの背中ではエレベーターの扉の向こう側に
吸い込まれ、^{ブリッジ}艦橋内には、にわか沈黙が訪れた。

「で、結局C・Cの返事はどうなったのよ？」

ややあつて、ラクシャータが気だるげに煙管を振り回しながら問
いを発したが、皆が皆、溜息を吐き出すばかりで、それに返事をす
る者は存在しなかった。

夫婦だ…。

皆が皆、内心ではこっさりそう呟きながら。

たとえばC・Cが抱いているのが本物の赤ちゃんでも、会話の
内容といい、ふたりの態度といい、大して違和感を覚えはしなかつ
ただろう。

いや、むしろそうした光景が、あまりに当然に目に馴染み過ぎて
いるものだから、今まで誰一人として疑問を発する必要を感じてな
かったのだ。

「……フツ、結婚式にも、あの仮面を付けたままなのかしらねエ？」

ややあつて、カレンが眉間に濃い皺を刻みながら冷たい躁り言を
発したが、それに機敏な反応を示したのは扇だった。

「そうだな！ 一日も早くそれを実現してやるためにも、もっと我
々で一致団結して！」

「そうだな！ 扇！」

「そうですね、扇さん！ がんばりましょう！」

にわかに騎士団一同の士気が上がった瞬間だった。

「ところで資料と言えば、私の渡した例のアレは、きっちり忘れず交換してくれたのだろうか？」

降下を続けているエレベーター内部でＣ・Ｃが訊ねると、ゼロルルーシュは、思い切り眉間に濃い皺を刻んだ。

「時間が掛かる。アツシュフォードに一度戻らなければならぬかな」

たちまちＣ・Ｃが、蔑みの様子も露わに鼻を鳴らした。

「本当に使えない男だな、人のことはとやかく言うクセに」

「使ッ：俺は今、忙しいんだ。おまえのワガママに付き合っている余裕は無い！」

「甲斐性の無い男だ。共犯者のささやかな願いくらい、文句を言わずに叶えろ」

「おまえの願いのどこがささやかだ！　そもそも、最初に交わしていた契約では、ひとつだけ願いを叶えると」

「おや？　『三つの願い』の逸話を知らないか？」

「はア？　……ああ、『三つだけ願いを叶えてやる』と悪い妖精に訊ねられるアレか」

「ああ。アレに対する正しい三つ目の答えは、『もうあと三つだけ願いを叶えろ』だ。おまえは堪え性の無い困った坊やだからな。手間を省いて、最初から三つ目の願いを要求してやっているんだ」

「ふざけるな。それでは俺は永遠に」

「嬉しいクセに」

「誰が嬉しいか！　そもそも、おまえは」

そう言いながら、ふたりの背中中は私室の中に消えたが、Ｃ・Ｃの運転するトレーラー内部に『チーズくん』グッズで構成されたハ

―レムが完成するのは、それから三日後のことだった。

「 e n d e
」

TURN 09・125 「素朴な疑問」(後書き)

純粹に作者の抱いていた疑問です。

しかも、TURN・10でC・Cが暁で出撃する前には艦橋に置いてあったはずのチーズくんが、TURN・11ではなぜだかC・Cの胸元に。

ルルシュがゼロの格好で、わざわざ運んでいたかと思うと愉しいです。

ありがとうございました！

「カレンのこともあるしな、ひとまずエリア11に戻る」

戦闘空母イカルガ。

その内部に黒の騎士団を率いる総帥・ゼロ専用を用意された居室は、艦内にしつらえられたプライベート・ルームのうちでも一番にゆとりのある面積を誇っている。

もちろんその割り当てに異議を唱える者など存在しなかったが、理由はそのリーダー性よりも、むしろ暗黙の了解で《二人部屋》として最初から考えられていたからだった。

一度の作戦が終了すると、ラクシャータ率いる技術部のメンバーを除いては、ほとんどのメンバーが許される範囲内で自由時間を満喫した。

家族単位、恋人同士で行動する者、仕事の延長で班単位で行動する者、そしてゼロのかたわらにはいつも決まってC・Cが。

玉置あたりはいまだに二人を愛人関係と決め付けているのだったが、最近ではもっぱら二人は単なる仕事上の付き合いというのがメンバー内における定説だ。

それでも正直C・Cがどうしてもゼロ専属の補佐的役割を果たしているのかは、誰一人として正しく把握している者はなかったが、そもそもゼロ本人が秘密の多い男でもあったので、それに付随する人間にまで関心を寄せている時間がもつたいないというのが実際のところだ。

セキュリティの面を考慮して、そこだけは特に綿密に設計された二重扉を抜けると、その奥には部屋の大半を占める書架が目立った飾りのない空間だ。

もつともC・Cは、目下最愛のキャラクターである《チーズくん》で、もつとファンシーかつポップに癒しの溢れる空間に改装したいと狙いを定めている最中だったが、生まれ持ったのハイソ志向であるルルーシュが雰囲気とその企てを圧倒している現状だ。

おかげで今になっても殺風景な部屋に足を踏み入れたC・Cは、少々意外だった男のセリフに呆れた様子で訊ね返した。

「中華連邦は？」

二度手間を嫌って部屋に入ったその足で直接クローゼットに向かったルルーシュは、とりあえずリラックスするために仮面を脱ぎ、マントを外した。

一方、袖のないフロックコートに近いデザインの上着を適当な場所に脱ぎ捨てたC・Cは、タンクトップにホットパンツという姿で応接スペースのベンチの上に転がった。

「たしかにまだ反対勢力は残っているが、民衆が立ち上がった以上、シンクーや藤堂の敵ではない。それに見てみたいだろう？ 心の力を」

言われてC・Cは、つい先ほどの一幕に思いを致した。

あのおときもてつきり《政略結婚》などと無粋な提案を示したディートハルトの意見を即刻取り入れるとばかり思っていたのだったが、
「成長したな、坊や」

「黙れ、魔女。ともかく、これでやっと本来の目的に向かえると言
うわけだ」

「教団か」

出歩く際には必ず持ち歩いているぬいぐるみに頬を預けると、C・Cは極力感情を消した声音でその言葉を発した。

「ああ。ギアスの使い手を生み出し、研究している組織。教団を押さえれば、ギアスの面でも皇帝を上回れる」

「だが、教団の存在は、人の世から周到に隠されてきた。それに、

当主が交代することに教団はその位置を変えている」

「今の教団は、中華連邦の領土内にあるのは確かなんだな？」

その間にも、ギアス抑止用のコンタクトレンズを装着してC・C・の元に戻ってきたルルーシュは、会話を続けながら平然とC・C・の世話焼きに余念がない。

C・C・は、ルルーシュが黙々とC・C・の衣服を片付けてゆく様子に目を細め、会話を続ける。

「私の後の当主V・V・はそう言った。しかし、この国は広い。口とかいう奴も詳しい位置はわからないのだろうか？　どうやって探し出す」

「だからこの国を手に入れたい。物資の流通、電力の供給、通信記録　痕跡は必ずある」

「国の力を使って捜すつもりか」

ゼロのマントに比べれば形状の複雑なC・C・の上着を丁寧に整え終えたルルーシュは、再びクローゼットに向かって歩みを進めた。背中を向けた状態で次第に離れてゆくのだが、ゼロを演じているときのルルーシュは持ち前の低音に磨きがかかっていて、少々の呟きでも容易にC・C・の耳に届いた。

もつともこのときC・C・は、今更聞くまでもなくルルーシュの返答には大方の予想が付いていたのだが。

「中華連邦は大きな国だからな。C・C・はこちらに残り、教団の情報が入り次第俺に連絡をしてくれ」

ほとんどC・C・が予測したのと同じ一字一句違わぬセリフを発して、振り向いたルルーシュが返事を促がした。

C・C・は、怠惰に身体を寛がせている状態で、それを言う男の顔を眺める。

そのときC・C・の気持ちの大半を占めていたのは、予測できていたのに回避する術を持たない自分に対するあきらめか、それとも最初から逆らうことを放棄している自分に対する落胆か、そのどちらがより強かったのだろうか。

そもそも契約者という関係は、別段四六時中の同伴を強制しているものではない。

それを承知しているからこそルルーシュも必要に応じてC・C・を適宜遠方へと配置した。

しかし、C・C・にとつては、今回のそれはよりにもよつての命令だ。

自分が以前深く関係していたところ。そして心情的にはもう二度と立ち入りたくないとさえ思っているところ。

そこに、あえて再度踏み込めとこの男は命令するのか。

「わかつたよ」

けれども、それがこの男と自分の契約関係であつたのだ。

ルルーシュが生きるための目的に必要と判断したことなら、自分は死力を尽くしてその願いを叶えてやる。

だから何ひとつとして本心は、不安も、不満も、伝えない。

だが、心情的には行動を起こす以前から疲労を余儀なくされる命令だ。

それだけでなくこの半日の戦闘で、C・C・は疲労とストレスを抱え込んでいたのだ。単身ナイトメア・暁・に騎乗して出陣した。その際アーニヤの騎乗するモルドレッドに接触して、思いがけなく手に入れてしまった真実の映像に少なからず受けたショックを引きずっていたのだ。

もちろん現状ではまだC・C・の口からその真実をルルーシュに伝えるわけにはいかない。

だが、それを知っていて秘匿しなければならない。知らないで済んでいたなら何も考える必要のなかったはずの状況が、C・C・の心理面に多大なる負荷をかけてしまうのだ。

次第に会話する気力も失せてきて、このまましばらく仮眠でもと考えていたときだった。

「ところで、Ｃ・Ｃ・？」

一方、戦略や知略に関しては人並み外れて才走っているルルーシユも、繊細な人の感情部分には呆れるほどに疎かった。

もちろんＣ・Ｃ・が秘かに抱えるストレスの原因に思い至るはずもなく、あくまで必要な話は終わったとばかりに口調を変えて断定的に訊ねてきた。

「どうせこれから暇なんだろう？ 風呂に入ろう」

「何？」

Ｃ・Ｃ・は自分の耳を疑った。

じつとルルーシユを凝視しながら、なにやら恐る恐るベンチの上に身を起こした。

だが、平然とした様子でシャツとジーンズに服装を改めてきたルルーシユは、まるきり作戦の伝達を続けているような表情で続けた。「咲世子に取り寄せを依頼していた石鹼が、つい三日前によく到着したんだ。さすがに使い切れるものではないからな、残りはＣ・Ｃ・が使ってくれて結構だ」

「ああ、わかった。そうする」

要するに、使い古しの石鹼を分けてやると偉そうに言っているのだ。

そう、Ｃ・Ｃ・が納得しかけたところで、さらにルルーシユは続けた。

「今から用意をしてきてやるから、呼んだら来い。ついでに髪と身体を洗ってやる」

「だからどうしてそうなる！」

やはり聞き間違いではなかった証拠に念を押されて、思わず声を荒げてしまったＣ・Ｃ・だったが、ルルーシユは怪訝そうな表情でそんなＣ・Ｃ・を見つめている。

「どうして、とは？」

「……それが理解できない時点でおまえは立派な変態だ。とうとうサカリが付いたか、イロガキめ。私はおまえの相手などは願ひ下げだ」

「フツ、安心しろ。最後のそれに関してはまったくの同意見だ。ただ、普段なら戦況を傍観しているだけのおまえに、想定外の心労をかけてしまったからな。中華連邦^コに滞在しているうちに、借りを返してスッキリしておきたいだけだ。寝転がっているだけなら、そこにそうしているのも、風呂に入るのも一緒だろう？」

いつもと変わらぬ上から目線で押し付けがましく言い置いて、自分分はさつさとバスルームのある方向に歩いて行ってしまった。

呆氣にとられたＣ・Ｃは、ルルーシュの姿が消えるのを確認するなり空中の一点に向かって噛み付いた。

「おい、おまえの息子の精神構造はどうかしているぞ？ 一歩間違えばテロリストの総帥どころか、パワハラまがいのイロガキだ！ いくら私でも、そんな相手に付き合うのはご免だからな！」

しかし、こうした際には放っておいても話しかけてくるはずのマリアンヌは、どうやら静観の立場を守るつもりでいるらしく、ひとしきりＣ・Ｃがボヤき続けても、最後までひとことも答えはしなかった。

行政特区日本の再興を機に、ゼロは国外追放。

その決定の裏をかく奇策により百万人が日本を脱出するにあたって、当面の生活に必要な消耗品は、中華連邦から貸与された人工島 蓬萊島にあらかじめ大量に備蓄してあった。

物資だけではない、日本から連れてきた大半の日本人もここで暮らすのだ。

個々の家族構成で平等に割り振られた居住区には、扇や藤堂といった最前線で戦闘に参加しているメンバー達の住まいも存在している。なかには「どうせ帰る暇はないだろうから」と不要視する声もあったのだが、やはりここは日本での生活を踏襲したのだ。

しかし、ゼロとC・C・に限ってはそうもいかない。

ゼロの場合、家に帰る暇があるのだったら、ルルーシュとしてアツシュフォード学園に戻る必要があるわけだし、C・C・の場合は、仮にもブリタニア皇室から生死を問わず追われる身だ。たとえその点を充分に考慮した上で専用の居室を設けても、問題を起こさず平穩無事に近所付き合いができるようには思えなかったし、近い将来何らかの形でルルーシュの手を焼かせるであろうことは目に見えていた。だから、監視の必要もないイカルガの内部に手っ取り早く生活に耐えられるだけの設備を充足させたのだ。

その結果、以前からルルーシュの頭を悩ませ続けていた先着順でひとつのベッドを奪い合う必要はなくなった。部屋の入り口はひとつだが、寝室は別々に設けてある。ほかに、ちょっとした軽食ならいつでも作れるように簡易なキッチンや冷蔵庫も備えてあったし、内密の情報操作の際に必要なPCLームも設置してある。

ただし、あくまで機能面ばかりを追及した結果により、風呂には浴槽を排除してシャワーブースのみを設置してあったのだ。たが。

そもそも一個の独立した戦艦にシャワールームを設置してあること自体が贅沢な話だとルルーシュは思っていた。食事ならいくらでも工夫次第でスリム化を計るのは可能だったが、飲料目的以外にナイトメアの整備にも必要となってくる水だけはそうもいかない。その重さから積載可能な量にも限度がある。だったら、少々の不便は我慢するしかないだろう。そう思えばこそ、それでもギリギリのラインまで配慮したつもりでいたのだが、これに猛然と抗議したのはC・C・だった。

最初は聞き流すつもりでいたルルーシュだったが、バスタブを置くほうが節水が可能だと実際の数値を示して反論してきたＣ・Ｃの剣幕に、結局は押される形でＣ・Ｃの好きに任せたのだった。そういうわけで、このイカルガの中では唯一、備え付けの浴槽がここにはある。

まさかにも、そこにルルーシュと一緒に入る日が来ようとは夢にも思わなかったＣ・Ｃだったが。

「ああ、ちょうど良いところに来たな、Ｃ・Ｃ。ところで、頭と身体どっちを先に洗うんだ？」

命令する者、それに従う者。

その命令が愚直を極めていた場合、主従のどちらがより愚かを極めていけるのだろうか？

最後までそんなことを考えていたＣ・Ｃだったが、マリアンヌがひとことも返事をしないのがまたさらに癪に障って、だったらいつそのこと当て付けのつもりで最初から全裸で姿を現した。

一方、バスタブの中に湯を溜めながら準備に勤しんでいたルルーシュは、そんなＣ・Ｃの姿を正面から眺めても、ちらりとも動揺しなかった。あくまで機械的に、バスタブの中にＣ・Ｃを促がした。

「頭だ」

なかば自棄になってＣ・Ｃは、大股でバスタブを跨いだ。

「わかった。すこしだけ待っている」

そう断ってバスルームの入り口に向かったルルーシュは、フェイスタオルを手にすぐ戻ってきた。

ちなみにこちらはズボンの裾とシャツの袖を捲り上げている以外は完全に着衣の状態そのままだ。

「では、仰向いてこのタオルを枕にしてみる。バスタブに沿って背中を密着させたら身体も滑らないはずだ」

言われた通りにしてやると、ほぼ真上から自分を見下ろすルルーシュと目が合った。

「おまえ、すこしは恥ずかしくないのか？」

「俺が？」

かなり本気で怒っているものだから、なにやら殺意めいた憤りが露骨に声に露わになってしまったが、それでもルルーシュは平然とした様子を崩さず鼻で笑った。

「今更そんな無理難題を言われてもな。どうせいつも裸みたいな格好でウロウロしているのはおまえだ」

要するに、見慣れていると言いたいのだろうが、しかし本当に全裸でいるのと、全裸みたいな格好でいるのでは大きく違うとＣ．は思った。

それに、本当の全裸を晒した経験は、まだ数えるほどしかなかったはずだ。

「それにしても、ずいぶんと扱いに手馴れているじゃないか。実のところ、影で女でも買った経験があるんじゃないのか？」

怒らせるつもりで低俗な話題を振ってみせると、案の定ルルーシュの瞳に力が籠もった。

ルルーシュが本気で怒っていることを知ることは、ほかの誰よりＣ．Ｃ．にとつては容易なことだった。

自身の力だけではもはや制御のできなくなってしまったギアスの力。それを押さえ込むために特殊なコンタクトレンズを着用しているが、それでもなければこの瞳は爛々と赤く輝いて見せていることだろう。それが証拠にＣ．Ｃ．のひたいが鈍く疼いた。ルルーシュの怒りの波動によって左目に圧力が加わるので、その度合いによってはＣ．Ｃ．もひたいに疼くような刺激を共有しているのだ。

ルルーシュは無言で一度身を屈めると、シャワーの湯の温度を確認し始めた。

「馬鹿か、おまえは。単に、日本式の風呂はナナリーがひとり入るには危険だった、それだけだ。初めのうちは風呂さえ用意されてなかったからな」

七年前　突然のマリアンヌ后妃崩御の後、当時九つと七つだった子供が敵国の真ん中に《留学》させられた。外交の道具としてなかば公然と《処分》されてしまったようなものだった。

それ以前は服一枚を着替える際にも大勢の侍従に囲まれて育ってきた子供二人に《新しい住まい》として用意されたのは、長年の風雨に晒されて朽ち果てる寸前の小さな土蔵だった。本宅である枢木邸で不要になった品々を雑多に詰め込まれたままの状態で、寝場所はおろか車椅子のナナリーが満足に移動する隙間すら残されてはいなかった。土蔵の前も後ろも鬱蒼と茂った雑木林に囲まれて、明かり取りの小窓がひとつある以外は窓のひとつもない、湿気と埃にまみれた土くれの廃屋。

「なら、どうしていたんだ？」

もちろんＣ・Ｃは、その蔵の有様も、後の子供二人の動向も自分の目で見て知っていた。

だが、肝心なのは、そのことをルルーシュ本人が知らないということだ。当然の疑問として訊ねると、ルルーシュは長い睫毛の下に濃い影を落として、もの憂く、だが動じることなく淡々と答えた。

「ああ、スザクに言っただけ大きなタライを貸してもらった。湯を沸かすことは出来たから、ナナリーが見えないことに慣れるまでは俺が手伝ってやっていたんだ。しばらくして、ずいぶん生活環境は改善されたんだが、それでもナナリーの背丈ほど深さのある湯船にナナリーが一人で入るのは無茶な話だ。だから、俺が手伝ってやるしか方法がなかった。さすがにアッシュフォードに来てからは咲世子に任せていたんだが。それでも、咲世子が数日家を開ける際には、ナナリーの髪を洗って、乾かしてやるのが俺の役割だったんだ」

Ｃ・Ｃは『なるほど』と大きくひとつ納得をした。

と言っても、別にルルーシュの説明を納得したわけではなかった

が。

「流すぞ」

そっけなく言ってルルーシュは、手馴れた様子でC・Cの長い髪を湯に浸し始めた。

髪の生え際、頭頂部と順にシャワーのノズルを移動させると、じきに水気を含んで重みの増した緑の髪の毛が、一本の太い束となつてルルーシュの足元スレスレにまっすぐ伸びてゆく。

「……綺麗な髪だな」

「うん？」

それだけでなくも溜まっていた疲労と汗をたっぷりの熱い湯に洗い流される心地好さも手伝って、その頃にはもうすっかりされるがままに身を預けて目を閉じていたC・Cは、独り言めいたルルーシュの呟きに薄目を開いた。

ルルーシュは、C・Cの髪を濡らす作業を愉しんでいるかのように、伏せた目元と口元にごくごく淡く微笑みを浮かべていた。

「普段はキャベツみたいな色だと思っただが、濡れるとリキュールみたいな色合いになる。光に透かすとまるで芽吹いたばかりの若葉みたいだ。もとの地毛がこうなのか？」

「いったい誰に向かって笑っているんだ？ と、よっぽど混ぜ返してやろうかと思った。」

しかし、内心ではどうせナナリーと過ごしていた楽しい日々の思い出を彷彿とでもしているのだろう。めずらしく愉しそうにしているルルーシュを茶化すのはさすがに大人気ないと思った。

C・Cは再び目を閉じると静かに笑った。

「さあな。昔のことは忘れてしまったよ」

「そうか」

ルルーシュもそれ以上は追求しようとしなかった。

やがて十分に濡らし終えたと見てシャワーを止めると、数度カシユツカシユツと何かを操作する音が響いた。

まもなくC・Cの鼻腔を甘くくすぐるその香り。

「……ローズ？ スズラン？ いや、違うな。何の香りだ？」

「ああ、スミレだそうだ」

「スミレか。……どうりで懐かしい」

「何だ、知っているのか？」

「昔な、……多少」

一度目は軽く洗っただけで流して、二度目はたっぷり時間を要して洗った。

スミレの花の匂いの香るシャンプーの泡立ち。自分はタオルを枕に仰向いているだけだったので、実に気楽なものだった。時折ルルーシュの片手がC・Cの後頭部を持ち上げては、うなじの付近も全部余すことなく綺麗に洗い上げてくれている。

おそらくきつとその昔、愛しい妹ナナリーに要していたのと同じやり方で。

そもそも常日頃からルルーシュが実にさりげなくC・Cの世話を焼いているのは、長年ナナリーの世話を焼いてきて身体が覚えてしまっているからだだった。

無意識のレベルですら、そこに対象が存在さえすれば条件反射で動いてしまうのだ。

いや、むしろ無意識の状態では、世話を焼く相手を探している？

「日ごろから特に手入れをしているようにも見えないのにな、クセのひとつもない本当に綺麗な髪だ」

両手の指の隙間で漉くようにして何度もルルーシュの手指が行き来する。そのたび頭皮をツンと引っ張られはするのだが、その力加減がまた絶妙だった。油断をすると手放しで微笑みそうになってしまう。

「さつきからやたらに髪を褒めるな。ひよっとしたら髪フェチか？」
「いちいち絡む女だな。ずっとナナリーが羨ましがっていたんだ。」

そこだけは母親からの遺伝ではないからな、髪の色も髪質も

ナナリー、ナナリー、またナナリーか。

嫌でも次第に正しい理由を認識させられてしまってる。

まったく、おまえのやさしさは残酷だな、ルルーシュ。

いつそのことおまえのナナリーに対する愛情が、肉欲に絡んだものだったら良かったのに。

そうすればきっと誰だって簡単におまえをあきらめ切れるはずだから。

おそらくルルーシュ本人も母親からの愛情を求めて止まない幼少時代から口くね後継人も存在せぬままに、誰にも頼れず自分ひとりの力だけでナナリーを守りながらずっと長らえてきたからだろう。

いつそルルーシュのナナリーに対する愛情は、若い母親が初めて生んだ自分の子供を盲目的に溺愛している感覚にほど近い。

しかし、相手がたとえ妹でも、自分のことなど二の次に誰かを愛する愛し仕方をルルーシュはちゃんと知っている。

その愛情の基盤があるからこそ、時に驚くほどにルルーシュが個人に向ける愛情も温容だ。

一度自分の懷まで入れてしまった人間に対しては、どこまでも寛容に愛情を注ぐ手段を惜しまない。

そんな男の、恋の意味において限定した《愛情》だけが、まだ誰の手中にも収まっていないのだ。

どうしてそれを求めないでいられよう？

誰に何を教えられなくてもそうしたことを本能的に嗅ぎ付けてしまふ女達は、水面下でどうかして彼の気持ちを手に入れたいと画策する。

しかし、下手な女以上に完成された品格と匂い立つような色気がルルーシュ本人に備わっているものだから、まずもって女を武器にした手段では勝算はあり得ない。

だからといって、先日天子を苦手としていたように、若ければ良いというわけでもなさそうだ。

やはり、ここは智謀策略に関係なく

「案外、何も考えずに体当たりで押しまくるのが一番なのかもしれないな……」

たとえば、そう、あのシャーリーのように。

退屈と言ってしまうのはきつと贅沢なのだろう、けれども動くことの出来ない手持ち無沙汰から、とりあえず思いついただけに過ぎない思索に励んでいたＣ・Ｃ。だったが、しばらく寡黙に指を動かしていたルルーシュに頭の上から声を掛けられハッとした。

「今度は何の相談だ？ 誰か殺したい相手の顔でも思い出したか、魔女」

それまで独り言を言ったことすら気付いてなかったＣ・Ｃは、思わず内心ギョツとした。

だが、そこは年の功でルルーシュ相手に気取られるほど青くはない。

「おかげさまで退屈でな。いい加減、首が痛いぞ。まだなのか？」

「まったく、惚れ惚れするほど偉そうな奴だな。この状況で」

「惚れるなよ、迷惑だ」

「誰が。まったく、感謝しろとまでは言わないから、もうすこしくらい殊勝な態度でいてくれても損はないと思うがな」

「はん、たとえば？ ナナリーのようにか」

「何？」

たちまち忙しく動いていたルルーシュの手指が止まった。

口で言うほどこうしたやり取りを嫌ってはない証拠に、それまでは笑う余裕さえ見せていたくせに。いざナナリーを名指ししてやった途端にこの始末だ。

本当に最低な男だなとＣ・Ｃは思った。

さんざん他人の身体を身代わりの人形代わりに扱っておきながら、まさか自分では気付いてなかったとでも言うつもりか　おまえが？
何が感謝だ、借りを返すだ。結局のところ、弱った自分の気持ち
を慰めたい一心ではないか。

ブリタニア皇帝の策略により、絶望的な立場に追い込まれてしまったナナリーは、ルルーシュの危惧していた通り強制的にエリア1
1の総督という《人身御供》の立場に祭り上げられてしまった。

それを信じて疑わなかったものだから、意を決して奪還作戦を
行したところが、実際はナナリー本人の意思で望んだことだと教え
られ、むしろゼロとしての自分の存在のほうを否定されてしまった。
自暴自棄に陥ってしまったルルーシュは、それでもなんとか自分
の存在理由を取り戻し、最終的にはナナリーの意思を最大限に尊重
する形で中華連邦に亡命したものの、実の妹により傷つけられてし
まった内心と、ナナリーのそばに居場所をなくしてしまったこと
による寂寥感は今も色濃くルルーシュの胸の奥に巣食っている。

きっとC・Cでなくとも、相手は誰でも構わなかったのだ。

こうして黙って自分の言うとおりに従ってくれる女であったなら
つかのま落ちた完全なる沈黙に、C・Cの髪から滴った水音が
パタパタツと高く響いた。

C・Cはとっさに閉じていた目を開けかけて、寸前で顔の周
りを覆った泡の存在に気付いた。サワサワサワと細かく泡の弾ける音
が聞こえる。

ルルーシュが丁寧に立てた泡の肌理は繊細で、ただの気泡である
くせに触れている肌の部分が布を纏っているように暖かい。

C・Cはそうしたすべての感覚に、まるきり陶醉しているよう
な溜息を大きくひとつ吐き出した。

「ルルーシュ」

「……何だ」

「恋をしるよ」

「なんだと？」

「とぼけるな。私は真面目な話をしている」

目の上に落ちていた泡の塊を手で拭くと、Ｃ・Ｃ・はうつすら薄目を開けてルルーシユを見た。

ルルーシユは、怪訝そうな表情でＣ・Ｃ・を見下ろしていたのだ。だが、その頬には隠しようのない朱色がうつすら上っていた。

まったく、これだから童貞は。どこまでおまえはウブな坊やでいるつもりかと、Ｃ・Ｃ・はいささか腹立たしく思った。

「気に入らないんだよ。おまえは悪魔的に非情に徹してられるが、時々目を疑う場面で恐ろしいほどに脆くなる。計算では計り知れない理屈のあることに、そろそろ気付いてもいいはずだろう？　だから手っ取り早く『恋をしろ』と言っただ。恋なら理想的におまえのその脆弱な精神を鍛え直してくれるぞ？」

Ｃ・Ｃ・の瞳を見つめ返ししながら至近で揺れ続けていた眼差しが、言葉の途中で耐え切れないように逸らされてしまった。

しかし、瞳が言葉を読み取るわけではない。その耳に言葉を直接ぶつけてやれば今のところは充分だったのだ。

「断言しておくが、おまえのその脆さはいつの日にかおまえ自身を滅ぼす。つまらない弱点を突かれて、おまえに死なれてもらっては困るんだ」

目を逸らしてもなお言葉が届いてしまっている証拠に、横顔に垣間見える瞳の表面は先より動揺を露わにしていた。

だが、沈黙にすら我慢し切れないといった様子で、にわかに唇をグツと引き結ぶと次の行動に打って出た。

「……………流すぞ」

「待て、ルルーッぐ　ふっ」

問答無用でＣ・Ｃ・の頭部にシャワーを使い始めたルルーシユに、とっさに対処し切れなかったＣ・Ｃ・は、思い切り鼻から水を吸い込んでしまっただけのあいだ本気でむせていた。

頭の上でそれを傍観している悪魔は、露骨にくつくつと喉を鳴らして笑って見せている。

「こ、この悪魔がッ！……ほ、本気で死ぬと思ったぞッ」

まだ苦しい息の下から怒鳴り返すと、ルルーシュは冷え冷えとした表情でそれを見返した。

「ほう、おまえでも死ぬのか？」

C・Cは、とつさに目の下に皺を刻んで目のルルーシュを睨め付ける。

「死ぬるさ、それ相応の痛みも感じる」

「知っている。だから、二度とおまえを死なせはしないと俺は誓った。すくなくとも俺の共犯者でいる間はな。くだらない心配は無用だ」

あくまで高飛車な声音で命令して、ルルーシュはひどく優しく繊細な動きでC・Cの髪の毛の洗浄作業を再開した。

その態度のどこが悪魔的でないのかとC・Cは思ったが、今度のそれは口に出すのが癪だったので黙っておくことにした。

何度も何度もルルーシュの細い指先が、軽くC・Cの頭皮に触れては行き過ぎる。

ひとりで怒っているのが馬鹿馬鹿しくなるくらいに、その指先の感触だけはやさしいのだ。まるきりハープが何かを奏でているようなやり方だった。ルルーシュの動きのひとつひとつが音楽的な癒しに満ちている。

自分でも気付かぬうちにC・Cは、ふたたび静かに瞳を閉ざしていた。

心地の好い湯の感触に、にわかに苛立った気持ちの波形が徐々になだらかに静まってゆく様子をすこし他人事の気持ちで眺めていた。きっと相手がナナリー本人だったら、今の状況にナナリーを寛げるための豊富な話題と、心からの慈しみに満ちた明るい笑顔が振り撒かれているのだろう。

可愛げのない女で悪かったな。

こつも露骨に比較されてしまえば、C・C・でなくとも思わずボヤいてしまうというものだ。

だからといって、C・C・には逆立ちしてもナナリーのようにはなれない。

思うだに、こいつの妹というのはそれだけでずいぶん希少な存在だと思つたが、それも果たしてどうだろう？ ナナリーの性格がアレだから単なる美しい兄妹愛に収まっているのだが、たとえばもっと利かん気の強いタイプであっても、ルルーシュなら変わらず惜しみなく愛情を注ぎ続けていたのかもしれない。

いや、そもそもこうして離れて過ごす羽目にさえ陥つてなかったら、そのうちあのナナリーでさえも口うるさい兄の干渉を迷惑にすら思い始めていたのかもしれない。

お兄様は、少々わたくしに対して過保護すぎるのです。それだから恋人のひとりもお作りになれないのよ。

ナ、ナナリー！ 俺はおまえのためを思つて今まで……ッ！

それが息苦しいと申しておりますのよ。

ナッ、ナナリー……ッ！！！！

そのときの光景が手に取るように想像できるようだった。

もつとも、ナナリーのほうが兄に比べれば、ずっと辛抱強いタチだったから、よっぽどのことでもない限り好き放題に兄に構われ続けてやっていたのだろうが。

そんなことを想像していたものだから、隠していたつもりでも笑いの気配は伝わってしまったようだった。

ルルーシュが口の中だけで何事かを呟いた。

「おかしな奴だ」とでも言つたのだろうか？

本当のことを教えてやったら、また全身の毛を逆立てて怒って見せるだろうから。さすがに懲りているC・C・は、ひそかに笑っているだけで溜飲を下げることにした。

ややあつて、丁寧に泡を流し終えた洗い髪を、ルルーシュはタオル一本で器用に頭の上に結び上げた。

本当に、いちいち嫌味で混ぜ返すのが面倒になるくらい変なところで手馴れた男だ。

「さあ、終わったぞ。バスタブの外に足を出せ、片足ずつだ」

「何？」

かろうじて嫌味を口にするのは我慢したC・Cだったが、さすがに今度のそれは聞き捨てならない。

洗髪が終わって、ようやく取り戻した視線の先で鋭くルルーシュを睨め付けた。が、当のルルーシュはこの期に及んでも「なぜ睨む？」と謂わんばかりに、かえって不審げに目を見張ってみせる始末だ。

「やっぱりおまえは病気だ。以前から、そうではないかと思っただんだがな、しかし今なら心底断言してやれるぞ」

「だから、おまえのほうこそどうしてそうなる？ 頭が終わったから、次は身体を洗ってやると言っているんだ。極めて理に適った正論じゃないか」

そののどがだ！！

返す返すもそれがわからない時点で、自分の口から堂々と変態の名乗りを上げているようなものだった。

いや、いつそ、純情の皮を被ったセクハラか？

この際、せいぜい辛辣な嫌味の応酬でルルーシュをやり込めてやるうかと思ったが、やっぱり今度もC・Cは止めてしまった。

変わりに、むしろ精一杯煽情的にバスタブから足を突き出した。

「これでいいのか？」

不必要に胸の谷間も強調して、作為的に目のやり場を誘導して見せた。

「ああ、その調子でしばらくじっとしている」

おいつ、マリアンヌッ！！！！

ブチブチブチッと血管の切れる音を聞きながら、頭の中で怒号に近い呼びかけを試みたのだったが、やはりマリアンヌからの応答はない。

しかし、なぜかしら笑いをかみ殺しているような気配だけは伝わってくるものだから、なおさらのこと業腹だった。

そんな事情は露知らずあくまで機械的に作業を進めているルル―シユは、冷めてしまった湯を入れ替えるために一度バスタブの栓を解除した。

流れてゆく湯を追うように、一気にほとばしり始める熱いお湯。だが、浸かるのが目的ではなかったから、Ｃ・Ｃ・の臍の上を浸したところでまた湯を止めてしまった。

あらかた先の湯が流れ切ったところで再び栓をして、バスタブの中に直接バスジェルを適量落とし込んでいたから、湯量は少なくともＣ・Ｃ・の胸の位置くらいまでは盛大な泡が覆っていた。

たちまちシンツと湯の注ぐ音が静まって、湯の香に混じった甘い匂いがＣ・Ｃ・の鼻腔を満たした。

じきに鼻が慣れてしまったのか次第に匂いは薄れていってしまっただが、ためにしに泡の塊を片手で掬うと、パチパチパチと幽玄な破裂音を響かせながら新たな香りが淡く香った。

「こつちもスミレか、良い匂いだな。しかし贅沢な男だ。正直おまえにこんな少女趣味があるとは意外だぞ」

「贅沢か？ たかが石鹸だ。昔から使い慣れているだけだ」

平然と返して見る男は、やはり手にしたタオルで腹の立つほど機械的にＣ・Ｃ・の足の指まで洗っている。

しかし、そこでようやくＣ・Ｃ・は『なるほど』と先からの疑問に納得をした。

昔からというならば、それはおそらくマリアンヌの愛用した品だ

ったのだ。

外国から取り寄せようと思えば不必要に高価になってしまうが、このフランス製の石鹸は今どきにしては珍しく植物油脂から得られた石鹼素地を100%使用していて、余分な化学物質は一切含んでいない。その製法を創業以来二百年以上もずっと継続しているはずだったから、とりわけ刺激に対して敏感な子供の肌には安心して使えたはずだ。しかも、特徴となるこの香りも香料を使用しないで、純粋なスミレから抽出したエッセンスだ。匂いに慣れることはあっても、むせるようなくどさがないのも納得だ。しかし。

こいつの精神世界は、本当に血の繋がりで出来ているのだな。

今でこそ殺したいほどに憎んでいるシャルル・ジ・ブリタニアにしてもその一員だ。とてつもなく限られた人間関係だけでルルーシユの内なる世界は構成されている。

「やっぱりおまえは恋をするべきだと思うぞ？ ルルーシユ」

先ほど返答の得られなかった問いを、ふたたびC・Cは溜息まじりに持ち出した。

自分のように関わってきた人間が記憶の及ばぬほどに多すぎるのもどうかと思うが、その分得られた見識量も途方もない。

経験とは、すなわち余裕の幅を広げることだ。

要するに、ルルーシユのような立場にある男ならいずれは必ず必要になる人生感だと思うのだが、今は黙々とC・Cの腕を洗っているルルーシユはわずかに目を細めると鼻で笑った。

「今日のおまえは、よっぽどどうかしているな。それとも、ついに俺に惚れたか？」

「そうだと言ったらどうするつもりだ？」

初めからまるきり聞き耳を持たない態度が癪に障って、C・C・

はせいぜい真面目な表情で問い返した。

とつさにハツと息を呑むくらい可愛げのある男だったらまだマシだったが、ルルーシュはあくまで淡々とした様子を崩さずにＣ・Ｃの腕を磨き上げている。

「……綺麗な身体だな」

「何？」

むしろＣ・Ｃのほうが今度もハツとさせられた。

ルルーシュは、Ｃ・Ｃの首筋や胸元に手を伸ばしながら、微かに疲れたように笑った。

「妙な心配をしなくても、おまえの身体は綺麗だと思う。その美しさに感動すら覚える。だが、それだけだ。きつとりヴァルあたりなら必ずしてみせるだろう反応は、今の俺には起こらない」

そのセリフをルルーシュは、Ｃ・Ｃの胸に刻まれた残酷な紋章に指を這わせながら呟いた。

いつものＣ・Ｃだったなら、それはもつとも嫌悪する行為のはずだった。とつさにルルーシュの手を振り払うつもりでいたのだが、どうしたわけか指の一本も動かすことが出来ずにいた。

内心ではかなり混乱しながら、Ｃ・Ｃも声を落として訊いていた。

「それは……私がおまえの契約者だからか？」

「そうじゃない」

ルルーシュは反対側のＣ・Ｃの腕を掴み取ると、また機械的に白く透き通った肌の表面に純白の泡を塗りつけ始めた。

「……怖いのだ」

「怖い？」

淡々と手指の作業を続けながら、ルルーシュは心持ち俯いた。

長い前髪が彼の心を映し出す瞳の様子を隠してしまう。

「……おまえでもいい。カレンでも 誰でもいい。いつの日にか心の赴くままに、ナナリー以外の誰かに心を奪われる……そのとき誰が俺の代わりにナナリーを守ればいい？」

「おまえ…」

「それでも自覚しているさ。俺は同時にふたりの人間は守れない。そこまで器用なタチじゃない。だからと言って、意識的に気持ちをセーブしているつもりもないから、本当は生まれつきそうした感情に欠けているだけかもしれないが」

「シャーリーもか？」

意識的に避けたのだらう。その名前をあえて口にしてやると、一瞬だけルルーシュの眉間に皺が寄る。

その反応だけを見ても、あるいはあの女に対してだけは本気なのかと思ったが、

「今の俺では、ふたりは同時に選べない」

頑固なまでに同じセリフをくり返した。

C・Cは、精神的疲労の増してしまったような心境で重々しく息を吐いてしまったが、淡々と腕を洗い終えたルルーシュが「背中を向ける」と指示してきたので、逆らうのも煩わしいような心境だったC・Cは何も考えずに素直に従った。

狭いバスタブのことだったので、クルリと容易に方向転換するわけにもいかない。仕方がないのでやや変則的にバスタブの縁に肘を突いて凭れかかると、背筋を伸ばして膝を崩した。

だが、そうして初めてルルーシュの視線を目視で確認できなくなってしまったことで、意外なことにC・Cはすこし戸惑いを感じた。

年若い男女がふたりきり。しかも女のほうはまるで無防備に全裸を晒しているのである。だからすこしくらいなら緊張しても当然だと思ったが、悠長なことに今までのすこしもその必要を感じてなかったのだ。

まったく、ルルーシュのことばかりをとにかく言えたものではない。

ルルーシュは、タオル越しではない指先でC・Cの肩甲骨に触れると、そのままそつと静かにその形を辿った。

本来ならば、ぴくりと身体を震わせて緊張しても不思議でないシチュエーションだったが、その接触によりＣ・Ｃ・はむしろ緊張を解した。

これだけ長く二人のときを過ごしていても、相変わらず何を考えているのか理解しがたい男だ。そのせいか、触れたり話したり、何かしらの接触を持っているときのほうが、こっちも怠惰に寛いで彼の動向を見守っていられる。

左右の肩甲骨を等分に辿り終えた指先は、わずかな迷いも見せずにもそのまま背骨のラインを辿り始めた。

Ｃ・Ｃ・は今、その背筋をすつきり伸ばしている状態だったので、豊かな泡はＣ・Ｃ・の尻の膨らみをうつすら透かして見せていた。いったいどうするつもりかと思ったら、どうやら脊柱せきちゅうの終点がルルーシュの探求の終点だったらしい。そのまま何事もなかった様子で、タオルの泡で背中をこすり始めた。

なんとなくだがＣ・Ｃ・は、途中から瞳を閉ざしてルルーシュの好きに身体を任せていた。

ルルーシュの指先が時折触れてゆく感触と、その息遣いだけに意識を伸ばして聞いていた。

「……だが、それはナナリーが自分で見つける人生だ。いずれ必ずおまえの出番はなくなる」

何らかの言葉の反撃をルルーシュも予測していたのだろう。今度は手指の動きこそ止まりはしなかったが、とつさに怒りをこらえるようにして息を止めたことにはＣ・Ｃ・も気付いていた。

やがて、あくまで平静を装って息を吹き返したルルーシュは、笑いさえ交まじえながら囁ささやいた。

「いずれ、必ず？ 悪魔の次は占い師にでも転向するつもりか？」
「その未来を占っているのは私ではないよ。知っているのだろう、ルルーシュ？」 ナナリーが恋をしたらどうする？ あの枢木スザクのように、それまでの人生観をそっくり覆すような相手に出会っても、それでもおまえが出しゃばってナナリーを守り続けるつも

りか？」

やはり脊柱の終点でルルーシュの手は行き場をなくした。

伝わってくる震えは、もはや錯覚などではありえなかった。

ふたたびルルーシュの呼吸音が止まっていた。

これ以上の追い討ちは必要ないことと、本当はC・Cも理解していた。

だが、心のどこかでは　ルルーシュを追い詰めることに喜びを見出していたのかもしれない。

「おまえだって、その可能性を考慮したからこそ、今のナナリーにとっては害にしかない自分の存在を遠ざけた。そうして本来ナナリーのものであったはずのすべての自由を返してあげたのだろう？」

「……C・C……」

唸るように聞こえる低い恫喝は、しかし今のC・Cの耳には心地が良かった。

「あるいは、ナナリーの真の幸福を求めるためには、ゼロであれ、ルルーシュであれ、どちらのおまえも既に用済みだ。むしろ、ナナリーが自分の手で掴んだ幸福を壊すことはあっても」

「C・C・ッ！」

「今のおまえではもう二度と、ナナリーを手放して笑わせてやることはできない。ナナリーのためと称していたいだけの血を流してきた？　本当にナナリーがそんな幸福を望んでいると思うのか？　今まで一度たりとも後悔しなかったと私に誓えるか？」

「黙れッ　だまれ！」

まるきり全身の骨を砕かんばかりに、背中からルルーシュの両腕が激しく絡みつく。

それでも。

C・Cだけは知っていた。

これがC・Cだけの知る　ルルーシュの本心だったのだ。
いつそのことC・Cのほうこそ痛みに呻いてしまいそうなほど
に、感覚を共有しているひたいが熱く疼いた。

そんなに泣くなよ、ルルーシュ。

今のおまえは子供みたいだ。

悲しいときに、トコトンまで悲しんでおかないから。

すっかり痩せ我慢するクセがついてしまっているから。

あれだけ何度も私だけはいつだってそばにいてやると約束したろ
う？

だったら、すこしは素直に私を求めろよ。

ナナリーの身代わりではなく、私個人を。

せめて、つかの間。

おまえにとつての癒しの場所と認めろよ。

共犯関係が継続している間だけで構わない。

私は傷ついたりはいらないさ。

おまえも見たろう？　知っているのだろうか？

私は今までずっとどんな痛みにも耐えてきた。

だからおまえ一人くらいなら、いつだって私が全部受け止めて上
げられるさ。

指一本動かせないくらいに力ずくの拘束は長く続いた。

度を越えた苦痛が続くうち、順応性のある人の神経は調子の良い
ことに快樂を生み出す。

やがてC・Cは自分のものとは思えない感覚にすべての意識を
ゆだねていたのだったが、しばらくして悄然と落ち窪んだルルーシ
ュの声が囁いた。

「……すまない」

ルルーシュとも思えない素直な謝罪に惹かれて意識を取り戻した
C・Cは、まもなくルルーシュが謝罪した真の理由を理解した。

「なんだ、おまえ……噛んでいたのか？」

左の鎖骨の付け根付近に、どう見ても齒形と思しき赤い傷跡がくつきり形を残していた。C・C・も気付いてなかったのだ。

さすがにバツが悪そうに、ルルーシュは言葉を濁した。

「だから……謝っただろう」

肩越しにちらりと視線を向けると、激情の名残をとどめて乱れた前髪の下で、逸らした視線がいつになく慚然と拗ねている。

「まあ、いい」

C・C・は笑った。

「カレンを連れ戻しにエリア11に帰るんだろう？　とりあえず私も本気で協力は惜しまない」

言外に、一日も早く奪還して、この傷跡を見せ付けてやるんだと匂わすと、ルルーシュは本気で嫌そうな顔をしてC・C・の手元にタオルを投げつけた。

「……もういいだろう？　あとは自分で好きにしる」

口早に言い置いて、さっさと気まずい場所からの逃走を計った。

が、そうそう簡単に許してやるようなC・C・ではない。俊敏な動きで振り向くと、ルルーシュの肩の上に両腕を伸ばした。

「なんだ、他人の身体は好き放題に眺め回していたクセに、おまえの裸は見せないつもりか？」

「なっ　?!」

思わせぶりにシャツのボタンに手をかけてみせると、実体験においてはまったく免疫のないルルーシュは絶句しながら激赤した。

その条件反射のような反応があまりに可笑しくて、C・C・はくつくつと喉の奥で笑いを転がしながら胸元にルルーシュの頭を押し付けて、両腕で抱え込むようにして抱き締めなおした。

驚愕に思考が停止してしまっているのだろうルルーシュの耳朶に唇を押し付けながら囁いた。

「……後学のために教えておいてやるから、せいぜい記憶に留めておけ。　女という生き物はな、ルルーシュ。たとえ慰み者扱いさ

れようと、その相手に恋をしているだけですべての感情を喜びに転化することができるんだ。言っておくが、おまえのそのギアスの力よりも強制力は強いぞ？ おまえはただそうした相手の存在を許せばいい。誰でもいい、適当な誰かをそんな恋に落としてみるよ」

ほかに誰を許す勇気がないならば、いつそ私を。

そうすれば、すくなくともおまえは癒しを得ることが出来るのだろう？

ルルーシュが息をひそめる気配が、つかの間の静寂の邪魔をした。ややあつて、負けず嫌いの声が精一杯に囁く。

「……何だそれは、経験談か？」

「私か？ 私ならもつと褒められない恋をしてきたさ」

たとえば、恋した相手が最後には決まって私に害を与えても

怨嗟の声を浴びながら、全身の骨を砕かれている最中でも。

愛の言葉を囁いたのと同じ唇で、私の死を望んで止まない憎悪の声を聞く。

悲しいとは思ったが、相手を恨んだことは一度もなかった。

ただひたすらに、恋の相手にすら憎しみの気持ちしか残してやれない、そんな自分の存在が

残念に思った。悲しいと思った。命の火が消えるまで、何度

も何度も。できることなら喜びを、それを思うだけで心が一気に晴れ渡るくらいの喜びを、その相手に残してやることができるならどんなにか

C・C・が無造作にルルーシュを抱き締めてしまったものだから、それまで湯気に湿っていたルルーシュのシャツの背中と髪の毛は今ではすっかり濡れてしまっていた。

C・C・の細く白い二の腕や、肩口、胸の谷間のそこに、濡れて重くなったルルーシュの髪の毛が張り付く。激しすぎる抱擁にほろりと零れ落ちていたC・C・の緑の髪に、ルルーシュの黒い髪

が絡まる。吐息は、ルルーシュの耳朵を直接打っていた。

しかし。

「だったら、おまえのほうこそ胸を張って自慢できる恋人を見つけろよ。」

以前におまえは失望させるなと俺に言ったな？　今がまさしくだ、自分にできないことを俺に押し付けるな」

不敵に笑って顔を上げたルルーシュは、すっかりC・C.のよく知る顔を取り戻してしまっていた。

その自信はいつたいたどこから湧いて出ているのかと、感心してしまいうくらいに力のみなざる表情で。

失敗したなと、すこしだけC・C.は残念に思った。

もつと辛辣に打ちのめしてしまってから飴を与えてあげたなら或いは

いや、それでも。この男なら、血の涙を流し続けながらも、最後には笑って見せるのだろう。

それがわかってしまうC・C.だったからこそ、もはや出る幕は用意されていなかった。

こちらもせいぜい不敵に笑って、精一杯に息を吐く。

「立ち直るのが遅すぎる。おかげですっかり湯が冷めてしまっただではないか。これ以上私に愛想を尽かされなくなかったら、行ってピザでも作って来い。そうだな、具は生ハムとルツコラ、チーズは最低でも五種類だ。いや、その前に私の髪を乾かすのも忘れるな。光荣だろう？　わかったら、呆けていないでさっさとしろ」

「……はいはい」

不承不承ながらも素直に従ったルルーシュは、やがてC・C.をその場に残してまずは着替えるために自分のほうの私室に向かった。わざわざその背を引き止めてまで湯を入れ替えさせたC・C.は、今では肩の上までたつぷりのお湯の中に浸かっている。

ポツンとひとり取り残されてしまった静寂に、なんともいえない複雑な心境を持て余してしまっただが、ただひとつはつきり言えることは　ルルーシュの噛んだ左肩が痛かった。熱い湯で血行が促進されているものだから尚更だ。

「……まったく、とんだ損な役回りじゃないか私は」

そうぶつくさと呟きながら、C・C・は天井の高い空間に視線を投げかけた。

「おい、マリアンヌ？　おまえがあんまり冷たすぎると私を詰るから、ちよつと甘い顔をしてやった途端にアレだぞ？　だから私は言っただ。あいつは飴より鞭のほうが効く。一度甘やかすとトコトンまで付け上がるタイプだからな。　何？　まだおまえは私を責めるのか？　だいたいだな、あいつにはこれが一番効くとおまえが言うからだから私は　」

それは以前ナナリーがスザクに教えた知識のひとつだったが、疲労や精神的ショックに傷ついている人の心は、どんなに優しい言葉よりも、直接の体温との接触によりほぼ無条件に癒される。

それを試しに実践してみたC・C・だったが、そもそもあの男のほうこそ無意識のうちにもそうした癒しを求めている、満足しきった今現在ではさつきまでの変態じみた執着など忘れてしまった様子でさっさとバスルームを後にした。

だからおまえは、未熟だと言うのだよ。この童貞が。

そう毒づいてみせるのだけれども、怒れば怒るほど左肩の傷が疼いてしまうので、C・C・も最後には結局笑ってしまうよりないのだった。

今はまだこの程度の報復で済んでいられるから。

ルルーシュの知略も及ばぬずっと未来を見据えるC・C・には、これは笑って見過ごすほどの単なる通過点に過ぎなかったから。

　　だったら、おまえのほうこそ胸を張って自慢できる恋人を見つけるよ。

どの口が。

そんな世迷言を言ってみせるのか。

だからなおさらC・C・には、今はまだ笑って過ごせる状況にこそ限りのない幸福を感じる。

そのうちきつとルルーシュのほうこそ、決して見逃すことの出来ない真実を手に入れてしまうのだろう。

私を気遣ってみせるのと同じ唇で、きつとおまえも私を

叱責に近いマリアンヌの声音がしきりに何かを話しかけていた。

だがC・C・は、今度は自分のほうこそ不要な意識に蓋をして。

つかの間の幸福のさなかに、ひとり満足して笑った。

「 e n d e 」

「お母さん、お母さん！」

そこは壁や床のそこかしこに磨き抜かれた白の目立つとても綺麗な邸宅だった。

その気になれば狩猟が愉しめちゃうほどに広い庭。いつそ山を丸ごと私有しているような広大な面積に、ここを訪れる者たちの三割は門まで辿り着けずに迷子になってしまふなどと冗談混じりに囁かれる始末だったが、ともあれ生まれる前からここに住んでいる少年は、目的を持った足取りで懸命に母の姿を捜して長い廊下を走り続けていた。

年のころは7、8歳ほどになるのだろうか。

すらりと手足の伸びた痩身。肩の上までまっすぐ伸びた黒髪。今は白いブラウスに膝丈の清楚なパンツを身に着けているので仕方がないと思えるが、たとえば履き古したジーンズに色の褪せたTシャツを着ているときでも初対面の相手には十中八九少女に間違われてしまうのが目下の悩みの種だった。だが、今はそれより切羽詰った重大な問題に直面していたので考え込んでいる暇はない。

乗馬や自転車などに比べると、どこか慣れ切らなさを感じさせる足取りで猛然と無人の廊下を駆けてゆく。

一面に敷き詰められた白亜の床は、よく見ると模様の違った白大理石で市松模様を描いてある。午後の明るい日差しを燦々さんさんと取り入れている大きな窓には、アールヌーボー調の草花を模した細工の緻密な浮き彫りレリーフがさりげなく窓から見える風景に雅やかな趣きを与えていた。ほかに最近はやっばどのことでもない限り使用する機会の減ってしまったシャンデリア、部屋の壁のそこに備え付けてある古風な燭台、岩のように大きなマホガニーを使用したテーブルや、

なんでもない飾り戸棚ひとつに至るまで豪華な趣向を凝らした調度
が揃えてあり、詳しい経緯までは知らないが、そもそもこの土地も、
建物も、以前父と深く親交のあった人物から譲り受けたものらしく、
300年を優に越えてしまふ筋金入りの年代物だった。

それをまるきり新品同然にいつも磨き上げているのが少年の母の
役割で、毎日大勢のメイドを従えながら率先して手入れに精を出し
ている。

だが少年はそうした母の姿を見るたびに、何も好き好んでこんな
大きな家に住まなくても……とどうしても思ってしまうのだ。

どうせ父は月の大半を家以外の場所^{うち}で仕事に明け暮れているわけ
だし、どれだけ母が父のためを思って誠心誠意尽くしても、肝心の
父が二日と家に居つかないようではまったく無駄な努力のようにし
か思えない。

むしろ最近では少々知識の幅も増えてきて、本当に仕事で家を空
けているのかと次第に疑い始める始末だった。

とにかく今はこの家の広さが少年には忌々しくてたまらない。

母の立ち寄りそうな場所をいくつか回って探しているうちに、い
つしか全身汗だくになってしまっていた。こんなに走った覚えは学
校の授業でもありえない。もう本当に「いい加減にしてくれ」と言
うような心境だった。

「おかあさんっ……!!」

念のため客用の応接室も全部覗いて、そのどこにも母の姿のない
のを確認すると、少年はすぐさまクルリときびすを返して駆け出し
た。

考え得る限り残りの可能性はひとつだけ。

裏庭の先にある温室だ。

温室には母屋のテラスから柱廊^{コロネード}を渡って行くのがいちばんの近道
だったから、少年は何も考えずに中二階のテラスの窓から階段の手
すりを伝って飛び降りた。

しかし、まさかにも階段の終着地点に人が通りかかるとは思っ

なかったから、焦った少年は思わず途中で体勢を崩してしまった。たいした高さからではなかったが、背中から庭に落下してしまう。受身をとる方法すら知らなくて、思わずギョツと目を閉ざした。だが、それを見たその人物が走ってくるほうが速かった。気がついたときには、お姫様ダツコの状態でその人の腕の中に抱えられてしまっていた。

恰幅の良い長身はそれでもまだ着痩せするタイプらしく、少年を受け止めてくれている胸の筋肉は思った以上に厚かった。

ゆるくカーブしている焦げ茶色の頭髮は、形の良い頭のラインに沿うように短くカットされていて青年の男ぶりを上げていた。

落ち着いた濃い深緑色の瞳。その瞳が、驚いているような、何か面白がっているような表情で腕の中の自分をじっと見つめている。

だが、少年にはそうした表情に胸焼けがするほど見覚えがあった。きつと内心では『可愛い子だな』とでも感心しているのだろう。

思うと同時に助けてもらった恩も忘れて、カツとしながら青年に食ってかかった。

「さっさと離して下さいッ！」

「なんだと、ララ！」

そしたら思わぬところから叱責の声を浴びせられて、ビククリした拍子に目の前の青年の顔を見上げても、青年は愉快そうな顔を崩さず笑っている。

聞き覚えのある声にビクビクしながら、ララは青年の肩越しに背後を振り返った。

「お父様ッ?!」

「おまえはまた……。元気なのはいいが、あんまり無茶をするなど何度も言わせるな。相手がその男だったから良かったようなものの、女性や小さな子供に怪我をさせてしまったらどうする?　なのにおまえは、助けてもらっておいてそれなのか?」

淡々と諭されるように何度も言われているセリフを再現され、それでなくても青年の腕の中にいる気まずさから悄然と視線を落とし

た。

おずおずと顔を上げると、やはりやさしい顔をして自分を見ていた青年に再度同じセリフをくりかえした。

「……すみません、降ろしてもらえますか？」

青年はニコニコと気持ちの良い笑顔で微笑んで、丁寧にララの身体を地上に戻してくれた。

そのやり方で、やっぱり少女に間違われているなと思ったララはムツとしたが、今の怒りはおとなしく腹の底だけに止めた。^{とど}

居住まいを正して、きつちり腰を折りながら謝罪した。

「助けて頂いてありがとうございます」

「どう致しまして。僕はもっとヤンチャでもいいと思ってるから、何度でもどうぞと言ってあげたいけどね」

「余計な口を挟むな」

にわかに勃発する大人ふたりの争いに、ララは臆した様子も見せずに父親のほうに視線を向けると、また同じように折り目正しく腰を折る。

「お帰りなさいませ、お父様。お騒がせして申し訳ありませんでした」

そして再度ふたりに等分に会釈を送ると、そのまま目的の場所に向かって歩いて行ってしまった。

につこり笑いながらその後ろ姿を見送っていた青年は、感慨深げに息を吐きながらクスクス声に出して笑った。

「シヨックだなア、昔あんなに遊んであげたのに。嫌われちゃったみたいだね」

「無茶を言うな。生後半年では覚えてるほうが異常だ」
庭の芝生から流れてくる風の匂いが芳しい。

午後を過ぎてまもないこの時間では燦々と射す太陽がひときわまぶしく芝生を照らしたが、柱廊の屋根の影に入っているので暑さのほうは大して感じはしなかった。

もっとも、もっと苛酷な環境でも居心地好く寛いでしまえる屈強

な青年は、温室までの道のりを繋ぐ赤レンガの上にクスクスと陽気な笑い声を響かせた。

「でも、ちよつと見ない間にずいぶん大きくなったなア。ララちゃん、今年でいくつになるんだっけ？」

年の頃は30代前半といったところか。恰幅の良い長身は若干窮屈そうに黒のスーツに包まれているのだが、よく鍛えられた筋肉がその下に隆々と息づいているのは服の上からでも充分にわかった。見るからに上機嫌の様子で、かたわらの仏頂面を覗き込んでいる。

一方、話を振られた父親は、去っていく子供の後ろ姿をずいぶんと渋い表情をしながら見送った。

「8つだ。反抗期と言うのかな？ 最近すこしも親の言うことを聞きやしない。困った奴だよ」

どこか少年の面影に似通っているその人物は、少年と同じ色の黒髪をすこし長めに伸ばしており、こちらもダーク系統のスーツで身を固めているのだが、かたわらに立つ青年に比べればずいぶんとそのしなやかな瘦身が際立った。

けれども、見るからに底知れない貫禄の備わっている男性だ。なんらかの役職に就いている者が、はたまた高貴な生まれの出身か。一見してふたりは、要人とそのSPのようにも見えてしまう。だが実際は、最近また親密に交流を深めつつある付き合いの長い友人だ。

青年は、なおさら愉しげに笑いながら言葉を続けた。

「きみは怒るけど、でも僕の子ども時代に比べるとまだまだおとなしいくらいだよ。頭の良い子みたいだね、なんだかルルーシュの小さい頃を見るみたいで驚いた。やるんじゃないかと思ったら、やっぱり体勢を崩して転げ落ちてくれちゃうし。運動神経のちよつとニブイところまできみ譲りだね。どうせならお母さんに似れば良かったのに」

「……それはどういう意味だ、スザク？」

「言葉通りの意味だよ。でも、順調に育ってるみたいで安心した。たしかまだいちばん下だったよね？」

凄んでもみても一向に動じた様子も見せないスザクに、完全にペー
スを奪われてしまっているルルーシュは、いつそう苦い顔をしな
がらゆったり歩み始めた。

「ああ、そうだった。昨日まではな」

その隣に自然と肩を並べる形でゆったり歩み始めながら、スザク
が呆れた様子でカラカラ笑った。

「なんだい、また施設の子を引き取ったのか」

「またとか言うな。ナナリーが困っているのに、黙って見過ごせる
はずがないだろう」

「変わらないないね、ルルーシュのそういうところ。けど、ララチ
ヤンを入れても6人だったっけ？ 上の兄弟たちは元気にしてるの
かい？」

「ああ。上から3人は先週までにもう独立してしまったよ。ララの
上の双子も今月末でアッシュフォードを卒業だ。その日は俺も出席
する予定でいるから、スザクもなんとか都合をつけて来ないか？」
「うん、ひさしぶりだね。ミレイ会長とリヴァルの結婚式に出席し
て以来だから。もう7年になるのか。まったく光陰矢のごとしだね、
どうりで僕らも老け込むはずだよ」

「一緒にするな。ジジくさいのはおまえ一人で充分だ」

「きみに言われたくない。でも、案外それでララちゃん機嫌を損ね
てるんじゃないのかな？ 下の子を引き取る前に、きっちりララチ
ヤンにも相談した？」

「当然だ、納得するまであれの母親が」

「やつぱり。きみからは何も言っていないんだろ？ そりゃあララチ
ヤンだって拗ねるよ」

「わかったようなことを。まだ子供も生まれる予定もないんだらう
？ おまえのほうこそ大事にしてやっているんだらうな？」

「愚問だね。どっかの怖いお義兄さんが見張ってなくても大事にし
てるよ。でも、子供は半分あきらめてる。来月末にでも様子を見て
施設に相談に行こうと思っているんだ」

「ナナリーは同意しているのか？」

「まだ何も言っていない。けど、そろそろ僕も腰を据えて落ち着きたい気分だし。ナナリーにはいつも僕がフォローするからって言うてあるんだけどね」

父親と知らない男性が話をしているのを背中であきながら、少年は寡黙に足を進めていた。

何があっても、父が母と会う前に知ったばかりの秘密を母に教えてあげなければ。

つい半月前まで、これでも少年は父のことが大好きだったのだ。なにしろ彼の父親は、見ているほうが恥ずかしくなってしまうくらいに母親のことを溺愛していた。

口に出して甘い言葉のひとつも言ってい聞かせるわけではなかったが、それとなく父がいつも母の精神的な支えになっていることは少年の眼から見てもわかりすぎるくらいにわかってしまう事実だったのだ。

一見すると母は父よりもずっと強い人だったけれども、父と一緒にいるときは明らかに肩の力が抜けていた。

とにかくいつもニコニコとうれしそうに微笑んでいる印象の強い人だったが、父と一緒にいるときはその笑顔の迫力からして違うのだ。

ララの目から見る限り、この父のどこがそんなに好きなんだろうと不思議に思えてしまうほどに。

子犬がじゃれあっているような口喧嘩ならしょっちゅうしていた

が、普段は本当に仲の良い夫婦で、子供であるララの目で見ていてもまったく理想的な夫婦像であることは認めないわけにはいかなかった。

それなのに。

あんな裏切りつて、いくらなんでもひど過ぎる。

「お母さんッ！！！」

ほとんど泣きそうになりながら、ようやく母の過ごしているはずの温室に足を踏み入れた。

そこには種々雑多な植物が縦横無尽に群生していて、一見する限り自然発生したジャングルのようだった。

けれども実際は、植物学的に貴重な資源がここには育っている。ゼロがブリタニアに挑んだ最終決戦。その際、ほぼ砂漠化してしまったEU南部にもともと自生していた植物の種子を一から栽培して、いずれは現地の緑化に用いるために品種改良を進めているのだと教えてもらった。

だからこの温室の天井は通常では考えられないくらいに高かった。品種改良の一環で、母が採取してきた野鳥の卵を親鳥と一緒に中に移してあったから、本来ならこのあたりでは見ることでできない鳥たちが賑々しく木の上で鳴いていた。だが、虫や蝶などは現地から採取してきた土の中から自然発生したものだった。

何度も何度も焦土と化して、とうとう自力では水を蓄えられなくなってしまった現地の砂漠。しかし、そのなかでさえ長らえることのできている生命力の強さに励まされる形で、今も母を筆頭に戦後間もなく結成された生物化学班が難しい研究を続けている最中だ。そうした事情を抜きにしても、温室の内部はとも過ごしやすい場所だったので、学校に上がるまではララも四六時中母と一緒に過ごしたものだった。

しかし、この秋から全寮制のアッシュフォード学園に通うことになってしまったので、大好きな母と一緒に過ごす時間が激減してしまった。

この年頃の少年にしては珍しく母に対する執着をすこしも隠さず
に今まで育ってきたのは、不在がちな父に代わって自分が母を守る
という騎士道精神がしっかり根付いていたからだ。

一緒に過ごす時間がままならないくらい多忙なことを別にすれば、
ララも父のことは尊敬していた。

そして、ゼロのこともずっと以前から当たり前のように知ってい
たけれど、その正体が父であることを先週の授業で習ったときには
正直担がれているかとさえ思ったのだ。実の父親以上にゼロのこ
を崇拜していたから。

世界の大半を非道な軍事力で押さえつけていたブリタニア。そこ
の皇子でありながら圧倒的な統率力でもって革命を起こし続けたゼ
ロは、合衆国日本を設立した後わずか数年で世界中から戦争をなく
してしまったのだ。

誰一人として苦しむ必要のなくなったやさしい世界。その世界を
単身実現してしまったのがゼロであり、すなわち自分の父親の成し
得た前人未到大偉業。だから父は本当にすごい人なんだと思っ
ていた。世界中の全員が、みんな父に感謝しているのだと思ってい
た。

だが、違ったのだ。

「おかあさあんツツ!!」

人工的に栽培しているとは思えないほどに茂った数多の深緑。迂
闊に足を踏み入れようものなら容易に迷ってしまいそうなジャング
ルだったが、通り慣れているララには目を瞑っていても歩ける場所
だった。5つの誕生日を迎えたばかりの頃、丸々一昼夜迷子になり
続けた経験は伊達ではない。それから数分歩いたところで、無事に
母の姿を見つけることが叶った。

「お母さん!!」

いずれは現地に戻すことが目的だったから、土以外に水も現地の
ものを使用している。

だが、川や湖は枯れてしまったから、以前そこにあった水が流れ
込んでいた海の水を培養して貯水していた。

何本も小川やため池が人工的に用意されてあつたけれども、水は循環しないとすぐに腐ってしまうので、小川の下流から水流は温室の地下の貯水槽に注ぎ込み、ふたたび上流に流れ込む仕組みを作つてある。わざわざ現地の水にこだわつたのは、現地にしか存在していない微生物やバクテリア、ミネラル成分がその水の中に存在するからだ。だから定期的に降り注ぐスプリンクラーの水源も、もちろん地下貯水槽のものだった。

その散水時間をやり過ぎす目的で、ほぼ温室の中央に小ぶりな四^{あす}阿^{まや}が設けてある。

人工的に調整したものではあるが、それでも季節に応じて鮮やかな花々があたり一面に咲き零れる場所に位置しているので、休憩所としてはまさに最適の場所だった。

以前から自然の中で過ごすのが大好きだった母親は、いつものデッキに腰を下ろして笑っていた。

だが、笑つてこちらを見ているだけで、一向に少年の呼びかけにも応えようとしなかったのは、その腕の中に小さな赤ん坊を抱いていたからだ。

母は空いているほうの手でララを呼んで招き寄せると、少年の頭をギュツと抱きしめながらひたいに軽くキスをした。

「お帰りなさい、おちびちゃん。でも、どうして急に帰ってきたの？　ちゃんと先生には伝えてきたの？」

心配げでもなく、叱る様子も見せず、あくまでニコニコ笑いながら母は言う。

森の緑を映したような綺麗なグリーン・アイズ。いつも笑っている気がする大きな瞳が少年は中でも好きだったのだ。できれば父譲りの黒髪ではなく、母の美しいハニーブラウンを遺伝すれば良かったと今でも本気で考えている。

それよりも、少年は母に真実を伝えたい気分でいっぱいだったから、質問には答えずに早速用件を切り出した。

「ねえ、お父さんが、……ゼロが、戦争に勝つために民間人を

たくさん殺したって言うのは本当？」

ララにその事実を伝えたのは寮の同室になった少年だった。

入園当時からすぐ気の合うもの同士で仲良く過ごしていたはずだったのに、ある日を境に突然人が変わったようになってしまった。嫌われているというレベルでなく、ついには一言の説明もないままに寮の部屋割りを突然変えられてしまったのだ。

ララは自分が何かをしてしまったのかと思っていた。だが、違った。

学園内ですれ違っても目も合わしてくれないどころか、露骨に憎悪の目を向ける相手の態度に業を煮やして、ついに辛抱の切れてしまったララは相手に断固説明を求めた。

そしたら、言われてしまったのだ。

おまえの父親が、僕の両親を殺した犯人だと。

いつかぜったい復讐してやると、少年は目をギラギラ光らせながら唾棄する様子で吐き捨てた。

そんなのはデタラメだと信じたかったのだが、返答を求めた教師たちは一様に「わかってあげなさい」と言葉を濁してしまったのだ。少年は乾いた草むらに火が回るような勢いで、周り中の大人に不審を抱いた。

ここにいる全員が、まだ何か重大な事実を隠している。

それがわかつているのに、ララが聞いたくらいではどんなに食い下がっても意味のないことは歴然としていた。

だから唯一の味方である　と信じている、母親に返事を求めに帰って来たのだった。

いつもの笑顔で力いっぱい「そんなのは嘘よ」と否定して欲しかった。

けれども、母親はあくまで冷静にこう答えたのだ。

「本当よ。お母さんの父親も戦争のせいで死んでしまった。でも仕方のないことだったのよ」

「なにが仕方がないってっ?！」

だつて人が死んでるのに！ と続けたかった反論は、驚いて起きてしまった赤ちゃんの鳴き声で遮られてしまった。

しばらく母はぐずる赤子を寝かしつけるのに時間を要して、やがて顔を上げると静かな表情で笑った。

「でもね、ブリタニアは お父さんが戦っていた相手は、もつとたくさんの人々を殺したの。お母さんはブリタニアに生まれたからずっと幸せに暮らしていたけれど、でもエリア１ 日本に生まれた人たちはずっと苦しい思いをしながら生きていた。

たとえばね、ララ。あなたが悪戯をしたときに、言葉であなたを叱るんじゃないかって、あなたを殺してしまったらどうする？」

「……そんなの……っ」

意味がわからなかった。

悪戯ぐらいで……人の生死が左右されてたまるものか。

黙ってしまった少年の目の前で、母はことさら柔らかな表情で笑った。

「でもね、ブリタニアはそんな理由で日本人を殺したの。時には、ただそこにいるのが邪魔だからって、自分たちの役に立たないからって理由で武器も持たないたくさん日本人を殺した。ララが日本人だったらどういう気分になるかしら？」

「 僕ならぜったい嫌だつて言うよ！」

「そうよね」

頷いて、母は緑の瞳をさらに細めた。

「だから、お父さんも『嫌だ』つて言ったの。ただ、言つても聞いてくれない相手だったから行動を起こした。昔からお父さんは、ただ黙ってみているだけにいるのが出来ない人だったのよ。おかげで敵味方の区別なくたくさんの人々が犠牲になってしまったけど、でも今はこうして世界中から戦争がなくなった。もう誰も苦しまなくて良くなったのよ」

もう誰も。

だつたら、どうして彼は今もまだ苦しんでいるのだろうか？

いつかぜつたいに復讐してやると彼は心の底から苦しみながらそう言った。

たしかに、ララの生きているこの世界からは戦争はなくなった。戦争の後も続けられている父の政治努力により、誰に教えられる必要もなしに本当に暮らしやすい環境に育っているのだと自分でも思う。

父を殺したいほどに憎んでいる彼にしてもそうだった。自活能力の皆無な子供が、その歳までなにひとつ不自由なく長らえていられるのは、父が特に力を入れている福祉事業のたまものだった。子供のない世帯には無税のほか、養育費を一部支給するといった優遇措置を約束することで、率先して戦争で親を亡くしてしまった子供たちの支援に働きかけていた。実際に行動を起こしているのは既存のNPO法人だったが、その大半が以前ゼロの配下で戦っていた黒の騎士団のメンバーであることは世間も暗黙の了解で認知していた。だから、優遇措置目的で戦争孤児を引き受けて、裏では虐待をしているようなとんでもない親たちにも、秀でた情報網と行動力を活かす形で実に迅速に細やかな対応が行われているのだった。

実際、父の行っている業績は大したことだと今でも思う。でも、だからといって世界中の全員が幸福になったわけではない。どれだけ居心地の良い家庭をあてがっても、所詮は他人だ。家族を殺されてしまった心の傷が帳消しになるわけでは決してない。

それでも父のやったことは間違いではないのだろうか？

ララはそれから数分も沈黙を守り続けた後で、母に問うた。

「……お母さんは、本当にお父さんは正しいと信じるの？」

母は答えた。一瞬の迷いも見せない様子で。

「信じるわ。今も心の底から信じてる」

でも、お父さんはおじいちゃんを殺してしまったのでしょうか？

出口の見えない迷路に迷い込んでしまったかのように、ララの気持ちは晴れることはなかった。

それでも、なんとか結論を得たい一心で別な質問を考えていたの

だが、背後から近づいてきた足音にその努力も邪魔をされてしまった。

「　　やあ、シャーリー。ひさしぶり」

「　　スザクくん！」

驚いた母親が叫ぶのと同時に、腕の中で眠っていた赤ん坊が泣き出した。

すると、その背後から音もなく歩み寄ってきた父親が、渋い顔をしながらシャーリーの腕の中から赤ん坊を引き受けた。

正直言つて無骨なスーツ姿の風格溢れる男性が、やわらかな布に包まれている赤子を抱いている姿は、まるきり誘拐犯のようにしか見えなかったが、それでも四阿からすこし離れた場所まで歩んでいるうちに、じきに赤ん坊の泣き声も静まってしまっていた。

その様子を横目に赤い顔をしているシャーリーのかたわらで、こちらも頭をかいているスザクが感心したように呟いた。

「へえ、意外だな。ルルーシュって子守りまでできるんだ？」

「そゝなの。あいかわらず料理も上手いし、炊事洗濯家事親父、あとはもうお乳が出せれば完璧なんだけどね」

「あはは、そこだけはルルーシュがどれだけ頑張っても無理だよね」
四阿からすこし行ったところにため池を利用した噴水がある。ルルーシュはその周囲をゆったり歩みながら、腕の中の赤ん坊にやさしい表情で何ごとかを囁きかけている様子だった。

シャーリーはその様子にうつとり見惚れているような息を漏らした。

「ああいう姿を見ると思い出しちゃうな。私がララを産んだとき、ちょうど上の双子がヤンチャで手が焼ける時期だったから、体力自慢の私と変わったの。ララは離乳が早かったものだから余計にね。だからララは半分ルルが育てたようなもののよ」

それまで大人ふたりの父親評にぼんやり耳を傾けていたララは、驚きのあまり思わず母の顔を凝視した。

自分が物心つく以前からずっと父は仕事の虫だったから、てつき

りその以前からその調子だとばかり思っていたのだ。

本音を言えば少なからず嫉妬を感じていた。だからなるべく見ないようにしていた父と腕の中の赤ん坊の姿を遠目に眺めながら、ラはかたわらで陽気に笑っている大人ふたりの声を聞いていた。

「そうだったんだ。当時はまた自分の子供まで政治の道具に使って…と呆れたモンだったけど、アレは本気で子育てしてたんだな」

「私の対面が悪いとも思ってたんでしょ。ルルもわざとそう見えるように振る舞ってたみたいだし。別に誰に何を言われても、こっちもこっちで忙しくしていたから気にする暇なんてなかったのにな。」

上手いわよ。私、今でも時速128キロは出せる自信があるもの」

「はは、それは頼もしいや。たしかにルルーシュじゃ、キャッチボールでも山登りでもじきに子供に負けちゃうね」

「聞こえたぞ、スザク」

物騒な顔をしながら戻ってきたルルーシュだったが、その腕の中では小さな赤ん坊がすやすやと気持ち良さそうな寝息を立てながら寝入っている。

その感心するしかない手際のよさに、シャーリーが幸福そうに微笑んだ。

「ところで、スザクくん？ 今日はずっと行けるのよね」

訊ねるといふよりも、どことなく脅しつけているような言い方に、スザクは面白がって笑った。

「昔からきみの言いつけには素直に従っておく習性ができているからね、仰せのままに。ナナリーが淋しがるから泊まっではいけないけど」

「だったら、ナナちゃんも一緒に連れてきてくれたらうれしいのに。私もだけど、どこかの怖いお兄さんはもっと逢いたがっていると思うけど？」

「うん、僕もねそうしたいのは山々なんだけど。ナナリーのほうも本当は怒っているのは口だけで、もうとっくに許してるはずなんだけど。でも、ほらルルーシュのほうがアレだから」

アレと親指で示した先にいる父親にララもつられて目線を向けてしまったが、話が聞こえているはずの父親はまったく都合の良いことに腕の中の赤ん坊に子守唄を歌うのに夢中のフリを装っていた。

ナナリー エリア１１の最後の総督 皇女殿下。

父親の実の妹であるというその人に、ララはまだ一度も逢ったことはなかった。

詳しい理由は知らないが、ふたりは現在まったくの没交渉であるらしかった。

だが、テレビや雑誌で見る限り、父にはあまり似ていないその女性はいつもやわらかな微笑をたたえていて、ララの友人の中にも熱を上げている連中が多かった。

そして。

そうした一連の様子を母のかたわらで見守りながら、ララは初対面だとはかり思っていた青年のことを思い出していた。

いや、思い出したというよりも、これも先日 of 授業で習ったことだった。

生まれはエリア１１になる以前の日本。その最後の首相・枢木ゲンブの長男で、後の戦争ではブリタニアの精鋭としてゼロに對抗し続けていたナイトオブワン 枢木スザク。

彼も忠誠を誓った皇女ユーフェミアをゼロに殺されているはずだった。

それなのに、そんな事実を忘れてしまったような顔をして、ここですらうして笑っている……。

正直、どう理解すればよいのかますますわからなくなってしまう思いの底なし沼に飲み込まれてゆくような心境を味わっているときだった。

何かにハッと気付いたような様子のスザクが、四阿の背後に茂った喬木に明るい声を投げかけた。

「ああ、咲世子さん。ご無沙汰してます」

スザクが声を掛けてから数秒後に木立の向こうから姿を現したメ

イド服姿の咲世子は、両手にアフタヌーンティーの用意を揃えていた。

自分のほうからそれを迎えに行ったスザクは、ケーキが入ったバスケットだけを咲世子に任せて盆を抱えて戻ってきた。客人の身でありながら、実に手馴れた様子でテーブルの上にお茶の用意をセツティングし始める。

それらの様子をテーブルに座ったまま眺めていただけのシャーリーは、ララの目に目を合わせると力強くにつこり笑った。

「いいい？ ララ、よく覚えておきなさいね。モテる秘訣は、お金でもなく、容姿でもなく、人一倍スマートな身のこなしよ！」

「子供に変なことを教えるな、シャーリー」

そんなところだけはしっかり耳にしている父親は、すかさず口を挟んだが、

「まあね、否定はしないかな？ 僕ってモテるし」

当の本人にしゃあしゃあと肯定されてしまったものだから、たちまち目を三角に吊り上げてスザクを睨んだ。

「スザク、おまえ……」

「そ〜そ〜。しかもそのモテモテの旦那さまは、奥さんのナナちゃんに夢中なの。これがいちばんの高ポイントよ。ね〜？ 咲世子さん」

「そうですね。学園でも下級生に人気のあるのはルルーシュ様のほうですが、上級生になるとどうしたわけかスザクさんの人気が逆転するようです」

週に一度だけアツシフオード学園へ体術の講師として出向いている咲世子は、意外なところで事情に通じているようだった。

そのやりとりを複雑そうな表情で眺めていたルルーシュだったが、それに気付いたシャーリーと目が合うとなぜかしら微かに頬が染まった。

シャーリーは気にすることなくニコニコと思っただまを口にした。「妬かなくてもいいのに。だいじょうぶ、ルルのことは私が百人分、

千年先まで大好きだつて予約済みだから」

おそらくそれを予測していたのに恥ずかしさを制御できなかった
ルルーシュは先にも増して頬を紅潮させている。

「臆面もなく……よくそんなことが言えるな。スザクもいる前で」

「いや僕は気にしてないからお構いなく」

「そうよ、恥ずかしがる必要なんてないもの。どれだけ自分にとつては当たり前の事実でも、言わなきゃ誰にも伝わらない。　　と、
そうそう、そうだった。ねえね、ルル？　照れてていいから、耳だけちよつと貸してくれる？」

居心地悪げに四阿の周りをブラブラ歩き回っていたルルーシュは、不審げな様子を隠せないながらも素直にシャリーリーの呼びかけに従った。

水よけに四阿の足元だけを覆った竹製の柵越しにすこしだけ身を乗り出して、本当に耳だけをシャリーリーの至近に近づけた。

そして、シャリーリーはルルーシュだけに聞こえる小声で何事かを囁いていたのだったが、

「　えっ、それは本当かッ?!」

とルルーシュが叫ぶのと、驚いた赤ん坊がみたび泣き出すのはほとんど同時のことだった。

折りよくテーブルセッティングを済ませた咲世子が何も言わずにルルーシュの腕から赤ん坊を引き取って、母屋のほうに戻っていた。

ルルーシュは一瞬だけ申し訳なさそうな表情で顔を赤く染めていたのだったが、それより以上に今はシャリーリーの伝えた内容に驚きを隠せない様子でいた。

そこまで動揺した父親の姿を初めて見るララは、こっそりケーキに伸ばしていた手を止めるくらいにすっかり驚いてしまったが、何事かを察しているらしい隣のスザクが呑気な声音でそれを訊ねた。
「なにになに？　　ついにオメデタかい？」

その言葉にさらに驚いてしまったララは、視線でスザクを射殺し

かねない勢いで隣を凝視してしまったが、シャーリーはこの世の幸福を全部独り占めしているような表情で笑った。

「うん、四ヶ月だって。ネネの半年検診のついでのつもりだったんだけど、診てもらっておいて正解だったみたい」

「おめでとう、シャーリー。良かったね」

「ありがとう。すごくうれしい」

それは極めて温和なやり取りだったが、今なおララの驚愕は続いていた。

あれは自分が3歳の誕生日を迎えた頃だっただろうか。自分と言う実の子供がいるにもかかわらず、次々よそから子供を引き取ってくる両親の気持ち理解できずに、ララは猛然と抗議したのだ。「僕の本当の弟か妹を産んで！」と。

もちろん上の兄弟もララにやさしくしてくれた。

だが、いつの世界も口さがない大人はいるもので、遊びに出かけた友人宅で「実の兄弟がいらないなんて可哀想」と言われてしまったのだ。

その意味が理解できなかったララは、ごく素直に母親に意味を正したのだったが、母親は臆することなくわかりやすい言葉で教えてくれた。

両親は自分の子供を産まないのではなく、産みづらい体質だったのだ。

父と母の結婚したのは、シャーリーがアッシュフォード学園を卒業するのを待ってのことだったから、もう10年以上昔のことだった。

父と母は同級生だったのだが、父がゼロであることが世間的に明らかになった時点で、父は放校処分を受けていた。

実際は、そこにも政治的な要因があり、父の幼少時代から経済的な支援が続いていたアッシュフォード家に被害が及ぶようにとの策だったから、もちろん水面下では双方の蜜月関係は続いていた。ゼロであるルルーシュと結婚したことにより、どうしても危険の避

けられなくなってしまうたシャーリーを最後の決戦まで実質的に匿
い続けたのもアッシュフォード家から派遣された人物だった。

そうした種々の不安の中にある時期だったから、ようやくララを
授かったのは結婚後5年目のことだった。

その頃にはずいぶんと政情が落ち着きを取り戻し始めていたので、
もちろん次の子をすぐに設けても何の問題もなかったわけだが、以
後8年間ずっと良い知らせを手に入れずにいた。

だからといって、その代償に施設の子供を引き取っていたわけ
はなかったが。

シャーリーに招かれるままに、そのすぐかたわらに腰を下ろし直
したルルーシュは、しばらくの間ものも言えない様子でじつと静か
にシャーリーの手を握っていた。

しかし、にわかにハツとしたかと思いきや、熱の籠もった声音で
重々しく演説しはじめた。

「いや、だったらこうしている場合じゃない。今すぐ主要な産
院に協力を求めよう。シャーリー、個室の規模はどれくらいがいい
？ 食事の内容も重要だな。念には念を入れて、予定日の半年前に
はすぐにでも入院できるようにまずは手配が先決だ。必要とあれば
ナナリーの主治医にも協力を求めて」

見るからにものすごいスピードで考えをまとめているらしいル
ーシュの隣で、いかにも慣れた態度でシャーリーが笑った。

「予約ならとづくにしてきちゃったわよ。いつもの先生に」

「それでは万が一の事態に最適な対処が」

「怒るわよルル。あんまり縁起でもないことばかり言わないで」

「そうだよ、ルルーシュ。きみが産むわけじゃないんだから、ここ
はひとまずどっしり構えて、詳細はシャーリーに任せておくのがい
ちばんなんじゃないのかな？」

「黙れ、スザク！ 俺が産めるなら既に147の選択肢はクリアし
たも同然だ。俺が産めないからこそ、最低でも16,388通りの
攻略法を用意しておく必要があるんだろう！」

いつものクセでそんなセリフをあくまで真剣に力説してくれるものだから、シャーリーとスザクは同時に声を合わせて吹き出した。

「ルッ、ルルーシュッ！ き、きみがう、産むってッ……ひゃ、147通りイ?!」

「ルルならっ……ほっ、本当にうっ、産めちゃいそうッ……が、がんばってみる？ おっ、応援っ……するっからっっ!」

身体をふたつ折りにして悶絶している大人ふたりを前にして、ララは呆然としながら父親の顔を眺めていた。

しばらくは顔中を真っ赤に染めながらシャーリーとスザクに小言を言い続けていたルルーシュだったが、ふと見られていることに気付くと、それはもう気まずそうな表情で問い掛けたものだった。

「……なんだ、ララ。おまえまで言いたいことがありそうじゃないか?」

「ううん、そうじゃないけど……」

「何だ？ はつきり言え」

「ルル、八つ当たりしないで」

「そうだよ大人げない」

「おまえたちは黙っている！ 俺は今ララとだな」

「ううん、違うの。ただね、なんだかお父さん うれしいんだなあって……思っただけ」

ララが淡々と言ったのに、笑っていたふたりの声もぴたりと止まった。

ルルーシュがすこし慌てたような表情で、机の上のララの手を両手で掴んだ。

「当たり前だろう！ ……ララの願いだ。叶えてやるのが遅くなっ
てしまっ
て悪かったな」

まさかにもそんなことを父親に言われるとは思っていなかった少年は、思わず言葉を失くしてしまった。

それは口さがない大人の陰口がララに言わせたにすぎない言葉のはずだった。ララ自身、学校に上がるのと同時にいろんな知識を仕

入っていたから、産みたくても産めない夫婦が世間には多く存在していることを知っていた。

だからいつしかあきらめるのではなしに、納得と言う形で不満は解消してしまっていたのだが。

それでも、3歳の自分が言ったに過ぎない要求を、この多忙な父親が覚えていてくれたのが言葉にならないほどうれしかった。

父の隣で母親も包み込むようなやさしい表情で自分を見つめている。

その隣に座っている、父と幼馴染みだという青年も、負けず劣らず温もり溢れる表情で見守ってくれている。

自分はこれ以上もなく、こうした人たちに守られているのだと改めて気付いた。

「……うん。……」

やがてララはそう静かに頷いたが、頷いた視線をそのまま上げることができなくなってしまった。

喉の奥に得体の知れない大きな塊がブワツと一気に爆発して、あまりの苦しさ目目を閉じてしまったら、それ以上もう何も考えられなくなってしまうていた。

うれしいということ以外、何も考えられなくなってしまっていた。この胸の中いっぱい溢れている感情が《幸福》だと、初めて理解できたような感じがした。

「ララ、ララ、私とルルの可愛い赤ちゃん。生まれてきてくれて本当にありがとう。私とルルを世界でいちばん幸福にさせてくれてありがとう。大好きよ、あなたに会えて本当に良かった。愛してるわ、私とルルの可愛い赤ちゃん」

それは、恋をしている少女なら誰しも一度は胸に思い描いたことのある『最高の夢』だっただろう。

好きな相手と幸せになりたい。

結婚は、その幸せの最たるものだったから。

強く願い続けていれば、いつかはそんな日が自分にもきつと訪れるはずだと信じて疑いはしなかった。

けれども、あの雨の日の街角で、シャーリーは突然に、間違いだらけの現実気付いてしまった。

誰かに仕組まれている嘘の世界に気付かされてしまったのだ。

憎いと思った。

たった今さっきまで、当たり前のように恋していた男の存在が。

それでも。

最終的にはそれでもいいと思えてしまった。

愛しい男の正体が誰であっても、ルルーシュがルルーシュである事実には変わりはない。

シャーリーが知っているルルーシュは、シャーリーが恋をしているルルーシュ以外にあり得ないのだから。

自分でも笑ってしまうくらいに、簡単に、シャーリーはルルーシュに三度も恋をした。

父を殺される以前と、ルルーシュに記憶を消された以後、そして

今。

結局、誰が何を操作していても、まるでひまわりが太陽に向かつて花を咲かせてしまうように、シャーリーの恋心は必ずルルーシュに向かって扉を開いてしまうのだ。

正直、自分でもルルーシュのどこが好きだかわからない。

最初は苦手なところから始まったただの好奇心のほずだったのに、気付いたときにはもう恋をしていた。

一度で済んでいたならただの偶然。

二度目でもまだ偶然かな？

でも、私は三度目でもまだ恋をしてしまったの。

きつと、これから先、何度同じように記憶をなくしても、どうせ自分はまたルルーシュに恋をするのだ。

そう、思ったら、迷いや怖さが一気に吹っ切れてしまった。

今まではずっとルルーシュにも自分を好きになってもらいたい一心でそばに居続けていただけだったけれども、だったら、自分ももっと努力しなきゃいけないと思った。

ルルーシュは今、とても呑気に恋に現を抜かしている暇なんてない状況に陥ってしまったている。

ルルーシュがどうしてもそんな戦いに巻き込まれてしまっているのか何も知らない。

どうしてブリタニアの一学生に過ぎないルルーシュが、幸せな学園生活を満喫していたはずの少年が、革命家になる必要があったのか。

理由を知りたいと思った。けれども、話を聞くだけだったなら、何も今やるべきことではなかったのだ。

そんなのはすべてが終わってからでも十分だ。

なにより今まずやるべきは、ルルーシュの夢を叶えてあげること。だって、ふたりで幸せを掴みたいと思っているんだもん。

だったら、どんなにわずかなことでも構わないから、私もルルーシュを助けてあげなくちゃいけないと思った。

いつそのこと、私がルルーシュを守ってあげなくちゃ。

記憶にないはずの人々が、自分たちの周りで当たり前前の顔をして生活をしていた。

誰が敵か味方かもわからない。

わからないながらに、幸福な生活を送っていたはずだったけど、嘘だとわかってしまった以上、夢の中の生活は終わりを迎えたのだ。真実の生活を取り戻すためにも、私がルルのために安全な場所を確保してあげなくちゃ。

それをひとつずつ確かめていくのはとてもなく時間がかかることだけど、でも、ルルを助けて、守ってあげるためなんだもん。私がまず、頑張ってみせなくちゃ。

そう、思っていたはずだったのに。

どう、しちゃったんだろう？　なんだか身体に力が入らない。

ようやくルルと一緒に過ごせると思ったのに。

私を知っているルルと、知らないルル。

そのふたつのルルを混ぜ合わせたら、きっと別々でいるよりもルルは幸せな気分を味わってくれるはずだから。

いつも私に笑って見せてくれているように、いつも笑っていられる世界にすこしでも近づいていくはずだから。

本当は今までもずっとひとりで淋しかったんだよね、ルル？

幸福に過ごしているはずの生活が、すべて仮面にすぎないことをルルひとりだけが知っていた。

知っていたのに、ずっとひとりきりで黙って、こんな孤独に耐えていた。

必死で私たちの幸福を守るために我慢していたんだよね？

なのに、そんなルルの気持ちに私はちっとも気付いてやれなかつ

た。

ずっと、ルルも幸福なんだって信じて疑わずに過ごしてきた。
でも、もうだいじょうぶだから。

私がいる。

ルルがもう二度と淋しい思いを味わわないように頑張るから。

だから、見ててねルル！

ぜったいに私があなたを幸福にしてあげる！

……そう、言ってあげるつもりでいたんだけどなあ……。

どこで方法を間違ってしまったんだろう？

水の中に浮かんでいるような、頼りない空間。

でも、私は水に飛び込む瞬間が大好きだった。

キラキラと輝く水色と、美しい光の交錯。

そういえば、いつも自分が見ているだけで、ルルには一度も見せてあげることがなかったね。

今度ルルにも見せてあげられたら、ルルも一緒に喜んでくれるかな？

「駄目だツ！！！！ 死ぬなツツ！！！！ シャーリーツ！！！！」

「！！」

限りなく透明に輝いていて、まるで夢を見ているみたいに美しいその水の色。

寒くて、ひとりぼっちで淋しくて、どうしようもなくルルに今、会いたいと思った。

こんなふうに淋しい思いを、今までずっとルルが味わい続けていたのかと思ったら、

たった今、この瞬間にもルルのところに走って行ってあげたいと思った。

何も言わずにしっかりと、腕の中にルルを抱きしめてあげたいと思った。

キラキラ、キラキラ、降り注いでくる水の色。

ああ、なんだ。

ようやくルルも一緒に見てくれる気になったんだね。

キラキラ、キラキラ、降り注いでくる水の色。

私ね、一足早く『ララ』って名前の子供に逢って来たんだよ？
可愛かったなあ。

私の知らない頃のルルってあんな感じだったのかな？

大好きなのに、好きって素直に言えなくて、

でも最後には世界中でいちばん幸せそうな顔をして笑っていた。

夢の中で私が次に産むはずだったルルの赤ちゃん。

今度の子もきつと世界でいちばん幸せそうな顔をして笑ってくれるかな？

くれるよね。

だって、ルルと私の子供だもん。

世界中でいちばん幸福なのに決まっている。

だって、ルルを世界でいちばん大好きな私がこんなに幸福なんだもん。

だからあなたにすこしでも、この幸せな気持ちを分けてあげたい。もっともっとたくさん、好きって伝えてあげなくちゃ。

ちよつとは感動するでしょ？ って。

たまには素直に認めなさいよ、って。

言わせたい。

ほかにももつといっぱい、いっぱい話したい。

話せるよね？

だって、恋はパワーって言ったじゃない。

だから、嫌だと言っても、私は何度でも生まれ変わって、また同じようにルルに恋をするんだもん。

何度でも生まれ変わって、また同じようにルルに恋をするんだもん。

「~~~~~シャーリイイイイイイ ツ
ツツ！！！！！！！！！！」

キラキラ、キラキラ、降り注いでくる水の色。

この世でいちばん綺麗な水の色。

キラキラ、キラキラ、いつまでも、私の胸の奥で輝く。

永遠に。

「 e n d e 」

昔々あるところに、孤独な王様が暮らしていました。

王様はずいぶん昔に見知らぬ魔女から不思議な力をプレゼントされたのですが、あまりに熱心にその力を使って頑張りすぎてしまったので、そのうち王様の不思議な力は暴走してしまいました。

声に出して言った言葉が全部命令になってしまふのです。

「ずっと雨の日ばかりで憂鬱だな」

それをそばで聞いていた女の子は、重度のうつ病を患ってそのうち自殺してしまいました。

「美味しい紅茶が手に入ったんだ。良かったら一緒に飲まないか？」
それをそばで聞いていた男の子は、一生紅茶だけしか飲めなくなってしまうって栄養失調で死んでしまいました。

「そんなに暗いところで本ばかり読んでいたら、目が悪くなってしまっぞ」

それをそばで聞いていた女の子は、目が見えなくなってしまいました。

「仕事に精を出してくれるのはありがたい話だが、たまにはスポーツでもしてリフレッシュする必要があるだろう？」

それをそばで聞いていた男の子は、休みたくても運動が止められずに体力を使い果たして死んでしまいました。

そのうち王様は話すことを怖がるようになってしまいました。
そうしたら、どうでしょう？

今度は王様が何かを考えただけで、周りの人々が命令に従うようになってしまったのです。

半年も立たないうちに、王様の周りには誰も居なくなってしまうました。

親しい人から順に死んでしまいました。

悲しくなった王様は、我慢をして、我慢をして、どうしても耐えられなくなってしまうてから引越しをくり返していたのですが、10年も経たないうちに世界の半分が誰も住まない国になってしまいました。

王様はこんな力を与えた見知らぬ魔女のことを激しく恨み始めました。

あんな魔女のほうこそ今すぐ死んでしまつたらいいのにと、王様は毎日毎日そのことだけを強く考え続けました。

そして、ついに願いは叶ったのです。

「ああ、うれしい。おまえのおかげで私はようやく死ぬことが出来るよ。どうもありがとう」

その魔女はわざわざ王様のところまで訪ねてきて、王様の見ている前でパツタリ倒れて死んでしまいました。

その頃にはもう世界中から人と言う人が全部死んで居なくなってしまうたので、たったひとりになってしまった王様は、自分もみんなのように早く死んでしまいたいと願い始めました。

とてもとても激しく長く願い続けていたのですが、どうしたわけか1000年経つても2000年経つても王様は歳をとらなくなってしまうました。

ひとりぼっちになつてしまった世界の上で、王様はそれから毎日死ぬことばかりを考えながら暮らしていました。

死ねない自分を不憫に思つて、毎日毎日自分の不運を嘆いて暮らしました。

そして、ふと王様は考えたのです。

もしも自分にこんな力がなかったら、いったいどれくらいの人間が自分の言う事を聞いてくれたのだろうか。

確かめたくても、誰も居なくなつてしまったので確かめようがありません。

ついに気の狂つてしまった王様は、誰も居なくなつてしまった『やさしい世界』で今でもひとり暮らしてます。

「 e n d e 「

風に乗って届いてくる花の香り。

ほのかに新緑のすがしさも含んでいるそれは眠っているルルーシユの鼻腔をくすぐり、頬の産毛を撫でるようにして行き過ぎて、やがて部屋のカーテンを揺らしてまた自由な外の世界に出て行った。

ひらひらとカーテンが揺らぐのに合わせて、投げ出している四肢の上に淡い日差しを感じる。

とても気持ちの良い朝だった。

なんだか久しぶりにゆっくり眠ることのできたような気分。

野鳥たちがチュンチュンと鳴いている向こう側で、人の声がクスクスと愉しげに寛いでいる声が聞こえる。

何がそんなにうれしいのだろうかとか気になって意識を向けてみるのだけれども、あんまり眠りの余韻が気持ち良いものだから一向に目を開ける気分になれない。

思っている間にも笑い声がひとときわ盛り上がり、かすかにだが人の足音が近づいてくるのを感じた。

なんだかとても軽い体重だ。床を踏む靴音でけっこうなスピードを出しているのがわかるのに、まるきりテニスボールを軽く地面にバウンドさせている程度の身の軽さ。それがそのままルルーシユの足元付近から枕元に近づいてきて、そこでそのまま音が失せてしまったので、いったいどうしたのかと思ったが、じきに四肢を照らしていた太陽の温度が失せているのに気付いたので、じっと息さえ殺して枕元から様子を窺っているのだなと思った。

けれども、ずいぶん長い間そのままの状態にいるので、何をそんなに熱心に見ているのかと気になったが、それよりも気が付いてみれば顔の上を照らし始めていた日光を遮ってくれていたので、さ

つきよりもむしろ寝心地が改善されたほうを喜んだ。

そばに立っている誰かも静かに自分を見ているだけだから、そのうち気にもなくなってしまうた。

しゃらりとカーテンの風に舞う音。

吹き込んでくる空気がほのかな湿気を運んでくるけれど、朝一番の清浄に冷えているのでなおさら心地が良かった。

できればこのまま永遠にも眠っていたいような心持ち。

そこにまた何かの音が近づいてきて　それは軽いモーター音のようだった　先に訪れていた誰かに小さな声で問いかけた。

「起きそうにありませんか？」

「うん……。というよりも、あんまり気持ち良さそうで……起こすのはちょっと……可哀想な感じかな？」

「……そうですね……」

初めに話したほうが少女の声。

それに答えたのが少年の声だった。

ルルーシュは聞いた覚えのある声に誰だったかなと思いを巡らす。けれどもまだ思考力も眠りの影響を受けていて、まるきり大海原に漂いながら瞑想にでも耽っているような気分だ。

すこしも考えがまとめられないでいる間に、そこにまた別の人間の足音が近づいてきた。

先のふたりに比べれば、なんだかひどく刺々しい足音だ。

ルルーシュは条件反射で眉間に皺を刻んだ。

「なんだ、まだ起こしていないのか？」

「だって……」

「たぶんお疲れなんですよ。ここ最近ずいぶんお忙しそうにしていますから」

そして沈黙。

おそらく訪れている全員で、眠っている姿を観察でもしているのだろう。

ルルーシュはこのまま放っておいてくれればいいのと思った。

だが、高飛車な女の声が、フンツと鼻を鳴らすと同時に続けた。
「しかし、そもそも起こせといったのはこいつだ。こういう寝汚いいきたな奴には」

「あつ、駄目ッ…！」

「きやあ…ッ！」

ルルーシュは突然腹部に刺されるような痛みを感じて、身体を二つ折りにして悶絶した。

いったい何が起こったのか理解できなかったが、痛みが落ち着いてくると同時にようやく薄目を開いて、自分の腹部に突き刺さっている女物のブーツの踵に気付いた。

痛みに思わず目に涙を溜めながら、暴行の相手の顔を睨んだ。

「……C・C……おまええゝ…ッッ」

それでも相手は涼しい顔で高飛車な女神のように微笑んだ。

「うれしいだろう？ このDMが。こんな朝っぱらからこんな美人に起こされて」

「ふざけるなアアゝッッッ…！」

とっさに胸倉を掴もうと手を伸ばしたが、それを容易く許してくれるような相手ではなかった。

かえって容赦なく腹の上の踵に体重をかけられて、ルルーシュは声もなく痙攣する。

「そうかそうか、そんなにうれしいか。涙まで流して。身悶えている姿が絶品だぞ。男にしておくのがもったいないくらいに色気のある奴だ。まったく朝っぱらから不埒な男だな」

「シ、…C・C・さん…あのっ…そろそろお兄様が……」

「そっ、そうだよっ、本気で死んじゃうよっ…！」

「そうか？ この風のように軽い私の体重で？」

いかにも不満そうに言いながら、それでも声もなく脂汗を流しているルルーシュに気付いて渋々足を床の上に戻した。

ルルーシュは、そのまま声もなく気絶した。

C・Cは呆れたように呟いた。

「ほら見る、また眠ってしまったじゃないか」

「……え……いや……それは……眠ってるんじゃないかって……っ」

「ああっ、もうっお兄様？ お兄様っ？ しっかりしてくださいっ」
心配のあまり、自分たちのほうこそ泣きそうになっている少年少女の反論を、C・Cは軽い鼻息で吹き飛ばすと、枕元に置いてある鉱水のビンに手を伸ばした。

「で？ 俺はどうして濡れているんだ？」

それから半時間ばかりが経過して、庭のテラスのテーブルでルルーシュはぶすくれた表情で訊ねた。

パジャマのまま寝室以外で過ごすのは本来ルルーシュの好むところではなかったが、休日の朝食時ということで特別に許すことにした。

というよりも、着替える気力すら失くしていたせいもある。

すっかり寝乱れている黒髪からぼたぼたと水滴を滴らせながら胸の前で腕を組んでいるルルーシュの正面には口口とナナリーが肩を並べて座っていて、しきりに気まずそうに目配せしあっている。

C・Cは高々と組んだ足先がかるうじて届くような距離に腰を下ろして、ばさりと音を立てながら新聞をめくった。

「本当に呑気な男だな。おまえが二度寝している最中に地震があったんだ。危なかったぞ、私がとっさに受け止めなかったら鉱水のビンがおまえの頭に直撃していた。濡れる程度で済んで良かったじゃないか」

「ほおおっ……」

ルルーシュは、組んだ腕をぶるぶる震わせながら、しゃあしゃあと嘘をつくＣ・Ｃの顔を横目に睨んだ。

その正面では、やはり居心地悪そうに肩をすくめている口口とナナリーが、わずかな音も立てないようにしながら静かに食事続けている。

メニューは定番のブレイクファストだ。すり潰したジャガイモの隠し味が口当たりをまるやかにさせているプレーンオムレツ、トマトと数種類のハーブのサラダ、ポークに穀物を混ぜたソーセージのホワイトプテイング、そしてブラウンブレッド。パンなどいかにも焼き立てで、千切るとほかほか湯気が上がった。

Ｃ・Ｃはその方向を見もしないで、新聞の上に熱心に視線を走らせている。

「気持ちにはわかるが、朝っぱらからそんなに熱心に見つめるなよ。照れるじゃないか」

「だれがツツ!!!」

「いちいち叫ぶな、怒鳴るな、テーブルを叩くな。可愛い妹と弟が真似をしたら困るだろう?」

「ツツツ!!!」

どれだけ真剣に怒っても一向に歯牙にもかけられないルルーシュは、それ以上の無駄な抵抗をあきらめると無言でＣ・Ｃの手元から新聞を取り上げた。

「何をする?」

Ｃ・Ｃは冷静な声で怒っていたのだが、それには目も向けないで折り目に沿って綺麗に畳んでしまうと、ポイツとテーブルの端に投げ捨てた。

「おまえのマナーがいちばん悪いだろうが。食事のときは食事に集中しろ、足を組んで座るな、どうして朝食ぐらい一緒のものを食べられないんだ? 朝からピザ? ハッ、見ているこっちの胸が悪くなる」

くどくどともっともらしい言葉を並べるルルーシュを、Ｃ・Ｃ

は一瞬横目で見ただけでロクに耳を貸そうとしなかった。

完全にあてつけるのが目的で、かたわらのロクとナナリーに向かってニツコリ微笑んだ。

「どうだ、ロク、ナナリー、美味しいか？」

もちろんルルーシュは目を三角にして怒ったが、問われたほうの二人はそれには構わずに機敏な反応を示した。

「はいっ、とつても美味しいですっ。以前はあんまりホワイトプディングが好きではなかったんですけど、Ｃ・Ｃ・さんが作ってくださると風味が良いのでついいたくさん食べてしまいます」

「僕も。朝はあんまり入らないほうだったんだけど」

「駄目ですよ、ロク兄様。しっかり食べないと、女の子のように細いんですから」

「ナナリーに言われるほどじゃないから。僕のほうが身長も、体重も……」

「当たり前です。お兄様なんですから」

妙な自信を示して断言されてしまうと、常からそうしたやりとり慣れていないロクは黙ってしまうよりほかなかった。

なんとなく横目でルルーシュのほうに助けを求めたが、ルルーシュはそれに気付いていないフリを装った。

Ｃ・Ｃ・は、年少ふたりに見えない場所でそんなルルーシュの足を踏む。

「そうだよなァ、うかうかしていると身長はともかく、体重ではナナリーに抜かされるぞ？」

「もうっＣ・Ｃ・さんっ！！」

「本当のことだろう？ 赤くなる前に、休日だからってサボらずリハビリに行って来い。今日ならロクが付き合ってくれるそうだから」

「えっ？ でも、せつかくのお休みなのに……なんだか悪いです」

その頃ルルーシュは、踏まれた足を取り戻すのに躍起になっていたのだが、ナナリーが期待に満ちた表情でロクに顔を向けているのには気付いた。

ロロはむしろルルーシュの視線を意識しながら、ナナリーに向かって笑った。

「だいじょうぶだよ、今日なら特別に予定も入ってないし」

そしてまた一度、チラッとルルーシュに視線を注いだ。

おそらくルルーシュにも一緒に来て欲しいと思っているのだろう。もちろんルルーシュも、誰に言われなくてもそのつもりでいたのだが、いざ口を挟むより先にナナリーがパンツ！　とうれしそうに両手を顔の前で打ち鳴らした。

「うれしい！　それでしたら…ふふっ、今日はロロ兄様とふたりつきりでデートですね！」

「　はア？」

思わずとっさに不満ありありの声音で言ってしまったが、そこにまた踵落しが降ってきた。

ルルーシュは声も出せずに身悶えながら、Ｃ・Ｃの膝の上にギリギリと抗議の爪を立てた。

それにはやっぱり年少ふたりは気付かずに、あまつさえロロのほうは真っ赤に顔を染めている。

「…で、でも兄妹なのにデートなんて…」

「言っんじゃないのか？　親子だろうが兄弟だろうが、ふたりつきりで出掛けるときにはデートだ。それより食べてしまったんなら、付き合っていないでいいんだぞ？　早く出掛けたら、そのぶん後で長く遊べる」

「そうですね！　では、お兄様、お先に失礼します」

笑顔を弾けさせながら言ったナナリーが、クルクルと巧みに車椅子を操ってルルーシュに近づくと、頬の上にキスをひとつ落してさっそく部屋を後にした。

それに比べるとずいぶん気まずそうにすこし遅れて席を立ったロロが無言でルルーシュに視線を注いだが、それを見ているＣ・Ｃが隣から殺人光線を発しつつ軽く踵を持ち上げているのに気付いて仕方なくルルーシュは無言で自分の頬をツンツン突いた。

ロロは一瞬で真っ赤になりながらも、おずおずとナナリーがしたのと同じようにキスを落した。

「ごめんなさい…それじゃ、お先に…」

気恥ずかしさと、動揺と、喜びと、兄のそばから離れがたい未練を忙しく同時にかもしれないしながら、ロロはナナリーの後を追いかけた。

どうやらロロの来るのをテラスの入り口で待っていたらしいナナリーが、なんだかひどくうれしそうに会話を弾ませながら嬌声を上げていた。なんだか兄妹というよりも、姉妹が騒いでいるようなふたりの声が歩みに合わせて次第に遠のいてゆき、廊下に面したドアの閉まるのと同時に辺りには再び静寂が訪れた。

C・Cは何事もなかった様子で辺りの景色に視線を注ぎながら、無表情に足を組み替えた。

「食べないのか？　せつかく私が作ったのに」

ほかほかと湯気を上げていたオムレツ。香ばしい匂いを辺りに漂わせていたブラウンブレッド。

そのひとつにもルルーシュは手を伸ばさずに、漠然と冷めてゆく様子を見守った。

そしてかたわらではC・Cも、自分用に用意したピザには一切れも手を付けていないのだ。

ルルーシュはそれに答えもしないで、かたわらの新聞に手を伸ばした。

次の瞬間にはC・Cにすばやく奪われてしまったが。

「ああ、元の世界に戻れなくなってしまったら困るからな」

確認したい部分には既に目を通していた。

新聞に刻印されてある日付は9年前　母が死んだ日だ。

軽く鼻で笑い飛ばしながら、C・Cの表情を流し見る。

「現実にはありえないもてなしで、人を籠絡するのは悪い妖精のよくやる手段だ。魔女のおまえらしいがな」

しばらくC・Cもその視線を睨み返していたのだが、やがて忌

々しげに視線を逸らした。

「妖精？ …… 呆れたロマンティストだな」

「おまえにだけは言われたくない。 ロロは正式に兄弟なのか？」

そっけなく問われて、C・C はひととき固く唇を結んだ。

けれども、ルルーシュが席を立ちかける気配に気付いて、観念して口を開いた。

「 ああ、養子縁組を試みた。 おまえは今アツシユフォードを卒業していて、向かいの大学に通っている。 ロロとナナリーはアツシユフォードで高校生だ。 仕方がないから、私は家政婦の真似事をやっている」

「なるほど？ おまえの世界では、家政婦が足蹴で起こすのか？」

「らしいだろう。 気に入れよ」

高飛車に決め付けながら、それでも一瞬たりとも視線を寄越そうとしない。

ルルーシュはしばらくのあいだ沈黙を保って、やがておもむろに問いを發した。

「で？ ナナリーの足は治りそうなのか？」

「おまえ次第だな。 なんなら目も治してやってもいい。 あれくらいの年齢なら、今からがさぞかし楽しい人生だろう」

問われながら同意を求めるように視線を向けられたが、今度はルルーシュが顔を逸らした。

すこしトーンダウンさせた声音で問いかける。

「 …… ロロともずいぶん仲が良さそうに見えたんだが？」

C・C は軽く笑って、テーブルの上に片手を突いて頬杖を。

淡く吹き付けてくる風の流れが、C・C の緑の長い髪をサラサラと揺らしている。

「気に入らないか？ ロロはまだずいぶん遠慮をしているがな。 どちらかと言えば、ナナリーのほうから積極的に受け入れの態度を示している。 元々血の繋がらない兄弟が多かったんだ。 いまさらひとりくらい増えたところで気にもならないのじゃないか？」

ルルーシュはテーブルの上で固く握った自分の拳に視線を注ぎながら静かに呟いた。

「……口口はそれで本当に満足しているのか？」

「ああ。あいつはおまえのそばにいられるなら、どんな満足でもするだろうさ。　もつとも、放っておいても打ち解けるのは時間の問題だと思うがな。なにしろナナリーはおまえと違って本物だから」

何を『本物』呼ばわりしているのかとつさに気付いたルルーシュは、射殺するような視線でC・C.を睨んだ。

しかし、飄々とした態度を変えないものだから、ルルーシュは言葉の毒を吐き出した。

「で？　どうせ俺の心配をするのなら、別に恋人役でも構わなかったんじゃないのか？　相変わらず素直じゃない女だな」

「素直になったら受け入れてくれるのか？」

ゆっくり身体を起こしながら訊ねると、C・C.はルルーシュの瞳に視線を重ねた。

ルルーシュの視線の先に広がるのは、どこかしらアリエスの離宮を思わせる自然に満ちた庭園。

いかにも幸福そうな空間だ。

太陽の明かりが燦然と辺りに満ちている。

小鳥の鳴いている声が聞こえている。

風はあまねく新緑の香りを大気に振りまいて、それを受けて揺れる花々がかぐわしい香りを漂わせている。

それらの光景をじっくり眺めてから、薄い笑みに交えてルルーシュは呟いた。

「　懺悔のつもりか？　俺を途中で置き去りにしたから」

C・C.は視線を逸らすことなく答える。

「おまえが受け入れてくれるなら、私は別にそれでもいい。謝罪でも、嘆願でも、何でもいい。おまえにここに居ついて欲しいだけだ」
「お断りだ」

ルルーシュは至極冷静に呟くと同時に、頭上に持ち上げた指をば

ちりとひとつ鳴らした。

一瞬で、砂が流れ落ちてゆくように消えてしまう色彩。

数多にあふれていた暖色の風景が一瞬のうちに消え失せて、ただ真つ白なだけの空間にふたりだけが取り残された。

明るいけれども、影も落ちはしない異様な空間。

C・Cは悔しそうな表情でグツと唇を噛み締める。

それを見ながらルルーシュは、場違いなほどやさしく笑った。

「何もおまえが気に病む必要はないんだ。おまえが何をしなくても、俺はいずれこれとそっくり同じ運命を辿るつもりでいた。時期が早いか、遅いかだけの違いだ」

「……ルルーシュ……ッ」

「それに、おまえが言っただろう？ 人には死が訪れるからこそ、生きている自分を実感するんだ。……口口は、死を望んだ気持ちの弱い俺の変わりに死んだ。だから、俺は何があっても生きていなければならぬ。すくなくとも、もうしばらくのあいだは」

「いいじゃないか、もう、自分のための人生を歩み始めても。」

ここにはナナリーも口口もいる。必要なら今すぐマリアンヌも呼び寄せるさ。いくらでもおまえが望んでいる幸福がここには用意されているんだっ！……だからっ、お願いだから……ルルーシュ……ッ」

今まであんなに冷静だった女が、人の違ったように激して頬には幾筋もの涙を流している。

それを冷静に見つめ返していたルルーシュは、無言で自分のために苦しむ女の身体を抱き締めると、その耳元にやさしく囁いた。

「……すまない。……でも、もう……決めたことなんだ」

呟くのと同時に、手を持ち上げて指を絡める。

それに気付いたC・Cが慌てた様子でそこに手を伸ばしたが、到達する寸前にルルーシュは指を鳴らした。

暗転。

ルルーシュは、口口の墓の前で目を覚ました。

掘り返したばかりの土の表面は柔らかく、埋めたときの手形がまだいくつも残っていた。

爪の間に小石や土が詰まって痛んだが、眠っているうちにそれも感じなくなっていた。

小さな木切れや石の破片で切ってしまった指先の痛みも今は大して感じない。

それよりも、やさしい夢に慰められた心のほうが痛かった。

Ｃ・Ｃ・だろうか？ それともナナリーか？ やっぱり口口なんだろうか？

誰の仕業かは知らないが、ずいぶん的確に急所を突いてきたものだと思っただと皮肉に思った。

せめて眠っている口口に海を見せてやりたいと思っただから、墓標は海の見える場所に築いた。

白々と輝く月の光を受けて、穏やかなさざなみが淡い明滅を繰り返している。

明るいうちは動くと思立つと思っていたから、夜になってから移動することに決めたのだ。

まさかにも待っている間に眠ってしまうとは思っていなかったが、それこそ悪い妖精の仕掛ける甘い罠のように激しい強制力をともなつて、意識が絡め取られたような感覚だけがわずかに残っている。

「…心配するな」

誰に向けるでもなく、やがて小さく呟いた。

ゆっくり身体を起こして、改めて口口の墓の前に腰を下ろすと、

柔らかな土の表面をやさしく撫ぜる。

「……心配するな。俺は、俺で、こつちの世界で今までどおり好きにやってゆく。……俺が自分で始めたことだから……後悔なんかないさ」

ナナリーの望んだやさしい世界。

ささやかながらに日常に絶えず笑いが存在していて、家族がそばにいただけで満足できてしまう。

きつとそんな世界を望んでいたのだろう。

きつとそんな世界を望んでいたけなのだろう。

でも、俺は、

でも、俺が、

たつたそれくらいに幸福では満足することができなかったんだ。もつとおまえにはふさわしい世界があるはずだと思っていた。

俺ならその世界をおまえに与えてやることができるはずだと信じて疑いもしなかった。

そして、今もまだ戦う意欲を失くしていない。

おまえがいなくても、俺は、戦うことを止めるわけにはいかないんだ。

実の父、シャルル・ジ・ブリタニアの息の根を止めてしまうまでは。

「……それとも、ああ…母さんか？　だつたら俺に気を回す前に、ナナリーを精一杯褒めてやってくれ。わがままな兄のおかげで今までずいぶん苦労をかけたからな。俺の気付かないところで、きつと山のように気苦労を背負わしていたはずなのに、文句のひとつも言わずに俺の帰りを信じて待っていてくれたんだ。……それなのに、ずっとそばにいてやると誓ったのに、俺はたつたそれひとつの誓いも守ることができなかった。だから、今頃ずいぶん怒っているはずだと思うから、なんとかして慰めてやってくれないか？　…ナナリーに嫌われてしまったら…、俺はもう…満身に死ぬことすら…できない…ッ」

身体の底からこみ上げてくる感情の高ぶりに、呟いていた唇を慌ててきつく噛み締める。

人並みの幸福を与えてやりたいだけだった。

それなのに、与えた現実がこの代償か。

すべてを失くして足掻いている俺だけがここに居る。

おそらくこれは罰なんだろう。

生きながらにして地獄を、せめて見届けろという

殺してきた命に対する贖い。

だったら、死ぬまで甘んじて罰を受け続けるまでだ。

「……だから俺は逃げない……逃げるわけにはいかないんだ。

…ナナリー…、ああ見えて口口はけっこう淋しがり屋で、そのクセ甘えベタなほうだから、できれば素直な甘え方でも教えてやってくれ。……口口、おまえもな、言いたいことがあるなら笑ってるだけ

じゃなくて、まず思っていることを口にするといいんだ。ナナリーは口調は穏やかだが、けっこう思ったことをそのまま言う。きつとあのまま成長していたら、俺程度では太刀打ちできなくなっていたんじゃないのかな？ …まあこれから先はいくらでも話ができるだろうから、まずは手始めに俺の悪口でも始めてみるという。話題は尽きないだろうと思うから…」

ひとしきりクドクドと言っても返事の返らぬ会話を続けて、最後に一度だけ口口の墓の土をさりと撫でてから立ち上がる。

森の奥に隠してある蜃気楼に近づくと、月の明かりを受けた装甲が光を宿していて鏡のようにルル・シュの瞳を映した。

まがまがしく赤く輝いているその瞳。

なんとなく先に見せられた夢の中のC・Cの涙を思い出す。

もつともC・Cの身体だけはイカルガに残してきてしまったわけだから、C・Cがそれを見せたと思うのは単なる思い込みなのかもしれない。

だが、そもそも不思議な力を持つ魔女だったのだから、それくらいのこととは他愛のないようにも感じた。

どつちにしろ最後まであの魔女らしい意地の張り方に、ルルーシユはすこし笑った。

「……………おまえには…またいずれ、会えるかな？」

現実にはもう二度と、その姿をみるのが叶わなくても小さく囁いてからコックピットに向かった。

数時間前まで、ロロはこの座席の上で生きていて、自分を守ってくれたのだなと思いながら腰を下ろした。

ルルーシユ以外は唯一ロロが騎乗したナイトメアだ。

ほかにもいろいろ騎乗する機体は選べただろうに、わざわざ乗り慣れない蜃気楼を選んでくれたロロ……

そう思った瞬間に、また意識がぐらりと遠のく感覚に襲われた。

サラサラサラと水の流れる音を聞いている。

頬に触れる風の温度が冷たくて、さつきとは季節が違うのだなと眠りながら思った。

風の音、水の音、野鳥のさえずりが先ほどまでと同様で。

ただ、ベッドではなく草の上に身を横たえているのを感じた。

全身に降り注いでいる太陽はどこか木漏れ日のようにまばらな感じで、慕わしさを感じながらそっと目を開くと、10センチと離れていない場所から自分を見つめている瞳と目が合った。

「ロロ……」

寝起きでかすれた声で名前を呼ぶと、ロロはうれしそうに顔中をくしゃくしゃにして笑った。

何がそんなにうれしいのだろうかと思ひながら、なんと

なくその笑顔を見つめていた。

気付いたときには、また屋気楼のコックピットに戻っていた。
全身に突き抜けてゆく感情のマグマ

兄であったこと自体が最初から嘘で、ナナリーの代わりに宛がわれた偽りの弟。

それに気付いて以来、ルルーシュは口口存在を憎んでいた。
愛したことなど一度どころか、一瞬もない。

本気で何度も殺してやろうと思っていた。
シャーリーを殺されて以来は特にひどくて、「兄さん」と呼びかけてくる馴れ馴れしさすらも汚らわしいと思っていた。

なのに今日までずっと生き長らえてきた所以は、本当に単に、事が上手く運ばなくて失敗しただけだ。

それでもなお、最後の瞬間まで自分の弟でありたいと望んでくれた口口の心意気に免じて、せめて贖罪のつもりで兄の演技を続けていた。

結局、出会いから別れまでもが全部嘘だったのだ。

だったら、最後まで嘘を貫き通すべきだと思った。

悲しいと、いまさらのように思っている自分の本心などには従ってはいけないと思っていた。

どこまで都合の良すぎる男だ。自分の感情にばかり素直に従うのか？

失くしてからばかり後悔するのか？

何度同じ真似をすれば気が済むつもりだ？

それでも、全身に突き抜けてゆく感情のマグマ
唇を強く噛み締めるあまりに、鉄の味が強く香った。

両手のひらに爪を食い込ませるほどに強く握っている。

それでもバタバタと足の上に降り注いでゆく涙が止まらない。

「……………ツツツツ！」

助けてくれ、ナナリー……

俺はどうしてやるのが正解だったんだ？

おまえにも、口口にも……。

それとも、最初から何もしないでおくべきだったのか？

そんなことすら結論を出せないでいるような今の俺を、むやみに
甘やかさないでくれ。

そんなに簡単に許したりなんかしないでくれ。

俺はもつと責められるべきなんだ。自分の犯した罪をもつと正面
から受け止めるべきなんだ。

これから先、残りの人生で、せめて懸命に贖うべきなんだ。

「……………聞こえているかッ、C・C・ッ！！ だからこれ以上余
計な真似はするなッ！！ どうせ俺にはもう……………ッツ」

死んでも二度とは会えない相手だ。

ナナリーにも、口口にも、……………そして母にも。

父王、シャルル・ジ・ブリタニア

あいつだけは必ず俺が、地獄に引きずり落してやる。

決して二度と、おまえたちの元には送りはしない。

だから死んだ先でくらは安心している。

この命に代えてでも、必ず俺が。

涙を消した両の目にギアスの紋章を宿して、ルルーシュが激しく
空を睨んだ。

[e d e]

TURN 21・125 「熱砂の薔薇（前編）」（前書き）

ルル・シュ×C・Cを前提とした、スザク×C・C的な表現が含まれます。苦手な方は要注意。

「頼まれてくれないか？ 枢木スザク」

神聖ブリタニア帝国・帝都ペンドラゴン。

ブリタニア皇族の根城とも言えるその皇宮で生活を始めてから早いもので数週間が経過しようとしていた。

さすがに世界の半分を牛耳る超大国にふさわしく、豪華な皇宮のどこもかしこもが常にキラキラと磨き立てられている。

働いている人の数も尋常でない人数で、この場所だけでも一日のうちにとれくらいの経費が費やされているのだろうか。それを考えるたびにちよつと意識が遠のくような途方の無さを感じる。

それでも数多の変遷を経ている男にふさわしく、新しい環境にもすっかり慣れた様子で過ごしている枢木スザクは最近新調したばかりの執務服の脇の部分に大量の文書を挟みながら直線的な回廊を闊歩していた。

その間にも取り急ぎ目を通す必要のある書類の確認を進めていたのだが、ある部屋の前を通り過ぎたところでその背中を呼び止められたのである。

ひどく覇氣のないその声音は、この数週間のうちに集中して聞き慣れたものだった。ひよつとするとこの帝都ペンドラゴンで自分が一番に耳にしているかもしれない女性の声。

本音を言うと、少々うんざりしつつあるスザクは、既に3メートルほど開いていた距離を埋めるために急ぎ足で部屋の前に戻ると、開けっ放しのドアの内側を覗いた。わざわざそうする必要があったのは、声をかけてきた張本人が部屋から顔も出していないせいだった。

「なんだい、C・C・？ 今ちよつと忙しいんだけど」

決して部屋に招かれたわけではなかったから、無粋にならない程度に視線を走らせてＣ・Ｃの姿を捜した。

そこは皇宮に訪れた客人を待たせるときに使用している控え室で、大きく窓を取られた部屋の中心には意匠を凝らした庭園をゆったり眺めていられるようにソファがずらりと据えてある。

部屋の要所にふんだんに飾られている生花はもちろん日替わりで用意されているもので、季節を先取りした華麗な花々が慎み深く甘い香りを漂わせていた。

この数週間というものとにかく職務に忙殺されている毎日だったから、なんだかその空間だけずいぶんとおだやかな雰囲気満たされているように感じた。

それだけでなくとも疲労を色濃く感じていたスザクだったから、もういつそのことしばらくソファにでも腰を落ち着けて身体を休めるのも悪くはないかと考えた。

もてなし用のテーブルには清潔なクロスの上に花器を飾ってあるだけで菓子のひとつも置いてはなかったが、帝国唯一の騎士ナイトオブゼロを拝命している今のスザクだったら、適当な誰かにひと声かければ好きなだけ贅沢な食事を愉しむこともできるのだ。

だが肝心のＣ・Ｃは窓際のソファには見向きもしないで、わざわざ出入り口に面した壁際に椅子を置き、膝を抱えて背中を丸めて座っていた。

異様に椅子の高さが低いのは、本来は足を置くためのフットスツールなんかに腰を下ろしているせいだ。

まるきり床の上に座り込んでいるような格好で、伏し目がちに自分の足元に視線を落としている。

スザクはその様子をしばらく眺めると、おもむろに気の抜けたような息を吐き出した。

本当に忙しいのは事実だが、それを理由にここで適当にＣ・Ｃを振り切ろうものなら、後で必ず自分が後悔するのがわかっていた。そんなことに時間を浪費するくらいなら、ここで数分付き合っ

るほうが懸命だ。だったら素直にスザクの休憩に付き合ってくれば良いのだが、どうみてもそれが許されるような雰囲気ではなかったので、仕方なく溜息ひとつで未練を振り切ると、何も言わずにＣ．の足元付近にどっかり腰を下ろした。

部屋の前を行過ぎる別の執務官の視線が気になったが、中から確認した限りでは意図的に覗き込みでもしなければ目に入らないような場所だった。念のため視界の端では常にその方向に注意を向けながら、手早く用件を片付けるために自分のほうから切り出した。

「なんだい？　僕にできることなら聞いてあげるよ。」と言うよりも、聞くまでもないような気がしているんだけどね」

変声期はとうの昔に過ぎているのだが、ほのかに少年の声の甘やかさを残しながら成人男性にふさわしい穏やかさを心掛けているスザクの話し方は、特に女性事務官のあいだで紳士的と評判が高かった。本人には別段フェミニストを気取るつもりはないのだが、名誉ブリタニア人としてブリタニア軍に入軍して以来「とりあえず女性の話には耳を傾ける」というのが自然身についてしまった処世術だった。もちろん、聞いた話を叶えてやるのはまた別の話だが、それでも人の話を口々に聞きもしないブリタニア貴族たちに比べたら、放っておいても好感度が上がってしまうのは至極当然のことだった。

そして、その物腰の柔らかさを最近とみに独占しつつあるＣ．Ｃ．は、機嫌の悪そうな覇気のない表情でスザクに視線を返した。

小さく丸めている身体に着ているのはスザクと初めて会った時にも着ていたブリタニアの拘束衣だった。

アーカーシャの剣にいた時の元気な小学生のような格好に比べたら、たつぷり幅の広い面積で全身を包み隠しているのだが、華奢な印象は少しも変わらず記憶にあるよりもずっと細い感じがした。過去に何度か対面したときの印象では、今よりずっとたくましいような感じがしていたのに、あれはきつと意識的な部分で圧倒されていたのだなと今更のように考える。

位置的にＣ．Ｃ．のほうがスザクを見下ろしているはずなのに、

なんだか自分のほうが足元に見下ろしているみたいだなとスザクは思った。

「……………別にそこまで大仰に構えてもらう必要はない。頼まれていた資料が完成したから、それを渡したいだけだから」

以前と比べれば別人のようにボソボソと不明瞭な声音でそう言つて、目線で促した書類はＣ・Ｃのすぐ隣にある本来の椅子の座席部分に乗せてある。

もちろんこの部屋に足を踏み入れた瞬間からその資料の存在にも、表紙に書かれたタイトルにもスザクは気付いていたのだが、あえてすぐには手を伸ばさずに逸らしていた視線をＣ・Ｃの元に戻した。「ありがとう、助かるよ。きみの知識じゃないと作成できない資料だからね。でも、これを作れと頼んだのはルルーシュなんだから、彼に直接渡してくれたらいいのに」

Ｃ・Ｃはそれには答えず、また伏し目がちに視線を落とした。スザクは内心思わずルルーシュに対する恨み言を十ほど瞬間的に吐き出した。

「気持ちとはわからなくないけどね、でもきみのほうから避けてる限りルルーシュは絶対に心を開きはしないよ？」

Ｃ・Ｃの視線がさらにひときわ下方に落ちてゆく。

「……………知ったようなことを」

「当然じゃないか、伊達に長い付き合いじゃないからね。だからと言つて今の僕たちは、以前のような友好関係に戻ったわけでもない。きみにも話したと思うけど」

ナナリーを助けるために一度は実を結びかけたふたりの譲歩を、

第二皇子シュナイゼルの仕組んだ奸計が断ち切った。

結果ルルーシュはナナリーを失い、黒の騎士団からも放逐され、しがらみをすべて無くしたルルーシュは、むしろ当初の計画通り父王シャルルの打倒に専念することで目的を完遂することが適った。

その彼に積極的に玉座を勧めたのがスザクだった。

ユーフェミアを殺された恨みのあるスザクは、あくまでエリア１

1を日本に戻すための手段として、第99代ブリタニア皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの騎士ナイトオブゼロの称号を手に入れた奇跡を起こすゼロとして、今まで吐いてきた数多の嘘を現実にしてみせろとあのときスザクは強要した。

いささか形は違ってしまったが、その約束をルルーシュに実行させるために身近で見張っているようなものである。

「だから誰より一番長くそばで過ごしているからって、きみが妬くようなことは何もないんだ。表面上おだやかに見えるだけ、かえって気持ち的には殺伐としたものなんだし。だからと言って彼の命は、僕が命に代えても必ず守ってみせるわけだけど」

しかし、それすら目的を遂行させるために必要だから行っているだけだ。

今現在のふたりが最優先の目標に掲げているのは、奪ってきた命に対する贖罪。

ルルーシュはブリタニアを打倒する目的で、あまりに多くの命を犠牲にした。

だが、その点に関しては、今ではスザクも似たようなものだった。スザクの放った一発のフレリア弾頭。当初は1,000万人超と発表していた死者数は、その後の負傷者と行方不明者数の大半がそのまま移行して、現在では3,000万を超えとも予測されていた。

唯一の慰めは、死滅したはずのトウキョウがわずか1ヶ月の間に復興開始できたことぐらいだが、それすら皮肉な結果に違いはない。たとえば大型の地震や台風だったら、復興の前に必ず瓦礫の撤去作業が必要になってしまいうけだが、今回の一件ではフレリアのコーパス効果により一時制圧圏内に含まれる物質は完全に消滅してしまったから、最初からサラ地に復興工事を進めているようなものだった。

先ほどスザクが目を通していた資料の中でも、かなりシビアに見積もっていたはずの工期が最低でも3割は削減可能なスピードで作

業が進められているとの報告がされていた。

ルルーシュが皇帝に即位すると同時に、エリア１１は元の『日本』として解放されていたから、今はまだ国中が喧騒に包まれている状態ではあったが、ルルーシュの立てた計画に従って内政の復興を進めれば早晚この国には恒久的な平和が訪れるはずだった。

そこに、今では私怨の集団と化して反旗を翻しているのが黒の騎士団だった。

日本の解放を行動の基盤に置いていたはずだったから、今となつては存在自体が意味をなくしているはずだが、ゼロとして自分たちを騙し続けてきた現皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの命を奪うまでは、どうあつても収まりが付かなくなってしまうているのだ。

そして、第二皇子シュナイゼルも。

彼もまたルルーシュの統治する神聖ブリタニア帝国に離別を果たして、対決の姿勢をとり続けている。

だから日本を解放した後もふたりは容易に目的を見失ってしまうわけにはいかなかった。

本当の意味で恒久的な平和を手にするためには、なんとしてでもこれらの双壁を打ち崩してしまわねばならないわけだから。

「だから本音を言ったら、いつまでも意味の無い意地を張り続けていないで、きみにもルルーシュの補佐役を努めてもらえたらありがたいわけなんだけど。気持ちの整理が必要なのはわかってるつもりだから、なるべくならあんまり口を挟みたくは無いんだけど、でも悠長に構えてられる時期でもないんでね。きみが割り切るためには、あとどれくらい時間が必要かい？」

もう何度目になるのかはわからない。それくらいスザクがここ最近頻繁に口に出している促がしだった。

C・Cはやはりいつものように少しも気持ちを動かさしめないで、ただじつと心の内だけに沈んでいる。

だが、C・Cがそうしてしまうのにも理由は存在していた。

アーカーシャの剣から移動する前からルルーシュとスザクの間で

始められた話し合いは、それまでの離別の期間を取り戻すかのよう
に熱心に時間をかけて続けられていた。

その際ルルーシュの独断で帝都ペンドラゴンに移動してからは対
面上C・Cは虜囚扱いが決まっていたから、それをわかりやすく
意味する拘束衣を用意して、ルルーシュは自らC・Cに手渡した。
C・Cは無言でルルーシュの意に従った。

以後、用のあるときはルルーシュのほうから接触を図ってくるの
だが必要最低限の言葉を交わすだけで、今後の動向を訊ねることも
しなければ、解放することもしなかった。言ってみれば生殺しの状
態だ。

「……まあ、今はまだ利用価値があるからな。なにしろ私は唯一残
されたギアス関係者だ」

ルルーシュが皇帝に即位してまず先に行動を起こしたのは、ギア
ス教団残党の完全駆逐だった。

V・Vと教団関係者の残した資料は元より、組織の末端要員に
至るまで徹底して地上からギアスに関係する情報を抹殺してしまっ
たのだ。

「用が済んだら私も始末するつもりでいるのだろつ。そんな女が必
要以上にそばに寄るのは不快なだけさ。……だから待っているしか
ないだろつ……私には」

近い将来ルルーシュがこの身を永遠に葬り去ってくれる日の到来
を。

スザクは無言でC・Cの姿を目に収めていたのだが、ふいに片
手をC・Cの長く綺麗な緑の髪の先端に絡めると、それを弄びな
がら囁くように呟いた。

「……やっぱり、きみと僕は似てなんかいないよ」

C・Cはハツとした様子でスザクに視線を投げかける。

それはアーカーシャの剣の前でも言われたセリフだった。

今まで何の目的でルルーシュのそばに居続けたのかと問われたの
で、利用していたのだとC・Cは答えた。自分自身の『死』とい

う果实を得るために、ルルーシュがその力を手にするまで待つていたに過ぎないと。

そしたら、どうやらそれがスザクの意には沿わなかったようで、そのときも「似てない」と言われた。

そして、また一度その言葉を繰り返しているスザクは、ゆっくり指先にC・C・の髪を巻きつけながら続けた。

「むしろ、きみはルルーシュに似てるんじゃないのかな？」

「ルルーシュに？　　バカな、それだけはある得ないよ」

「そうかな？」

「決まってる。あいつほど前向きに生きることには執着している人間はいない」

「本当にそうかな？　きみには今のルルーシュが『生きてる』ように見えるのかい？」

「え……？」

スザクの指先に巻きつけられてゆく髪束がちよつとした団子状態になってゆく。

限界に達したところでばらりと一気に解けてしまったので、スザクは何食わぬ表情でふたたびイチからC・C・の髪束を指先に巻きつけ始めた。

「人はなぜ嘘をつくのか？　それは何かと争うためだけじゃない、何かを求めるからだ。　覚えてるかい？　ルルーシュがアーカー

シヤの剣で皇帝に言ったセリフだ。彼にはその思いがあるからこそ、今もまだ自分の本心を偽装して、望みもしない人生を生きる覚悟を決めている。そして僕もまた彼にそれを強要した。ルルーシュは僕に対して負い目があるから、決してそれを裏切れない。それがわかってからこそ、僕も彼の騎士なんて道化役を引き受けることにしたんだ」

「……ずいぶんだな」

「本心だよ。僕はナナリーを殺した。たとえルルーシュのギアスに従っただけの結果でも、僕のこの指先がフレリアの発射ボタンを押

した事実には変わりはない。でもルルーシュは、ナナリーを含めた3000万人分の贖罪まで全部ひとりで抱える覚悟を決めている。これが道化でなくって何ていうんだ？」

いつしか弄んでいた指の動きを止めて拳をギュツと握ったが、その際C・Cの髪も引き連れていったので、痛みにC・Cは軽く眉をひそめる。

当然スザクもそれに気付いていたのだが、なぜだかそれを離しもしないでニツコリ人の良い表情で笑った。

「でもそんな彼だからこそ他人の嘘にも寛容にならざるを得ない。何かの結果を得るために吐いた嘘なら、彼には責められないんだよ、C・C。」

言って手の力を緩めると、しなやかなC・Cの緑の髪が水を得た魚のように勢いよく空に踊った。

スザクの手元に抜け落ちた数本の髪の毛を無感動に払いのけながら、当然のようにC・Cの髪に指を絡めた。

「始めのうちはルルーシュに嘘をついたことを悔いているのかと思っただけ、どうやらきみは戸惑っているみたいだね。計画では嘘がバレた後には自分は死んでいるはずだったから、予定が狂った？」

「……関係ないだろう、おまえには」

「そうだね。でもルルーシュが関係していることだから」

あまりに悪気なく言われる言葉の連続に、むしろC・Cのほうが返す言葉を失った。

こんな場合にC・Cはこの相手のことがすこし怖くなる。ルルーシュが同じような表情をした場合なら、『またロクでもないことを考えているのだな』と放っておけるのに、スザクの場合は本当に何を考えているのか掴めない場合が多いので、人心を扱うのに慣れているつもりでC・Cでも時折底の知れない畏怖を感じた。

C・Cは無造作に頭を振って自分の髪を取り戻すと、わずかに動揺している自分を誤魔化すために意味もなく拘束衣の足元の金具に手を伸ばした。

「……憎んでいたくせに」

「ちがうよ、僕は今でもルルーシュを許した覚えはない。許そうとする努力を始めただけだ」

許せないことなんて無いよ、それはきつとスザクくんが許したくないだけ。

シャーリーが死ぬ前に残してくれたその言葉。

その言葉があつたからこそ、とりあえず無理は承知で、もう一度だけルルーシュを認めてみようと思つた。そのために必要な努力をまず始めてみようと思つた。だから決してまだ許したわけではない。ルルーシュの本気を誰より間近で観察しながら、自分の心に問いを投げかけ続けている。この男を信じてても本当にだいじょうぶなのかと。そうするうちに、気が付いてみれば1ヶ月が経過していたわけだが、いまだにはつきりした確証は得られていない。

C・Cの手元からチャリチャリと金具を弄る音が響いていて、絶え間なくスザクの意識を刺激している。

「まあ、そういうわけだから。とにかくルルーシュの得にもならない態度は止めてくれ。と言うのが本心で、騎士としての表向きには、きみもそろそろ政務に精を出してくださいってところかな。ここのところずっとルルーシュも満足に眠る時間がないくらい忙しくしているのは事実だし」

先王シャルルが『ラグナレクの接続』だけに一心を傾けていたおかげで、それまでのブリタニアでは皇帝の政務は事実上あつてないようなものだった。

その爛れた状況を立て直すのがルルーシュに課された重責のひとつでもあつたので、どれだけ眠る時間を削っても追いつかないような状況が連日連夜続けられているのだ。

しかし、だからと言ってロクに話もできないでいる今の自分にいったい何をしてやることができるのか。

とつさに何も言い返すことができなかったので、興味も無いのに「忙しいのはおまえも同じはずだろう？」とスザクの近況に話を振ったがヤブヘビだった。

「おかげさまで」

スザクは付き合いの良い表情で軽く微笑んでから、

「誰かさんがうるさく構えと甘えてくるからね」と続けた。

少なからずその自覚のあったＣ・Ｃは視線を逸らしながら、ほんのり頬の上に赤みを加えた。

「……別に、私は……。いつもおまえが勝手に長居をしているだけだ。資料を渡したいだけなんだから、早く持って行けばいいだろう」

「冗談だよ」

そしてまた悪気なく言って微笑んでみせるのだ。

こんなところがルル・シュには決して無いところだったから、いまいちスザクのテンポに慣れかねているＣ・Ｃは戸惑ってしまうのだ。物腰の柔らかなスザクの口調に流されてルル・シュと過ごしていた頃のように突っ張り通すこともできないから、時々どうしていいのかわからなくなってしまう。

仕方なく、また足元の金具を指で弾いてちゃらりと鳴らした。

スザクはそれを見てもまだクスクス笑っている。

「お世辞にしろ心配してくれてうれしいよ。でも、あいにく僕とルル・シュでは基礎体力がちがうから。言っても聞かないのはわかっているし、その他大勢には立場上口を挟むことができないけどね、あの調子では早晩ルル・シュが倒れることくらい、ここにいる人間なら誰でも知ってるよ」

「わかっているなら言ってやれよ。おまえはあいつの騎士なんだろう？」

「騎士はあくまで補佐を勤める立場にあるのであって、彼の健康管理まで任されてるわけじゃない」

まっすぐにＣ・Ｃの瞳を捕らえて見つめ返しながら、スザクは暗にＣ・Ｃにその役割を促した。

あの鈍感なルルーシュの友人だったとは信じられないくらいにスザクはそういった方面への観察力が優れているから、C・C・がひたすら隠し続けている気持ちにも簡単に気付いてしまったのだ。

だからなおさら対処法に困ってしまっ場合も多くて、らしくもなくC・C・は極端に口数が減ってしまう。

言われなくてもルルーシュの心配をしているのは当然だ。

でも、いったいどうすれば、この胸元に突きつけられている断罪の剣の切っ先を忘れていられるのだろうか？

現実を見ることもなく、高みに立って俺たちを愉しげに観察し　ふざけるなッ！！

あの言葉は、シャルルとマリアンヌに向けて放たれた言葉なのであって、C・C・に対して言われた言葉ではない。

だが、C・C・の気持ち的には同じことだった。ルルーシュが行動を起こす前から自分はすべての力ラクリを知っていた。にもかかわらず、それら一切を隠してルルーシュを暗黒の道行きにへと案内し続けていたわけだから。

そして、スザクの指摘したように、その断罪の剣が振り下ろされる瞬間には、自分は既に死んでいるはずだった。

今いる状況をまったく想定していなかったものだから、正直この先どうしていいのかわからない。

生殺しの状態はたしかに辛かったが、しかし、魔女として生きながらに身体を焼かれる苦痛に比べたら、やっぱり甘いなとルルーシュの相変わらずの詰めめ甘さに苦笑すら零れる。

特に表情を動かしもしないで、それをじっと眺めていたスザクは、やがて呆れたように肩を落とした。

「こう言うては何だけど、けっこうきみも面倒臭い人だね？　僕

はルルーシュの世話を焼くので慣れてるからいいけど」

「だから似てないと言っているだろう？　しつこいぞ」

「ほら、そういうところが本当に良く似てる」

言って、スザクは何を思ったか、ふたたびＣ・Ｃの髪に指を絡めてそれを軽く手前に引き寄せた。

ただし、先よりも少々容赦のない感じで、思わず引かれるままにＣ・Ｃも上体を前に傾けてしまったのだが、危うくキスされそうになり慌ててスザクの肩を押し返した。

「何をするッ？」

かなり乱暴に突き飛ばしたつもりだが、ルルーシュとは比べものにならないくらい厚みのある胸板はＣ・Ｃが押した程度ではビクとしなかった。平然とした様子で険を含んだＣ・Ｃの表情を見上げてくる。

「ちがった？ てっきりこうやって慰めて欲しいのかと思って」

「だれが…ッ」

「うん、ルルーシュだったらず間違いないと思うね。でも、たいていの男はいくらでも自分に都合良く誤解しちゃうよ。たださえ可愛くて魅力のある女性なんだ。そんなきみが弱っているのは一目瞭然なんだから、男なら誰だって親切ごかしにかこつけて、ちょっと遊んでみたくなるんじゃないのかな？ その気がないなら、もう少しシヤンとしていたほうが身のためだ」

本当にどうしてこんな男がルルーシュの友人でいられたのかと不思議に思う。

Ｃ・Ｃのほうこそルルーシュの鈍感ぶりに慣らされているうちに感情の抑制が効かなくなっていることに気付いた。自分ではいつもと変わりなく冷静でいるつもりなのだが、ルルーシュが関係してしまうと以前のように冷徹には徹しきれない。きつとスザクの目から見る限り、今の自分は心の弱さが駄々漏れになってしまっているのだろう。

だったらいつそスザクとの関係を断ち切ってしまえば良いのだが、それができずにいるのはどこにも居場所が無いからだ。

今の状況でルルーシュの元に舞い戻ればこうなるのがわかってい

たから、シャルルにコードを渡さないためにも魔女としての自分をこの世界に封印した。

しかし結果的に強引なマリアンヌの要求に抗えなかったものだから、いまさら気鬱に塞いでこの世界に逃げ出すこともできない状況に追い詰められてしまっている。

決してスザクの言うような行為を求めているつもりはなかったが、明らかに身の置き所をなくしているのも事実だったのだ。

そんな本心をあつさりこの男なんかに見透かされ、C・Cは居たたまれない気持ちで唇をギュツと噛み締めた。

ふたりが同時に黙ってしまうと、嫌でも外の喧騒が窓の外から漏れてくる。

皇宮の外にも中にも人の往来は頻繁で、特にここ最近は一気に人口密度が増していた。

この皇宮を中心に世界中が喧騒に包まれているわけだったから当然のように思えたが、それでも落ち着かないことに変わりはない。

だが、ルルーシュにしろ、このスザクにしろ、必要に迫られて勤しんでいることだった。

今まであまりに多くの人命を奪ってきたふたりだったが、これから先もふたりが働かなければそれ以上に莫大な人命が犠牲になってしまうのだ。だからロクロク死んだ人間に対する後悔を抱えている暇もなく、今現在生きている人々のために心血を注ぎ続けている。

自分の居場所が見付けられないなどと私事にかまけている自分とは根本的に違うのだ。

さすがのC・Cも次第にスザクを引き止めているのが申し訳ないような気持ちになってきて、「もう本当に行ってくれ」と追い返そうとした時だった。

人の往来の絶えなかった部屋の外からひとときわ颯爽と歩く人の靴音が近づいてくるのに気付いて、ハツとしたC・Cはとつさに扉のほつを窺った。

その瞬間、あっという間にスザクの腕の中に抱き込まれ、C・C・

は口々に抗うことも、声を出すこともできずに、ただスザクの成すがままにその身を空中に踊らせた。

「おい、Ｃ・Ｃ・？ 先日依頼した資…ッ?!」

もちろん事前に察していたとおり部屋に入ってきたのはルルーシュで、Ｃ・Ｃ・を抱き込むスザクの背中を目にするなり声をなくしてその場に立ち尽くした。

スザクは床の上に膝立ちする格好で胸元に抱え込んだＣ・Ｃ・の口元を片手で押さえ付けていた。その上から傾けた自分の顔を重ねているわけだったが、ルルーシュの位置からは見えないのは計算の上だった。

ルルーシュが息を呑んでいる様子を背中越しに確認しながら、スザクは何度も角度を変えながら自分の手の甲に口接けて、いかにもそれらしく時折チュツチュと舌を鳴らした。

身動きのできないでいるＣ・Ｃ・は、どうにかして企みを阻止しようとして背中を回した腕で必死にもがいたが、かえって信憑性を高めてしまったことに気付いたのはそれから間もなくのことだった。

「…ッ!!」

ルルーシュがかすかに舌打ちを残して、何も言わずにそのまま部屋から出て行ってしまったので。

たしかにルルーシュの位置からは、闖入者にも気付かずに激しいキスを交わしているようにしか見えなかっただろう。

スザクはＣ・Ｃ・の抵抗を容易に受け流しながら決して腕の中からは離さず、ルルーシュの足音が完全に消えるのを見届けてから、ようやくＣ・Ｃ・を離れた。

「~~~~~おまえは…ッ!!」

解放されると同時にＣ・Ｃ・はためらいなく平手打ちをお見舞いしたのだが、それを受け止めてくれるほどスザクは甘い性格をしていなかった。

最小限の動きで難なくかわして、かえって申し訳ないような表情でＣ・Ｃ・の顔を見る。

「いい機会だと思うけど。あれで何も言ってこないようなら、早めに見限ったほうがきみのためだ。結局あいつは自分が一番可愛い男なんだから」

「そんなことツ…いまさらツ！」

叫ぶと同時にＣ・Ｃは身体を起こすと見せかけて、スザクの横っ腹に鋭く曲げた膝を突き入れた。

見るからに非力でしとやかそうにも見えるＣ・Ｃが、まさかそんな攻撃を仕掛けてくるとは思ってなかったから、完全に油断していたスザクは見事に膝蹴りを食らってしまう。

「く…ッ」

とはいえ軽く叩いただけで、後はよろめきもしなかったが。

そんなスザクには構わずに、とっさにＣ・Ｃはルルーシュの後を追うために部屋から駆け出して

結局そのまま止めてしまった。

追いかけてどうするというのだ？ 自分はあいつをずっと騙していたのに。

ルルーシュの望みを叶えてやると見せかけて、自分の望みを叶えるためにずっと騙し続けてきた。

マリアンヌ殺害の真実を知ったのはまだ最近のことだったが、それでもルルーシュが知るよりずっと以前に自分はその真実にたどり着いていたのだ。ルルーシュが人生を投げ出してまでずっと追い続けていた真実に。

だが、それを教えてしまうとルルーシュは自分を殺すための条件から遠ざかってしまうから。

だから、隠した。

ルルーシュの行動の源になっている父親に対する憎しみ。けれども、それは愛し慕っていたからこそだ。「どうして母を助けなかった？」と問いつける一方で、あんなふうに自分を利用しているとは最後の最後まで予測すらしていなかった。

絶望の温度が高じただけの二律背反。いつだって憎悪と愛情は表

裏一体に存在している。その事実をＣ・Ｃ・は知っていた。シャルルの目的を誰より詳しく把握していた。

ルルーシュが母マリアンヌに対して抱いていた思慕の情と激しい憧憬。

そこにマリアンヌの気持ちは決して同じ温度で寄り添っていないことを知っていた。

ナナリーも。どうして自由を失ってしまったのかＣ・Ｃ・は知っていたのだ。

だが、すべてを知っていながらＣ・Ｃ・も自分の欲、『死にたい』欲求に逆らうことができずにいた。

その欲を満たすために結局はシャルルたちの元から去り、未然に計画を防ぐ努力もしないで、自分はただ楽な方向に逃げ出しただけだった。

そしてまたルルーシュの行動も、決して止めようとはしなかった。彼が流している数多の人の鮮血がすべて無駄であることを、流す必要のない悪であることを知っていた。にも関わらず、ルルーシュの手元からすべてのカードを奪い去り、彼の人生からすべての希望を奪い尽くしてしまったのはＣ・Ｃ・だったのだ。

そんな自分に

いまさら何が言えるというのだ？

「ここまで来ても、やっぱり追いかけられないのかい？ この１ヶ月ずっとだよ、きみだけが過去にずっと踏み止まったままにいる」長い回廊の果てにルルーシュの背中が消えてしまうまで、その場にたたずんだまま見送って。

悄然と肩を落としながら振り向いた先にはスザクが立っていた。当然のような仕草でＣ・Ｃ・の肩に腕を回して、Ｃ・Ｃ・の細い身体をその胸元に抱き込んだ。

主にメイドや女官などではあったが回廊を歩む人の姿は絶えず、見る者の目があるにもかかわらずＣ・Ｃ・の頭に添えた手のひらで自分の胸元にそれを押し付けた。

抵抗の意思すら全部なくしてしまっていたＣ・Ｃは、ただされるがままにスザクの腕の中にその痩身を預けていた。

「……………やさしくするな。…私には…そんな気持ちを受け取る価値も…資格もないんだ」

水分を失ってカラカラに乾いてしまっている細い声が、泣く力すら失って回廊の床に頼りなく落ちてゆく。

「だったら、俺に命令する権利もないはずだ」

対してスザクの声は力強い。Ｃ・Ｃを風に例えるならば、まるきり大樹の中から響いてくるような声だった。断固とした決意を宿した声だった。

「俺は今でもユフィの騎士だ。身も心も本当はユフィだけに捧げてる。でも、ユフィはまた…俺が過去に縋り付くばかりで何もせず、じつと立ち止まっていることを望んでいなかった。どんな場所でも構わないから、自分の目指す方向に歩み続けることだけを最後の瞬間までずっと望んでくれたんだ。だから、きみが僕を必要としているなら、きみにひととき優しくしてやることぐらい今の僕には造作も無いことだ。選ぶのはきみ自身の意思だけだね。」

さあ、きみは僕とルルーシュとどちらの優しさが必要としているんだい？」

悪魔の声。

なぜならＣ・Ｃは、ルルーシュの手元に優しさなんて欠片も残っていないことを知っている。

彼の生き血を啜るようにして、自分が最後の一滴まで奪い尽くしてしまっただけだから。

だから選択肢など…最初からひとつしか存在していないのだ。

「……………おまえでいい」

Ｃ・Ｃは自分のほうからもスザクの胸元に手を添えると、たくましい胸の筋肉に頬を押し付けながら呟いた。

スザクの声の響きは微塵も変わらない。

「後悔だけはさせないよ」

指先がC・C・の頬を撫ぜ、C・C・の顔の大半を覆っても余ってしまふ手のひらが優しい仕草でそれを仰向けた。

唇に、スザクのそれが落ちてくるのを知っていても、C・C・はそのまま動きはしなかった。

「 e n d e 」

TURN 21・125 「熱砂の薔薇（後編）」 「R・15」 （前書き

ルル・シュ×C・Cを前提とした、スザク×C・C的な表現が含まれます。苦手な方は要注意。

「遅くなるけど、待つてくれるなら僕の部屋のマスターキーを渡しておくけど」

どうする？ と問われて、自分はそれを受け取ってしまったわけだから、どう考えてもそうなることはわかっていたはずだった。

魔女として過ごしてきた数百年、相手から求められることのほうが圧倒的に多かったが、それでもあえて自分のほうからも人肌を求めて誘ったことならある。

人の心の何が反応するのか知らないが、そうした行為は確かにひととき忘れたいことを忘れさせてくれる浄化作用のあることを経験上C・Cは知っていたのだ。

だが、唯一想定外だったのは、枢木スザクという男の本質と、彼が何を求めていたかの真実

「あ、気が付いた？」

自分が気絶していたことに気付いたのは、ひたいや頬の部分に触れてくる手のひらの温もりを感じたせいだった。

一瞬どうしてスザクが枕元から覗き込んでいるのか理解できずにギョツとして、とっさに声が出なくてその原因を思い出し、自覚した途端にドツと襲いくる疲労に任せて思わずカッとした。

全身に激しい緊張を強いられ続けた影響が至るところに残っていて、常にはない姿勢をとらされた内腿が身体を伸ばしているのに攣っている。腰といわず身体全体が筋肉疲労にぐったり重みを増していた。

それより切実だったのが喉の渇きで、さんざん良いように鳴かされてしまった後遺症で黙っていても喉の全体が痛痒いようにひり付いた。

返す刀で激しくスザクを睨んだら、そこから何を讀み取ったのかスザクは機敏に頷いて、C・C・に見えない場所で何かをして、また顔の上に屈んでくるとキスをした。

押し当てられた唇の隙間に舌の先がねじ込まれてくると同時に、ほどよく冷えている水が流し込まれてくる。

喉が渴いているのは事実だったが、あまりに手馴れた一方的なやり方に一瞬殴つてやりたいほどの怒りを感じたが、仰向けに横たわっている状態のそれでは危うく溺れてしまいかねない。仕方なくくりとそのまま嚙下したのだが、とっさに飲み込み切れなかった水が唇の端からツウと伝い落ちてゆき、枕元のシーツを濡らした。

ほんの一瞬だとばかり思っていた経過時間を裏切るようにして、肌に触れているシーツはどこも乾いている感触で、口元から滴った水分も枕元のシーツが一瞬で吸い込んでしまっていた。おそらく意識を飛ばしている間に新しくシーツを張り替えたのだろう。

意識が冴えてくると同時に、身体のほうがにも残っているのは倦怠感だけで、どこにも濡れた感触がないのに気付いた。明らかに汗も残滓もすっかり拭われている様子だ。

意識を飛ばしている最中にまで好きなように身体を扱われたのかと思つたら、なおさら苛立ちが高じてきて、唇を離すと同時に平手でスザクの頬を張る。

それでもスザクは何食わぬ表情で顔を戻して、濡れたC・C・の口元をやさしい仕草で拭った。

「どこも痛くしてない？」

問いかけてくる声音はいつもと同じ表情で、どこにも氣負った様子も、悪気もない。

C・C・は自分の認識の甘さにいまさら呆れたように息を吐く。

「おまえ……ちよつと慣れすぎていやしないか？」

事後にこうして世話を焼かれるのは決して初めての経験ではなかったが、スザクの歳を考えるとあまりに違和感がありすぎた。

だが、スザクは人の良さそうな表情でニコリと笑つて「まあ、年

頃だし」と的を外した答えを返してくる。

おかげで、連鎖的にルルーシュのことを思い出してしまったＣ．
Ｃ．は、自己嫌悪に唸りながら気だるく身体を起こした。ロクに力
の入らない腕で這うようにベッドの上を移動して、壁を背に四肢を
だらりと投げ出した。

身体を隠す必要がなかったのは、上下共に男物のパジャマを着せ
られていたせいだった。

その大きさからどう考えてもスザクのものだったが、新しいもの
を用意したわけではないのはまた別な部分でわかった。

「……男臭い」

「ごめん、洗い替えをまだ用意してなくてさ。昨夜一晩着ただけ
なんだけど、気になるかな？」

男の体臭独特の汗の臭い程度でそれほど臭うわけではなかったが、
それより『スザクの匂いに包まれている』という状況に眉を顰めた。
「そこまで厚かましくはないからな、別に構いはしないが。それよ
り、おまえワザとだろう？」

「ん？」

「いまさら善人ぶるな、この偽善者が。私にマーキングするのが目
的で、ワザと優しくしたんだろう？」と訊いているんだよ、枢木ス
ザク」

獯猛に唸るようにして指摘してやると、スザクはたちまち満面に
笑みを浮かべた。

「うん。案外早くバレちゃったね」

まるで聖人君子のように温容に微笑んで見せる姿に、Ｃ．Ｃ．
は思わず手のひらに顔を埋めてしまった。

本心がわからなかったはずだった。感じていた畏怖は『用心しろ』
と経験が鳴らしていたエマーゲンシー。それを判断する理性の部
分があまりに脆く弱っていたものだから、こんな稚拙な罠に嵌って
しまつて。

この男の本当の目的は、ルルーシュから自分を奪うこと。それだ

け、だったのに。

「……おまえ……手段を選ばないにもほどがあるぞ」

言葉を発するたびに、癒えない渴きにひりつく喉がＣ・Ｃの声を掠れさす。

それがいかにも情事後といった風情で忌々しく、Ｃ・Ｃは仕草で水をくれとうながすと、スザクはベッドサイドのナイトテーブルからペットボトル入りのミネラルウォーターを素直に手渡した。

そのついでにさりげなく、Ｃ・Ｃと向かい合う格好でベッドの上に腰を下ろした。

どうやらこちらはシャワーを浴びているらしく、乾き切っていない濡れた髪がクルクルといつもより多めのカールを作り出していて客観的に見ている限りは無垢な少年のようだったから、とんでもない詐欺もいいところだ。

スザク自身も濃い灰色のパジャマを身に着けていて、リラックスした様子で胡坐を組み、また一度無垢な表情で笑った。

「でも、騙したつもりもないんだけどな」

「ハッ、この期に及んでまだそんな」

「かなり本気だよ、本気で僕はきみが欲しい」

「……はア？」

Ｃ・Ｃはペットボトルの蓋を外したところで、肝心の中身を飲むのも忘れてしばらくスザクの顔を凝視した。

スザクのほうでもしばらくの間はそれに正面から視線を返していたのだが、やがてふつと息を吐くように微笑むと、らしくなく曖昧に視線を逸らした。

ふたりが黙ってしまった空間に、カチコチと時を刻む時計の音だけが響いた。

「……ねえ、Ｃ・Ｃ？ 王になるルルーシュと、騎士止まりの僕との違いがきみにはわかるかな？」

またずいぶん唐突な質問だとは思ったが、迂闊に興味を誘われてしまったのでＣ・Ｃは問い返す。

「何だ？」

すぐにはスザクが答えようとしなかったので、苛立ち紛れになんとなく視線を巡らすと、時計の針が指していた時刻は午前4時。

このままではスザクは徹夜になってしまふなと思っていた矢先に、ようやく重い口を開いた。

「……日本は王制を敷いてなかったから、強引に並べるなら総理の息子と、皇帝の息子、どちらも似たような立場だと思っただけどね、それでも僕には王の器はない。その理由がきみにはわかるかな？」

C・Cは一瞬素直に黙考しかけたが、あっさり止めてしまうと喉を鳴らしながら水を飲む。

スザクが答えを求めてないことはなんとなく気付いていたからだ。一息で飲み切ってしまったペットボトルをグツと握り潰すと、静寂のしじまに似つかわしくない破裂音がグシャリと響いた。

中身の無くなってしまったそれには興味をなくして、適当にベツドの端に投げ捨てる。

「話せ」

「ん？」

「聞いてやるから、焦らしていないで早く話せと言っている」

どうしても良さそうにうながすと、スザクもさすがに苦笑を洩らした。

幼少の時分から武道を嗜んでいる人間らしくなく、常ならすつきり伸ばしている背中を丸めて、視線を落としたままスザクが述懐を続けた。

「……僕とルルーシュの最たる違いはね、犠牲の精神だ。僕は父を殺した。その負い目があるものだから、今はこうして国のために働いてはいるけれど、はたしてあの一件がなかったら僕はここまで他人のために自らを犠牲に差し出すことができただろうか？ 僕にはとてもそうは思えない。そこがルルーシュには絶対に適わないところだ」

一番初めはナナリーのため。

いつしかそこに生徒会のメンバーが加わり、黒の騎士団が加わり、超合衆国に批准した国々が加わり、今では強者に虐げられている弱者、つまりは世界中の国民がルルーシュの守るべき対象に加わった。『いつだってルルーシュに行動をうながす源は『誰かの力になりたい』』という自己犠牲の精神だ。他人のために自らを犠牲にすることに疑問を感じない、どこるか喜びすら感じている。そんな彼だからこそ、ギアスの力に頼った贖の権威でありながら、ギアスを掛けられていない人間までもが、何の疑問もなく彼を慕ってついてゆく。頭から彼のやり方を否定し続けてきた僕ですら、今はこうして彼に従っているみたいだね。きつと、もつと慎重に時間さえ掛けていれば、ギアスの力に頼らなくても彼は今と同じ地位に上り詰めていたんじゃないのかな？」

スザクの求める論旨が理解できなくて、C・C・は小首を傾げながら冷静に問いを重ねた。

「おまえも王になりたかった、ということか？」

「ちがうよ」

スザクは言って視線を上げると、ほろりと情けないぐあいに表情を崩した。

「その逆さ。僕はもう……他人のためなんかに自分を犠牲にするのがうんざりなんだ」

「……枢木……」

C・C・はそのまま絶句した。

ふたりが黙ってしまった空間に、カチコチと時を刻む時計の音だけが響いた。

考えてみればずいぶん違和感だ。

典型的なブリタニア仕様の室内装飾、壁には淡いグレイッシュブルーのクロス張り、銀細工でさりげなく植物を模した意匠が凝らしてあり、昔ながらの粋を選びすぐって集められたイギリス式の調度類、それらの品々の要所にあしらわれた繻子やビロード。まったくこの部屋ときたら、ありとあらゆる物が栄華の極みを凝らした様式

美でもって整えられているのである。

そんな部屋の主が、この枢木スザクだ。

たった18歳の、日本生まれのこの少年。

「……でも、どうやら人生のほうに僕にそれを許してくれないみたいだね、僕の思いとは裏腹に僕を今の状況に誘導した。自分の人生は、自分の意思で選んで歩んできたつもりだけど、結果的に僕が置かれた立場は僕個人の倫理的には、絶対有り得ないはずなんだよ……ブリタニア皇帝の騎士なんてね」

C・Cはスザクの話に耳を傾けながら、嫌でも激しい眩暈を覚える。

こいつはどうして私を相手にこんな本音を話して聞かせるのかと。そう思ったら、聞いているこっちのほうが動揺してしまう。

「……後悔、しているのか？」

「え？」

「マリアンヌの誘いを断ったことだ。……おまえ、本当はユーフェミアと話がしたいと……話せば良かったと……後悔しているんじゃないのか？」

そのときスザクが見せた笑い方と言ったら。

冗談は止めてくれと叫んでしまいそうだった。

私にそんな弱気を見せ付けないでくれ。

自分と、ルルーシュのことだけでも精一杯なのに、おまえの弱気まで背負えるかッ！

けれども、スザクはなおも陶然としているようにすら見えてしまう儚い表情で笑って、「そうかもしれないね」と続けた。

「……でも求めているのは弁解かな？ ユフィを好きな気持ちに変わりはないけど、そのうち浮気するかもしれないからって。事前に許しを請いたかったのかもしれない。ちょっと最近いろいろ辛いからって……言い訳を……」

微笑が別の表情に移り変わりそうになり、その寸前でスザクはむしろ目に力を込めて無理矢理微笑んだ。

「……たぶん俺は一生、ユフィに対する気持ちを変えられない。彼女の存在が、あんまり心の中に居心地が良すぎて、忘れることなんてできそうにないんだ。……それなのに俺は生きているから、時には心が脆くなる。心の中に存在している彼女よりも、間近にある温もりを求めてしまいたくなる。そんなことをしても彼女以外の誰もあれほど純粹に俺の心を満たしてくれるはずなんてないのに、……わかつているのに、それでも俺は……ッ」

ついには堪え切れなくなった様子で、スザクはグツと唇を噛み締めると顔を伏せたまま黙り込む。

マリアンヌ……。

C・Cはそつと心の中でその名前を呼びかけた。

もちろん消えてしまったわけだから応えのあるわけでは決していない。

それでも、そうせざるを得なかった。

C・Cも唇をギュツと口の内側に巻き込んで、眉間に激しく皺を刻んだ。

おまえのほうか、よっぱど魔女の名前にふさわしい。

苦々しい毒を飲んだような気持ちでそう思う。

人の心を容易にかき回し、消えた後になっても呪いの言葉で人の心を苦しめる。

そして、この相手がルルーシュなら簡単だった。

こんな場合には、何も言わずに抱き締める。

……しかし。

まるきり自分のほうこそ瀬踏みを迫られているような心境でC・Cはきつく目を閉じると、白々しく無感動にも聞こえる声音で淡々と呟いた。

「泣いたことがあるのか？」

「……当然だろう、それくらい」

「ユーフェミアが死んだ後に、泣いたことはあるのかと訊いている。最近の話だ」

「……最近なら……まあ、泣くのも忘れてる感じかな？」

「ふざけるな。誰がそこまで心を鍛え上げることができるんだ？ そんなのは最初から涙の存在を知らない人間が決まって口にするただの詭弁だ。周りの人間に共感して生きている限り、人の心は嫌でもかき回されずにはいられない。ましてや、今のような状況でそんな世迷言が通用するとも思うのか？ 自分を追い詰めてマゾヒスティックな愉悦に浸るのもいい加減にしろ」

感情の揺り幅が自分自身で制御することができない。

流される。この男の仕組んだ罠に迂闊に嵌ってしまったときのように。

感情に身を任せて捨て鉢になっている人間相手に、情で答えてどうする？ そう、思うのに。

「……どうしてきみが怒っているのか、よくわからないんだけど」
「知るか。私に聞くな」

邪険に突き放すように言って、これ以上むやみな情が移る前に部屋から去ってしまおうと思った。

だが、いざそれを行動に移そうとした瞬間にスザクはそんなＣ．の肩に腕を回してきた。

とつさにＣ．Ｃ．はスザクの腕を払い除けていたのだが、まるで天から降ってきた柔らかい衣が纏いつくようにして、背中からスザクの両腕がやさしく、容赦なく、胸元にＣ．Ｃ．の瘦身を包み込む。

「……きみがそうやって……誘うから」
「はア？」

「誰でもいいわけじゃないんだ。ユフィの存在を認めてくれる相手じゃないと僕のほうが困るから。その点、きみなら理解してくれるんじゃないかと思った。……僕と一緒にならないかい？」

言われるだろうと思っていた。

だからこそそれを聞く前に逃げ出そうと思ったのに。

C・Cはそれでもまだ逃げようとしたのだが、身体に回されているスザクの両腕がなおさら力強く抱き締めてしまったので、C・Cは身じろぐことすら儘ならない。

そんなC・Cの背後からスザクは自分の頬をC・Cの頬に押し付けて、小さな子供に言い聞かせるようにやさしく囁いた。

「極論を言ってしまうね、ルルーシュは単に自分の欲求に従っているだけなんだよ。『他人のために力になってやりたい』、そうして結局は自分の存在を相手に認めさせたいだけなのに。そんな彼の本心には気付きもしないで、周り中の人間が彼を支えようと力を貸している。それなのに当の本人は大してありがたみも感じずに当然のように受け取っている。自分は人生を引き換えにしている気持ちもあるのかもしれない。でも、それこそが傲慢だよ。たしかに彼のおかげで助かる人たちはいるのかもしれない。けれども、彼がいなくても人はみんなそれなりに生きてゆくことができるんだ。でも、それを言ってしまったら、僕の殺した人たちが浮かばれないから、僕はこれから先も他人の命を守るためにルルーシュを助けるよ。その代わり、きみは僕がもらってしまおうと思ったわけだけど。勝手かな?」

「ああ、開いた口が塞がらない気分だ」

「でも、どれだけ待っても、ルルーシュはきみだけのものにはならないんだよ?」

悪魔の声。

そんなこと、今更言われなくてもとうの昔に気付いている。

それでも戯れに、時折ルルーシュが口にくれる優しい言葉はあまりにも甘やかな呪縛でC・Cを絡め取り、もつと欲しいと願わずにはいられなくなる。

たしかに、この1ヶ月というものは臆して意識的にルルーシュを

避けている部分もあったのだが、そうすることでルルーシュのほうから何かしら言ってくるのを期待して待っていた部分も少なからずあったのだ。

どれだけ待っても決して、個人の所有に収まる程度の相手でない
と知っているはずなのに。

「……きみはもうどれだけ彼を待ち続けた？ あとどれだけ待つつもりでいるんだい？ どれだけ待っても、彼は決してきみだけのものにはならないよ。彼の視線はいつだって世界を見つめてる。世界を救うためだったら、彼はこれから先もどんな犠牲も厭わない。本当に欲しいものが手に入らない絶望に、これから先もきみは『死にたい』と思い続けて生きるのかい？」

「 枢木……ッ」

「僕だったら、今すぐきみを変えてあげられる。きっと、本当の意味では、僕にはきみを幸せにすることはできないのかもしれない。

でも少なくとも『死にたい』なんて二度とは言わせない。そのうち僕の力で必ずきみに生きる気力を与えてみせる。こんな世の中でもね、目標さえ見つけれたら、生きていること自体に喜びを見出すこともできるんだ。僕はユフィからそれを学んだよ。だから今度はきみに、以前の僕と同じように死の魅力に取り憑かれているきみに、その喜びを教えてあげたいと思っている。言っただろう？ 後悔だけはさせない」と

ほのかに含んだ笑いに紛らせてはいるけれど、絡み付いている腕の意思の力が言葉よりも如実に本心を物語ってしまったている。

この男には本心を隠せない。隠そうともしていないのかもしれない。

素直に心をさらけ出すという行為はある種の快感を覚えさせてしまふものだから、この男はそのとき味わう快感に対してあまりに従順なのだ。

そしてC・C・にも見せ付けられる本心は心地好い。あれこれと頭を悩ます必要なく、安心してその人物のそばで過ごしていればい

いわけだから。

それでも。

「大事なことを忘れているぞ、枢木スザク」

喉の奥から搾り出すようにして囁いて軽く身じろぐと、スザクの両腕は薄絹が滑り落ちてゆくようにして簡単に外れた。

C・Cは借り着の胸元にギョツと激しく爪を立てると、背中を向けたまま続けた。

「誰かでなければいけないのは、おまえだけではない。私も一緒だ、ということだ」

たとえ一生ルルーシュが自らのためだけに幸福を追い求めるはずはないと知っていても。それでも、慕ってしまう気持ちは変えようがないわけだから。だったら自分が開き直るしか方法はないのだろう。そういう相手であることを認めて、自分が割り切ってしまうよりほかにない。

「残念だな」

スザクはあっけなく答えたが、淡く微笑みを含んだ瞳の表情がまたそれを裏切っている。

何より先に個人の情が優先する男だ。

世界の平和か、個人の幸福か、どちらか一方を選べと迫ったら迷わず後者を選ぶ男だ。

ルルーシュは、一見似ているようでいて、個人の対象が一個人には収まりきらない。

ひとつの幸福を叶えることが適ったら、またすぐに別な対象を求めて大局を見渡してしまうのだ。

その意味では、女としてどちらを選ぶほうが無難か、あまりにも差は歴然としている。

きつとスザクのような男に惚れることができるなら、そして惚れられることができるなら、自分のような人間でも幸せになれるのだ

ろつなとC・C・はなんとなく考えた。

それでも。

「……期待させるようなことを言っすまなかった。やはり私には……あいつ以外は選べそうにない」

それ以上は何も言わずにスザクはC・C・の背中にひたいを押し付けると、やがてこくりと小さく頷いた。

そうして、ふたりのあいだで始まった関係はたった一日で終焉を迎えたが、いかんせん人目につく場所で始まってしまったのが悪かった。

結果的に徹夜で執務に戻ることになったスザクは、悪いが一日くらは適当にやり過ごすつもりで皇宮に出向いたが、とてもそうは言っていられないくらい露骨に自分に対する風当たりが変化しているのに気付いた。

帝国ブリタニア唯一無二の騎士・ナイトオブゼロとしての権威に^{へつら}諂媚を売る者、名誉ブリタニア人上がりの蛮人と露骨に蔑む者。それが前日までのスザクに対する評価の総括だったのが、さらにそこに、陛下のひそかな愛人である虜囚に手を出す狼藉者、相手が虜囚でも関係なく真実の愛を貫き通す人格者、という新たな評価が加わった。

まさかにもC・C・にそうした噂が浮上しているとはスザクも気付いてなかったから、その噂を覆す結果に繋がったのは好都合だった。

たが、主に女性たちを中心に後者に対する二極化が完全に出来上がってしまっているのは少々閉口させられた。

昨日まで親しくしていたはずの相手に毒虫の如くに接せられ、かと思えば、意外な相手から声援を受けたりしてしまう。いずれにせよ行く先々で婉曲な質問攻撃に晒されてしまったが、迂闊に口を開けば自分より立場の弱いC・C・に攻撃の矛先が一極集中してしまうことはわかりきっていたので、最初から無視を押し通すつもりでいた。

だが、問題はそう簡単に済みそうにないことを、その日の午後には痛感させられた。

いまだに迂闊にさまよえば迷路のように思うことのある皇宮だが、政務に使用される場所はもちろん限られていた。

とりわけ時間の浪費を嫌ったルルーシュが機動性を一番に考えて選んだ執務室は、従来高官たちが使用していた手頃な部屋をそのまま流用していたが、ルルーシュが皇帝に即位すると同時にずいぶんシステムティックな改革が進められていた。

内装的には中華連邦領事館に用意されていた執務室をそのまま規模拡大した感じに近い。

部屋の正面に据えられた大型スクリーン、左右の壁にずらりと配されたデスクトップ型のパソコン、簡単な謁見と会談を同時に実施することができるように区画を分けた別室には会議用のスペースも設けられている。ただ以前と違って指示を待つ人間が圧倒的に増えていたから、部屋の内部にも執務官が10数人常勤していた。ほかにも事務官、近衛兵なども加えるとちよつとした大所帯である。身分を隠す必要のなくなったことによる何よりの変化だが、利点であるのと同時に常に規律を重視する必要にも迫られたので、この部屋でルルーシュに謁見を求めている最中は、スザクも完全に彼に仕えるナイトオブゼロとしての規範を示して振る舞った。

部屋の最奥、大勢の人員が詰めていてもざわめきの届かない広大な一室に、報告書を読み上げるナイトオブゼロの声だけが朗々と響

く。

「と、別紙の報告にもあるとおり超合衆国から日本への帰還者受け入れも順調に進んでいます。ただ、黒の騎士団内部からの瓦解を危惧する動きも目立っていますので、警護の強化は引き続き必要かと。現地における対応はジェレミア辺境伯を筆頭に陛下直々の指示により動かせる人員が揃っています。残りの目立った懸案事項は別紙『アンガー・ジュマンに関する報告書』と『シベリアンコントロールに関する今後の展望と代替案』をご覧ください。私のほうでは引き続き現在の任務を継続して行う予定ですが、陛下のほうから特に何かございますか？」

マホガニーのいささかデコラティブな執務机はルルーシュの好みには合わないものだったが、機能面を重視してそのまま使用することにした。それに合わせて用意されていた椅子も革張りの幅の広い大変大きなもので、こちらは従来の皇帝たちに比べると極端に細身であるルルーシュが座ると違和感を禁じえなかったので、取り急ぎ専用のものを作らせている最中だ。

そこに深々と身を預けているルルーシュは、こちらも最近新調したばかりの白と藍紺を基調とした皇帝の衣装に身を包んでいる。金糸で施された意匠が繊細で、眉目秀麗なルルーシュの容姿を殊更に引き立てる役割を担っている。

だが、今はスザクに一瞥も与えもしないで報告だけに耳を傾けていたのだが、スザクが口を嚙むのと同時にわずかに身じろぎ、背後に控えていた近衛兵を呼び寄せると厳格とした態度で人払いを命じた。

「……は、全員でございましょうか？」

「そうだ。すまないがこの枢木だけを残して、あとは私が呼ぶまでこの部屋には誰も近づけないように図ってくれ」

「イエス、ユア・マジエスティー！」

そうしてしばらくは人の退出に合わせてざわめきが続いたが、数分で元の静寂に包まれた。

天井の高い広大な空間に、ひっそり閑と染み入るように満たされてゆく濃厚な静けさ。

執務室の扉が近衛兵の手により厳重に閉ざされるのを確認したところで、ルルーシュはゆっくり視線を巡らすと、ようやくスザクのほうに視線を移した。

執務中の緊張を解くようにして机の上に片肘を付き、純白の手袋を嵌めた手のひらにゆったりとその頬を凭せたが、スザクの目から見る限りリラックスには程遠い意志の力がみなぎっているように感じた。

ゼロの目だ。

据えられる視線の冷徹さをスザクはそんなふう理解した。

だが、今までそれに一度も臆した経験のないのも事実だった。

「どうしたんだい、ルルーシュ？ あえて今はこう呼ばせてもらうけど」

「ああ、そのための人払いだ」

「怖いな。なんだか今にも僕に掴みかからんばかりの目をしているね、きみ」

「ああ、おまえがそう見えるというならば、まさにそうなんだろうさ」

言うなりルルーシュは身体を起こすと、またゆったりと椅子の背に背中を預けた。

見上げているのはルルーシュのほうなのに、彼が生来持ち得る気高さゆえに見下されているような錯覚に陥る。

この感覚があったからこそ、幼少時代の自分は彼に対して反発心を抱いていたのだろうと今となっては理解できるのだが、現在はより正しい認識の下により完全に対等の立場であることを知っている。

対面上、彼に仕える立場であるのは事実だが、心まで彼の家臣に成り下がった覚えはない。

むしろ実質的に、彼を使っているのは自分のほうなのだから。

「今朝方、おまえとＣ・Ｃ・に關する不埒な情報を耳に入れたんだがな」

ルルーシュは視線でスザクを見下しながら豪胆に冷えたナイフのように言葉を發した。

「耳に入れた？ きみがその目で見たの間違いじゃないのかな？」

対してスザクの声は、真夏の昼下がりに時折吹く深山嵐みやまおろのような爽やかさ。

ルルーシュは不快氣に目の下に皺を刻んで、それでも冷静に追求を続けた。

「自覺しているなら話が早い。おまえ、Ｃ・Ｃ・相手に何をしている？ どうしてあいつに構うんだ？」

「構う？ ちがうよ、ルルーシュ。むしろ僕は彼女の期待に応えてあげただけだ」

「期待？ おまえに？ 何の？」

言つて、鼻の先で笑つたが、目の下に刻んだ皺の影が範圍を増すのを見て、スザクも追従して笑つた。

「驚いたな、こんなプライベートなことまできみに報告する必要があるのかい？ それとも、ピーピングの趣味があるのはきみのほうだった？」

「何……？」

「真意を訊ねたいのはむしろ僕のほうだよ。ルルーシュ、どうしてきみはＣ・Ｃ・を遠ざけるんだ？ 皇帝を倒して彼女の力が不要になつたから？ まさか彼女の好意に氣付いてないわけでもないんだろう？」

こころもち上を向いている顎の下、ルルーシュの喉仏が感情の波を押さえ込むようにグツと動いた。

まだそんな見栄を張る余裕が残っているのかと思つたら、スザクは自分でも止めようのないくらいに冷え冷えと腹の底が冷めてゆくのを感じた。

ルルーシュの貴族的に整った低い声音が、天井の高い空間にひときわ凜と響いた。

「おまえには関係のないことだ。それなりに考えあつてのことだからな。それこそ、おまえに説明する義務はないと思うが？」

微塵の隙なく整えられた執務室。自分と同じ18の男でありながら、ルルーシュは既にこの空間を王者の風格で自在に支配してしまっている。

たしかに優れているのだろう。あらゆる面で自分よりも存在価値の高い人間なのだろう。

それでも。

「あるよ。むしろ、今の僕以上に彼女に関係している人間もほかにはいないと思うけどね」

「……どういう意味だ？」

ギアス抑止用のコンタクトレンズを嵌めていない右目に、きらりと水が流れるような光が渦を巻く。

今までずっと彼の表面的な穏やかさに騙され続けてきたスザクの目には、今の憤りのほうがいつそ心地好い。

その心地好さをもっと味わってみたいと思った。

「僕はね、ルルーシュ。昨夜、C・C・にプロポーズしたんだ」

「なん……だとッ？」

うつとり陶然と頬を緩めながら囁くように呟くと、高じゆく感情の波に合わせて目で見える愉悦も飛躍的に増えてゆく。

まだ一度もこんなふうな絶望は味わった経験もないクセに。一人前に…何が皇帝だ　ふざけるな。

「返事は一応保留にしてあるけど、けっこいい感触だと思ってる。今晚にでもまた僕の部屋で会う約束をしてるけど」

「スザク…おまえ…ッ」

「ルルーシュが話してくれないからさ、驚いたよ。きみたち丸一年

も一緒に暮らしてたんだってね？ アツシユフォードで。あのとき
きみの影に見え隠れしていた謎の女性が彼女だったなんてね、ふふ
…これも運命の悪戯って言うのかな？」

ついにはルルーシユの瞳が赤みを帯び始めるが、既に一度ギアス
の支配を受けている自分にはわずかな畏怖も感じさせない。むしろ
コントロールを失いつつある感情を露骨に確認できるだけ。

俺など足元にも及ばないくらいに、おまえは奇知に富んでいるつ
もりでいるのだろう。

けれども、俺にはまだ一度もおまえが勝ったことのないのもまた
事実だ。

スザクが憐れむように失笑を洩らすと、さらに露骨にルルーシユ
の面に焦りの色が浮かんだ。

いまさら焦っても、もう手遅れだということにもかかわらず。

可哀想に。

「おまえには関係のない話だッ！ そんな話を、いまさらあいつか
ら聞き出して何の目的が」

「ちがうよ、ルルーシユ。聞き出したんじゃない、単なる寝物語の
一貫さ。するだろう？ ベッドの上で昔話くらい」

「スザク…ッ！」

「ああ、ごめんね。一年も一緒に暮らしてて、一度も手を出さなか
ったんだよね。尊敬するよ、あんなに可愛い女性を前にして」

「黙れッ！！ きさま……C・C・に…ッ」

「いいじゃないか、僕たち友達だろう？ ピーピングが趣味なら、
今夜にでも僕の部屋に遊びにおいでよ？ 声だけなら聞かせてあげ
るよ。彼女、イイ声で鳴くんだ」

「…………スザクッッッ！！ きさまという男はアアアッッッ
…………」

「どうして拘束衣を着ているの？」

寝不足が祟ってどうにも作業に集中することができなかったので、眠気覚ましのつもりで庭園をひとりで散歩していたC・Cは、薔薇の垣根を越えたところでおもむろに声を掛けられた。

「……アーニヤ」

声の方向に振り向くと、そこには天蓋を備えた小さな^{あすまや}四阿がありアーニヤがひとりで座っていた。

身に着けているのは見慣れたナイトオブブラウズの騎士服ではなく、皇族たちが着ているような華美なドレスでもなく、アッシュフォード時代のナナリーが着ていたような素朴な白のブラウスと、髪の色に合わせた淡いピンクのワンピースだ。

活発な格好を見慣れている目にはいささか少女趣味のようにも映ったが、アーニヤの雰囲気にとっても合っていて黙って座っているとまるで人形のようなだった。

「おまえ、アリエスの離宮に籠っていたんじゃないかったのか？」

問いかけながらC・Cは、アーニヤの隣の席に腰を下ろした。

アーニヤの前には黄金色の焼き菓子と紅茶が出されてあったので、焼き菓子のほうを一口摘んだ。

「無断で」

いつも感情を表に出さない少女は、やはり無感動にひとこと呟いた。

「いいじゃないか、疲れているときには甘いものが恋しくなるだろう」

「疲れてる？」

なにげなく言ってしまったから、昨夜のアレコレを思い出してしまったＣ・Ｃは、ひとり気まずげに目を伏せながら視線を外した。

「まあ……いろいろあつてな」

「ふうん」

「……そんなことより、おまえ」

気まずい話題を避けるためにＣ・Ｃは話を元に戻したが、アーニヤは紅茶を一口飲んでからぼつりと呟いた。

「スザクが」

「えっ？」

「たまには顔を見せに来てって、電話を掛けてきたから」

「あ、……ああ、そうなのか」

思いがけなく動揺に煽りを受けてしまったが、話を聞いてしまうとまったくマメな男だなと感心した。

皇宮ではルルーシュとＣ・Ｃの世話を焼き、そのかたわらではアーニヤを心配して多忙な時間を使い分けている。

ロクに掛かってきた電話も取らないルルーシュに比べたら、本当に対照的なふたりだなと思った。

アーニヤが紅茶を飲み切ってしまったので、Ｃ・Ｃはやはり無断で紅茶のポットに手を伸ばすと空のカップの中に紅茶を注いだ。焼き菓子の甘さの残った口の中を洗い流すために、飲み頃だった紅茶をゴクゴクと一気に飲み干した。

「それで？　少しは落ち着いたのか」

マリアンヌのギアスにより幼少の時分からひそかな干渉を受け続けていたアーニヤは、マリアンヌの存在が消失するのと同時にラウンズから脱退した。

そもそもアーニヤがラウンズの一員となっていたのは、深層意識に憑依していたマリアンヌが行動を起こしやすくなるためだ。皇帝もそのほうが何かと都合が良かったため、皇帝直属の騎士であるナイトオブシックスにアーニヤを任命した。もちろん内からは彼女をその道に仕向けるためにマリアンヌからの干渉も受けていた。

だから晴れてマリアンヌの呪縛から自由になった今、アーニヤは改めて自分の存在を見つめ直すための時間を必要としていた。

むしろ彼女には実感のともなわない真相だったから、彼女の意思ではなく、スザクの判断で彼女にそれを勧めたのだ。

そしてアーニヤもスザクの勧めには素直に従った。

滞在先にアリエスの離宮を選んだのはルルーシュだったが、そこにアーニヤとナナリーが一時期滞在していたことをスザクから教えられていたからだった。

アーニヤはふたたび空になってしまったカップの底を見つめながら、こくと冷静に頷いた。

「ナナリー…皇女殿下の日記を見つけた。だから退屈もそんなに悪くない」

「ナナリーの？ おまえ、それは盗み読みだろう？」

C・Cが驚きを露わにして訊ねると、アーニヤはまた一度こくと頷いた。

「ルルーシュ…皇帝陛下が読んでもいいと言ってくれた。何かを思い出すきっかけになってくれたらいいからと」

マリアンヌのギアスに支配されるのと同時に、マリアンヌ殺害の前後の記憶を先王シャルルにより塗り替えられてしまったアーニヤは、6歳以降の記憶があまりに曖昧だ。

その記憶を補うために自らも頻繁に日記をつけていたわけだが、マリアンヌが表層意識に出ていたときの記憶だけは今更どうにも取り戻しようがない。

実子であるルルーシュとナナリーを除けば、今回の一件で一番の被害者とも言えるだろう。

「それで？ ジェレミアの話は聞いているんだろう？ ギアス・キヤンセラーを受けてみる気にはなったのか？」

膺の記憶に翻弄されているせいで、今のアーニヤの精神状態は不安定だ。

元々気丈な少女だったので、何かを怖がったり、不安に泣いたり

するわけでもないのだが、依然として感情があんまり表には表れない。長年にわたって深層意識をマリアンヌによって操られていたために、感情の起伏自体が極めて少なく押さえ付けられてしまっているのだ。

だが、ギアス・キャンセラーを受けるということは、元々あった記憶を取り戻すのと同時に、マリアンヌの殺害光景を思い出させてしまうことにも繋がったので、判断に迷ったルルーシュがアーニヤ本人に判断を任せたわけだったが。

アーニヤが黙り込んでしまったので、仕方なくC・Cは焼き菓子のパクパク口に運んだ。

おかげでまた喉が渴いてしまったが、あいにくポットの中は空だった。

いつそ自分の分もまとめてお茶の追加を頼もうかと思ったが、仮にも虜囚である自分の立場を思い出し、テーブルの上に両手で頬杖を突くと気だるくハアと息を吐き出した。

皇室の複雑な人間模様に巻き込まれるのはごめんだったが、今は今でずいぶんと息の詰まる立場だなと今更のように実感した。

サワサワと淡く吹き付けてくる向かい風が、薔薇の生垣をたえまなく緩やかに揺らしている。

その風に乗るような小さな声音で、やがてアーニヤが呟いた。

「……C・C？ あなた、何百年も生きているって本当？」

「ああ、本当だ」

C・Cは薔薇の匂いをほのかに含んだ風を顔の表面に受けながら伏し目がちに答えた。

「記憶がたくさんあるとうれしい？」

「は？」

「私はよく……わからない」

頬杖についている状態そのまま、視線だけを動かしてアーニヤの様子を覗き見た。

アーニヤは背もたれのない四阿の椅子に深く腰を下ろして、淡い

風に前髪を揺らしながら少し陶然とした表情で呟いた。

「昔のことは覚えてない。なのにアリエスの離宮で過ごしていると時々ここが温かくなる」

言ってアーニヤは両手で自分の胸の小さなふくらみを押さえた。

「ナナリー…皇女殿下の日記を読んでいるときもそうだった。私の記憶にない人の記録のほずなのに、心が勝手に疼き出す。私にはそれがなぜだかわからない。でも、あとで教えられたマリアン又后妃が私にしたことは、その温かな部分と一致しない」

「アーニヤ……」

「人の記憶なんて曖昧なもの。信じるほどの価値はない。私がそう言ったら、スザクはそんなことはないと言った。C・C、あなたは自分の記憶が大切？」

位置関係よりもそれがアーニヤのクセで上目遣いに問われて、C・はなんとなく頬杖をついているのすら気だるく感じてしまって、広いテーブルの上に上半身をくたりと乗せると、直接頬をなめらかなテーブルの表面に押し当てた。

目の前に数多に降り注いでいる木漏れ日。

けれども、ここには届かない。

大理石のテーブルの冷えた感触が心地好かった。

「……そうだな。私はかなりいい加減なんだ。覚えているのがつらいのに、とっさに思い出すのは苦しい記憶ばかりで。うれしい記憶、やさしい記憶もあるはずなのに、決まってそういう記憶は心の底のほうに沈んだまま出てこない。だからもううんざりしているのさ」

生きること自体に。

悲しい記憶をこれ以上紡ぎ続けるのが嫌だから、『死にたい』とずっと思い続けていた。

それがあまりに習慣化してしまっているものだから、ルルーシュのために前向きに『生きたい』と思う気持ちもあるはずなのに、心

がとつさにそつちの方向に動かない。もう何百年もずっと生き長らえているクセして、いつまで経っても生に対して不慣れなものだから、どうやって気持ち前向きに動かしたらいいのか方法がわからないのだ。

そんなC・C・をじつと見つめていたアーニヤは何を思ったのか、ティーカップを載せたソーサーと菓子皿を机の脇に寄せてしまうと、自分も同じようにテーブルの上に頬を乗せてきた。

淡いピンクの髪の毛からふわりと甘くフルーティな香りがC・C・の鼻腔をくすぐり、赤みを帯びたアーニヤの大きな瞳が間近から自分の顔を覗き込んでいる。

そして、先に言った言葉を繰り返した。

「だから拘束衣を着ているの？」

C・C・はすこし驚いて目を見張って、ふわりと感情を緩めるようにして目を細めて笑った。

「自分でもわからない。どうしてなんだろうな？」

「記憶を失くしたの？」

「いいや、そうではないんだが」

知っているのはルルーシュだ。

ルルーシュが自分にそれを強制したわけだから。

そして、恐れている言葉をルルーシュに直接認められるのが怖くて、ずっと臆していた自分は一度も理由を聞けずにしたものだから、1ヶ月も経つというのにいまだに理由がわからない。

今までずっと真実から逃げ回っていたからだ。

「……でも、そんな私が言うのもなんだが、記憶にはそれなりの価値があるはずだ。記憶を全部失くしてしまったら、同じ間違いを何度も繰り返してしまいかねないだろう？」

「記憶があっても、繰り返す人はいる」

「そうだな。そういう奴は、馬鹿な自分を許せる心の広い奴なんだろうさ」

だが、自分は

もう二度と間違いたくはない。

あるときだつてそうだった。

迷いに迷つて結局は、自分では結論が出せずに曖昧なままマオを放逐して、やがて自分の手で葬り去らねばならなかったように。

そんなふうには馬鹿な間違いをもう二度とは繰り返したくない。

そう、願いつづけているはずなのに、もどかしいまでに自分の心すら思い通りには扱えない。

どれだけ苦しい経験を重ねようとも、手に入れたと思うものが存在するならば、歯を食いしばつてでも自分が頑張るしかないはずなのに。

「元氣になつた？」

「え？」

突然問われて、C・C・はとつさに自分の胸の内を覗き見て、仕方がないなと諦めの息を洩らした。

「ああ、元氣になつた。これからそうなるように努力する」
いつまでも過去に留まつていても、絶対にあの男は迎えになんて来てくれない。

なにしろルルーシュの過去は、あるときアーカーシャの剣ですべて砕け散つてしまつたわけだから。

もう二度とルルーシュが過去を顧みないことくらい、自分が一番良く知っているはずだった。

だったら、自分も。いつまでもそんな場所に留まっていなくて、嫌でも歩き出すしか方法はないわけだ。

C・C・は、良く眠つた朝ベッドの中でするように両手を伸ばして伸びをして、アーニヤに不思議そうな顔をされながらクスクスとひとりで笑つた。

ところで、いつまでここでこうしているんだと問いかけたら、アーニヤは「スザクが迎えに来るのを待っている」というので、多忙なんだろうと察したＣ・Ｃはアーニヤを案内するついでにルルーシユの執務室に向かった。

明け方スザクの部屋を去る際に、なんとなく今日の予定を聞いていた。

本心では、さすがに昨日の今日でばったり３人で顔を合わせるのを嫌う思いがあったから、念のため予防線を張るつもりでいたわけだが、思わぬところでそれが役に立ったわけだった。

今の時間ならまだスザクも執務室で過ごしているはずだろうと判断して、適当に皇宮の要所を案内しながらアーニヤとふたりでブラブラと執務室に向かった。

だが、執務室に近づいていくにつれ、廊下や回廊に異様な人数がひしめいているのに気付いた。

Ｃ・Ｃは訝しく思いながら、適当な人間を捕まえて問いかけてみたのだが、どうにも要領を得ない。

仕方なく、人垣を押し分けながら強引に執務室の扉の前まで到着した。

その一帯の人口密度はさらに異様な感じで、隣にいる人間と触れずに立っているのが難しいような状態だ。

しかも、集まっている人間の中には悄然と書類の束や携帯用のパソコンを抱えているような人間もいて、ひよっとしてボヤ騒ぎでもあったのだろうかと思ったが、執務室の扉は堅く閉ざされていて、その両脇に青い顔をした近衛兵が冷や汗を浮かべながら立っている。いったい何があったんだ？ と怪訝に思っていると、隣について来ていたアーニヤがぽつりと小さく呟いた。

「スザクの声…」

「え？」

「それとこれは…ルルーシュ…皇帝陛下？」

「はア？」

言われてとつさに耳を澄ましたが、何しろ周りがざわついているものだから埒が明かない。

仕方がないので近衛兵に開けると命令したのだが、かたくなに「陛下のお許しが出るまで開けるなどのお達しだ」と繰り返すばかりで譲らない。

しかし、周りの喧騒に耳が慣れ始めてみると、中から尋常でない衝撃音が漏れているのがどうしても耳についてしまうのだ。

「おい、いいから開ける。中で殺し合いでもやっているんじゃないのか？ 皇帝と枢木スザクだけなのか？」

「ご命令だ！」

近衛兵自身、判断に自信がないながらも懸命にルルーシュの命令に従う様子を見て、C・Cは軽く舌打ちすると容赦なく頑丈な扉を蹴り始めた。

「お、おいつ何をするツ！ 虜囚の分際でツ！！」

「あいつが死んでからでは元も子もないだろうがツ！！」

無茶を承知で思い切った暴挙に出てしまったのは、なんとなく事の成り行きが読めてしまったからだ。

昨日の今日でルルーシュと枢木スザクがふたりきりで部屋の中で暴れている。

自惚れるなど言うのが無理なくらい、あまりに明瞭簡潔な匂わせだ。

左右から屈強な近衛兵に腕を押さえ付けられながらも、無我夢中で扉を蹴り続けていると、やがて内側に弾けるようにして扉が開いた。

その瞬間、中で繰り広げられていた光景を目にした全員が思わず「あっ！」と声を上げて絶句した。

整然としつらえてあったはずの室内がふた目と見られない惨状に

変わり果ててしまっていた。

壁際に置かれていた20台近くのデスクトップ型のパソコンが、すべて床の上に転がっている。しかも机の上からただ落ちていただけでなく部屋中に四散しているのだ。ところどころ壁が抉られたように凹んでいたから、おそらくそれを誰かが投げつけたのだろう。

部屋の中央に据えられていたはずの豪華なソファも猫足の部分が天井を向いていた。革張り部分の至るところが縦横無尽に裂けていて、おそらくこちらにも何かをぶつけたのだろう。見やれば転々と脚の部分を失くした椅子が転がっている。

部屋の正面に据えられたスクリーンに至っては、まるきり射撃の標的にでもされてしまったような状態だった。一面にボコボコと穴が開いていて、もうすっかり本来の用途を成していない。

それらの惨状の中央で蠢いている人の影は、床の上で組んず解れつ掴み合っていて、たった今まで下になっていた人間が、相手の頬に拳を叩き込むのと同時に上になり、ふたりして忙しく上下を入れ替えながら大格闘を繰り広げている最中だった。

「陛下ッ！！！！ 枢木卿ッ！！ ご乱心あそばされたかッ？！」
全員が呆気にとられて茫然と眺めていた中で、さすがに訓練の行き届いている近衛兵たちの復活は早かった。

叫ぶのと同時に部屋の中に駆け出し、床の上で掴み合っているふたりを引き剥がそうと手を伸ばした時だった。

「~~~~~ 邪魔をするなッ！！ おまえたちは外で耳を塞いで待っているッ！！ 今見たことも忘れるッ！！ ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの命令だッ！！！！」

「~~~~~ イエス、ユア・マジエスティッ！！！！」
ルルーシュの絶叫がそのままギアスの効力を発揮したのは、おそらく格闘の最中に抑止用のコンタクトレンズが吹き飛んでしまったためだろう。

ギアスの力が暴走しているのはまだ左目だけだったが、右目のギアスを制御するだけの余裕が今のルルーシュには残っていなかった。

たちまち現場に駆けつけた3人の近衛兵に絶対遵守の命令が効力を發揮して、脱兎のごとくに部屋の外に駆け去った。

バンツと音高く閉められた扉の影に身を潜めていたC・Cは、とつさにアーニヤの顔を胸元に抱えてルルーシュのギアスから守っていた腕を離した。

アーニヤは不思議そうにC・Cを見上げながら問いかけた。

「今のがそう？」

「……そうだ。あいつのギアスだ。……今はちよつといろんな意味で暴走しているがな」

言つて、部屋の隅の安全な場所から冷静に辺りを見回せば、天井に備え付けのシャンドリアさえ破壊されてスタボ口になっているのに気付いた。

おそらく何かを投げつけたのだろうか……想像するだに恐ろしい。ルルーシュもスザクも最近新調したばかりの執務服を身に着けていたはずだったが、ふたりともに両袖は肩の部分から引き千切られていて、身頃の部分も力ギ裂きだらけでワヤクチャだ。

ほとんど素肌が見えているような胸元には、ふたりともまだ真新しい鮮血が滴っていて、遠目に見ても鼻や口の周りから出血しているのが良くわかった。

そうしている間にも形勢逆転したルルーシュがスザクの腹の上に馬乗りになり、固めた拳を容赦なくスザクの頬に叩き込む。

「……何がギアスのせいだッ!! おまえがわざとナナリーのいる政庁を狙ったんだろッ!!」

そして、口から血の泡を飛ばしながら口汚く罵ったが、スザクの両手がルルーシュの頭髪を鷲掴むと、そのまま自分の頭めがけて振り下ろし頭突きをお見舞いした。

「ふざけるなッ!!! だったらおまえはどうなんだッ!!! ギアスが暴走したからッ?! そんなくだらない理由で死んでしまったユフィはッ!!!」

衝撃に床にドツと倒れ込んだルルーシュを足蹴にしながらスザク

も舌鋒鋭く絶叫した。

だが、二度目に食らった足の先を死に物狂いでルルーシユの腕が捕まえて、そのまま容赦なくスザクを床の上に引きずり倒した。

「だから何だッ！！！！悲しんでいるのはおまえだけだと思っているのかッ！！俺だつてッ！！！！」

「きさまがどの口でそれを言うのかッ！！！！！！」

「黙れッ！！このッ父親殺しがッ！！！！」

「おまえにだけは言われたくないッ！！！！！！」

「止めないの？」

隣りから、こんな時に聞くには初夏の夜風のように爽やかなアーニヤの呟きを耳にして、C・Cはハア〜と大きく息を洩らした。

なんとなく立っているのが面倒臭いような心境だったから床の上にぺたりと腰を下ろしたら、律儀にもアーニヤも同じように座ってくれたので、ふたりの少女は肩を寄せ合うようにして目の前の惨劇を呑気に眺めていた。

もしも目の前にお茶の用意でもされていたなら、遠慮なくそれを愉しんでいるような平和的な雰囲気だ。

「ああ……どうしような？」

「死なない？ ルルーシユ……皇帝陛下」

「なア、さつきから気になっていたんだが、別に敬称は略しても構わないんじゃないのか？ ラウンズではなくなったわけだしな。なんだか言いづらそうだぞ」

「でも、今は皇帝陛下」

「気にするな。なんなら適当に愛称を作って呼んでやってもいい」

「たとえば？」

「そうだな……『あのたわけ』とか？」

「とうへんぼく？」

「そうそう、どうせなら『坊や』呼ばわりしてやってくれ。ルルーシユなら泣いて喜ぶぞ」

「変な趣味」

「ああ、馬鹿な男だからな」

喧嘩の原因なんて聞かないでもわかつている。

きつとスザクが昨夜の一件を匂わせでもしたのだろう。

あれがルルーシュにバレてしまったのかと思えば、腹の底がゾツと冷え切るような気もしたが、目前に繰り広げられている光景を眺めれば怖がつている自分あまりに愚かなような気がした。

そして。

おそらく発端はそれだったのだろうが、この一ヶ月というものの極めて平和的に『話し合い』という知的な手段で縮めていたはずのふたりの距離が、実はそんな腹の探りあい程度では収まらないことをふたり共に重々把握していたのだ。

それでも、今のルルーシュはブリタニアの皇帝として、スザクはその補佐を務めるナイトオブゼロとして振る舞う必要に迫られていたから、理性の力で無理にでも押さえ付けていた感情が、降って湧いた感情的な理由からついには爆発してしまったのだ。

本当になんて馬鹿な奴なのかと笑ってしまう。

こんなにもメチャクチャに暴れ回らずにはいられないくらい互いに激情を隠し持っていたクセに、意地の限りに犠牲の精神を発揮し、てずつと我慢し続けていた。

まだたった18歳の男の子のクセに。

どうしてこのふたりばかりそんなふうな我慢が必要になるのだろうか？

それを思うと、笑っている瞳の端から涙があふれてしまいそうになる。

皮肉な運命だ。

それでも、ふたりは人生を賭して迷いなくその道を選んでいて、歯を食いしばりながら生きている。

生きることを決して諦めはしないのだ。

それに比べて自分は

「……ああ、たしかに情けないな。……ちょっと苦しい経験を重ねたくらいでな……」

口で言うほど簡単な経験ではなかったけれども、それでも、喉元を過ぎてさえしまえば、熱かった記憶もいずれは忘れてしまうのだ。しかし、そのときの『熱かった』という感覚だけが喉に刺さった魚の骨のようにずっともどかしいような苦しさを与え続けていたものだから、煩わしさに前を向いているのが面倒臭くなってしまったわけなのだ。

もつとすっかり前さえ眺めていたならば、苦しいなりに小さな幸福が数多に転がっていたかも知れないのに。

本当は、たったそれだけのはずだったのに。

「それは忘れたい記憶？」

思いながらも、また性懲りもなく落ち込みかけていたところを横から声を掛けられて、思わずＣ・Ｃは横からアーニヤの肩を抱き締めながら笑った。

「いいや、それも全部含めて覚えておきたい記憶だ」

もう二度と、『死にたい』なんて思わないために。

苦しいけれども、心に刻み付けておきたい大切な記憶だ。

「……あ」

しかし、ひとしきり平和的な雰囲気満喫していたふたりの目の前で、デコラティブな執務机まで投げ飛ばされたルルーシュが背中と後頭部を強打して、そのままガツクリ気を失ってしまったのがわかった。

けれども、すっかり我を忘れている様子のスザクは、そんなルルーシュにさえ掴みかからんと駆けてゆく。

「危ない」

「潮時だな」

Ｃ・Ｃは冷静に呟くと、ちょうど手頃なところに転がっていた見るからに頑丈そうな置時計を掴み取り、手首のスナップを利かせ

て投げつけた。

ルルーシユの前髪をむんずと掴んで、今にも拳を叩き込もうとしていたスザクの後頭部にそれが見事にヒットして、スザクは声も出せずにどさりとルルーシユの上に折り重なって倒れた。

C・Cは難しい仕事をやり遂げた人がするようにフウと大きく息を吐き出して腰を上げると、片手でパンパンと服の埃を払った。

「すまない、アーニヤ。医者を呼んでくるから、あいつらを見張っておいてくれないか？ 枢木が目覚めるようなら、そこら辺にある物を適当に投げてもらって構わないから」

「死なない？」

C・Cはその言葉にギュツと眉を顰めながら思案して、どうでも良さそうに吐息した。

「この惨状の責任を取らされるくらいなら、むしろそっちのほうが幸せなんじゃないか？」

アーニヤは一回り部屋の中を見渡した後で、

「そうかもね」

やはり無感動に答えた。

「起きた？」

軽く身じろいだ後に目を開けようとして、それができなかったスザクは混乱した。

暗闇の中でパチパチと目をしばたいてから、ようやく目の上に何かが乗せられているのに気付いた。

誰かの悪戯だろうかと疑問に思いながらそれをどかそうと腕を動

かしたが、今度はその腕が両腕ともに動かない。しかも、こちらは明らかに拘束されている感じがしたので、スザクは次第に焦りを感じながらそばにいる誰かに頼むことにした。

「あの、目の上のものを取ってもらえないかな？」

数秒も待たずに即座に視界を取り戻し、上から無表情に自分を見ている人物に気付いて、スザクはあつと驚きを露わにした。

「アーニヤ！ どうしてきみがここに…」

おそらく乗せられていたのは濡れタオルのようだった。

それを両手で持ってヒラヒラさせていたアーニヤは、無表情ながらもちよつとムツとした様子で呟いた。

「スザクが会いに来てって言った。だから約束通り来て、待っていたのに」

「あ、ああ…ごめん、そうだったね…」

それなのに今まですっかり忘れていたことに気付いたスザクは動揺しながら視線を外したが、身体にグルグルと縄を打たれているのに今頃気付いてギョツとした。

「なっ、なにッ？ なんだいこれ…ッ?!」

アーニヤは極めて淡々と事実のみを口にした。

「陛下に乱暴を働いた狼藉者だからって。即刻処刑だって一部の人間が騒いでて、陛下にお伺いを立てるべきだってまた別の人間が騒いでて、最後はＣ・Ｃが『陛下が目覚めるまで縄でも打ってこいつの部屋に放り込んでおけ』とその場を纏めてた」

あくまで無表情に言われて言葉だったが、なんだがそのときのＣ・Ｃの口調までリアルに頭の中で再現できてしまったスザクは内心ひそかに動揺した。

たぶん相当怒っている。

……まあ当然だろうが。

「あ、ああ、そう…。で、そのＣ・Ｃは？」

「ルルーシュが医務室に運ばれたから、その付き添い」

「そう…」

だったら今頃はルルーシュの枕元で献身的に看病でもしているだろう。

思わずその光景を想像してしまったら、傷付くというよりも、あまりの対応の違いにさすがのスザクもムカついた。

自分はいがない騎士のひとりに過ぎなくて、あつちが帝国にひとりしかない皇帝なわけだから、違いもわかるような気もしたが、だからといって喜ばしいはずもない。

「アーニヤ、すまない。手間を掛けさせて悪いけど、この縄を外してくれないか？」

八つ当たりをするつもりはなかったのだが、言った口調はすっかり不貞腐れた子供のそれで、

それでも本人は大して気にしてなかったのだが、

「駄目」

思いがけなくきつぱり断言されて、スザクはえっ？　と思わずア

ーニヤの顔を仰ぎ見た。

アーニヤはやはり無表情にスザクの顔を見つめている。

「私がルルーシュに怒られる」

「あんな奴、勝手に怒らせておけばいいんだ」

「皇帝陛下なのに」

「知るもんか。金輪際、あんな奴とはもう縁切りだ」

「せつかく」

「え？」

「せつかく『日本』に戻ったのに。また『エリア11』に戻るの？」

暗に責任放棄するのかと責められて、アーニヤがそれを言うこと自体に違和感を覚えながらも、それでもスザクは吐息せざるを得なかった。

「……まあたしかにね。……それはそうなんだけど……」

しばらくしてもう一度縄を解いてくれるようにアーニヤに頼んでようやく自由を取り戻したスザクは、ベッドの上に胡坐を組み、悄然と息を吐きながら肩を落とした。

アーニヤの握力では縄を解くことは難しかったので、細かく切り落としたそれをアーニヤは適当な箱の中に投げ入れて、しばらくするとコーヒーカップを片手にベッドサイドに戻ってきた。

「飲む？」

「あ、ありがとう」

コーヒーカップの中身はただの水で、おそらく部屋に備え付けの鉱水のビンから汲んできたのだろうが、今はその気遣いがあったかった。

口の中が自分の唾液が染みるくらいに切れているのがわかっていだから、慎重に少しずつ常温の水を口の中に含んだ。

それでもやはりビリリと感電するような刺激を感じたので、イテテと小さく呟きながら喉の渴きを癒した。

「はい」

そしたら、飲み干したコーヒーカップを受け取ってくれるのと同じ時にアーニヤが手鏡を渡してくれたので、反射的に自分の顔を覗いてみたのだが、自分でもギョツとして笑ってしまうような面相だった。

両の目蓋が切れてうつすら血が滲んでいて、眉尻から流れていた血がそのまま固まって赤黒く変色していた。頬を中心に顔の全体が腫れているものだから、とても自分のものとは思えないホラーな有様に思わず「ははは」と乾いた笑いを浮かべてしまったら、頬の筋肉が引き攣ってひどく痛んだ。

「~~~~ツツ」

痛みに顔を顰めてみるけれども、それすらやっぱり痛くて。

立場の違いは理解しているつもりでも、ここまで露骨に差別化を図らなくても別にいいだろうくらいは思ってしまう。毎日一生懸命働いてきたつもりなのに、けっきょくはこの程度の扱いかい、くらいは思ってしまう。

すると、その横からまたアーニヤが唐突に何かを差し出した。

「治療、する？」

アーニヤが手にしていたのは、特派時代にも頻繁にお世話になっていた携帯用の救急箱だった。

おそらく誰かがアーニヤに渡してくれたのだろう。

「あ、うん。…というよりも、できるの？」

言ってしまったからさすがに失言に気付いたが、アーニヤはそれでも淡々と治療の準備を開始した。

「私もラウンズ…だったから。訓練は受けている」

「うん、それはまあ、そうだけど…」

ナイトメアに騎乗する人間は、必ず自分で最低限の治療ができるように訓練を受けている。

しかし、アーニヤが甲斐甲斐しく世話を焼いてくれている状況がなんだか意外な感じで、だからそんなふうに訊いてしまったわけだ。

アーニヤの助けを借りながら、ボロ雑巾になってしまった執務服を脱ぎ捨てて上半身裸になると、意外に慣れた手つきでアーニヤが傷口の消毒を開始した。

ただし、そこはやっぱりアーニヤらしく容赦がなかったが。

「い、いて、痛いよ、アーニヤ！」

「我慢して」

「って言われても、ぐあッ、くうう…ッ」

胸も背中も擦過傷だらけで、昔はこうした怪我にも慣れていたはずだったが、最近とみに怪我をするような状況からは遠ざかっていたのに気付いて、思わずスザクは神妙な気分になった。

他人の命を奪い、自分の命も危険に晒している毎日だけれども、肉弾戦をやっているわけではなかったから実際の身体には傷ひとつ負わない。怪我をしたときはすなわち、瀕死の状況に追い詰められている時なのだ。

しかし、ナイトメアを使用している限り、人はその痛みから遠ざかってしまうから、いつだって他人の命を安易に危険に晒してしまう。

たとえば、　　そう。あのブラットリー卿のように。

「……ねえ、アーニヤ？」

「なに？」

消毒を終えて、化膿止めのジェルを塗り付けながらアーニヤが淡々と答える。

スザクは自分の足元に視線を落としたまま続けた。

「きみは戦場で……今まで何人殺してきた？」

アーニヤはすぐには答えずに塗り終えたジェルに蓋をして、次の治療の準備を進めながら答えた。

「それって、悪趣味」

「え？」

「命令だから従った。それが私の任務だったから。でも戦っていた相手はいつも一人」

「ひとり？」

「そう。自分が死なないために、自分の弱さと戦った。スザクは、ちがうの？」

言われてスザクは黙然と考え込む。

自分は……いつもどうしているだろう？

むしろ自分が死ぬことは考えずに無茶ばかりを繰り返してきている。

自分は戦場で戦っているわけだから、いつでも死ぬ覚悟はできていると思っている一方で、破れかぶれになりふり構わず戦っているだけなのかもしれない。

それだからこそ、今まで何度も命の危険に晒されて　　その結果、自分はナナリーを殺してしまった。

もっと慎重に生き残ることを前提に行動していたならば、悪戯に3,000万人もの命を奪ってしまうことにはならないはずだった。どっちにしろ、今更考えても仕方のないことではあるけれど。

「腕、上げて？」

いつしか背中や腹回りに湿布を貼り終えてしまっていたアーニヤ

が、包帯を手に入ザクにうながした。

スザクはとつさに指示に従ったが、スザクの胸元に屈みこんでいるアーニヤの髪先がふわふわと頬や顎の辺りをくすぐるので、なんとなくだらしなく笑ってしまう。

「……アーサー、元気にしてるかな？」

アーニヤの髪の感触から連鎖的に思い出してしまったわけだが、アーニヤは少し驚いている様子で、胸元に屈みこんだままスザクを見上げる。

「一緒に居ないの？」

「うん」。世話を焼く時間が取れそうになかったから、温室の管理をしている馴染みのおじさんに頼んで預かってもらってる。同じ敷地内に住み込みで勤めている人だから、時間の空いたときにはいつでも会いに行けるんだけどね、これがなかなか……。ああ、そうだ。せっかくだからアリエスの離宮にアーサーを連れて行くかい？

きみならアーサーも気に入っていたし」

「駄目。それだと、あなたに会えなくなる。きっと、アーサーも淋しい」

「え？ そ、…そうかな？」

「そう」

なんとなく、変わったなとスザクは思った。

自分は毎日忙しくしていたから1ヶ月なんてあっという間だったが、ラウンズの一員として毎日戦争に明け暮れていた日々と比べると、アーニヤもゆっくり時間をかけて色々考えていたのかもしれない。

見た目の反応は何も変わらないので、いまいち確証は得られていないのだが。

「腕、下げて」

「ああ、うん」

素直に従うと、今度は腕の治療を始めたアーニヤがぼつりと語り始めた。

「ナナリー皇女殿下の日記を読んだ。家族と天気と食べ物の話と、そんなことばかり書いてある。でも、何度読んでも嫌にならない。皇女殿下は小さい頃からあのまま。何も変わってない」

「うん、ナナリーは……そうだろうね……」

答えるスザクも実際は、ナナリーの幼少時代はあまり知らない。

日本に人質として送られてきたときの記憶がわずかばかりあるだけだ。

それでも7年ぶりに再会して、そのときもナナリーは何ひとつ変わっていない。それはすなわちそれだけルルーシュが必死で守ってきた成果ではあるけれども、ナナリー自身も懸命に変わらない努力を続けていたはずだ。

手早く右腕の治療を終えてしまったアーニヤが左腕を貸せというので、スザクは痛む身体を励ましながらか身体を反転させた。消毒前に濡れたタオルで綺麗に拭ってくれるながら、アーニヤが静かな述懐を続けた。

「皇女殿下の話は苦しい？」

「え？ いや…別に」

たしかに自分が奪ってしまった命だ。 それでも。

「たとえ苦しくても、意識的に避けることはしたくない。ナナリーは何も悪くないんだから」

良心の呵責は、すなわち命の重さに対する贖罪だ。

だったら、自分はそれを甘んじて受け入れよう。

「良かった。あなたが聞いてくれないと、私が苦しい」

「……アーニヤ……？」

アーニヤがそんなふうに言うのがあまりに意外で、スザクはわずかに目を見張った。

アーニヤはやはり見た目は淡々と腕の治療を続けている。

「皇女殿下のことを考えながら、いろいろ感じたことがある。でも誰も皇女殿下を知ってる人が居ないから、感じていることが形にならなくて、曖昧なままどこかに消えてしまっから、どんどん私は苦

しくなる。知っている人に声に出して確かめて、意見を聞きたい。その点、あなたは皇女殿下のことをよく知っている。だから、適任」「い、いや、だったらルルーシュのほうがよっぽど適任だと思うけど」

「皇帝陛下のことは、私が知らない」

「それはまあ……たしかに……うん……」

なんとも答えようがなくて言葉を濁すと、タオルから消毒液を持ち替えたアーニヤが小首を傾げた。

「迷惑？」

「えっ？ いや、そうじゃないんだけど、でも、実際問題そうしたくても、頻繁に時間が取れないと思うから。気安く請け負って、結果的にきみをガツカリさせちゃうのは心外だな」

「だったら、簡単。私がここに移ってくる。スザクは手の空いたときに、話に付き合ってくればそれでいい」

「移ってくるって……アリエスの離宮から？」

「そう」

「でも、きみ……平気なのかい？」

正直スザクにも、アーニヤの受けた心理的ダメージの全貌が想像できているわけではない。

それでも、どんな意味においても傷付いているのはわかりきっていることだったから、戦争が日常に存在している場所から離れたところで静養を勧めたわけだった。

アーニヤは迷いもなく、こくんと頷いた。

「ひとりで考えられることは、もう全部考えた。あとは退屈。私なら、アーサーの面倒も見てあげられる」

スザクもつられたように意味もなく、うんとひとつ頷いた。

「そうだね、アーサーもきみなら喜ぶよ」

「決定？」

「うん。ルルーシュには僕のほうから話しておく」

「そう」

言ってもニコリとも感情を露わにしないところは相変わらずだが、それでもどこかしら喜んでいる気配は伝わった。

そのうち、それこそナナリーのように笑ってくれるようになるといい。

そんなふうにしみじみ思っていた時だった。

「それで、どうして喧嘩したの？」

不意打ちで直球の質問を投げられて、思わずスザクは肺が痛むほどに咳き込んだ。

「気が付いたか？」

一方、それと同じ頃、皇族専用の医務室で、眠っているうちに手厚い看護を受けていたルルーシュが目を覚ました。

鎮静剤と痛み止めの注射のおかげで、目覚めてもいささか意識がボウとしている。

だが、スザクがひがんだ理由だけではなく、実際にルルーシュのほうに怪我の程度がひどかった。

全身打撲と擦過傷、唇や鼻の脇の軽い裂傷に加えて、肋骨が左右合わせて3本折れていた。

もっとも、単純骨折で、危惧された肺からも一番遠い場所だったので心配はいらないが、本人にとっては痛いことに変わりはない。次第に意識が鮮明に覚醒してゆくほどに、身体中に疼くような痛みを感じた。きつく眉を顰めて、徐々に感覚を慣らしていった。

「平気か？」

その枕元に腰を下ろしているC・Cが気遣わしげに声を掛ける

と、ルルーシュはゆっくり慎重に息を吐き出した。

「……取っ組み合いの喧嘩など8年ぶりだぞ。スザクは？」

「ああ、アーニヤがそばに付いている」

「アーニヤが？」

声に力が入らないから、自然囁くようにして問いかける。

C・Cはさりげなく、ルルーシュの目に被さっている前髪を邪魔にならないように整えた。

「スザクが一度顔を見せに来いと誘っていたそうだ。私も突然会って驚いた」

「ふん、いちいちマメな男だ」

吐き捨てるようにと言って、ルルーシュはそのままつらそうに目を閉ざした。

それ見ているしかないC・Cは、喉の奥がキュウキュウツと引き絞られてゆくを感じながら、かろうじて言葉を押し出した。

「……ルルーシュ、私が軽率だった。すまない、本当に反省している」

ルルーシュはちらりと薄目を開けた横目で一瞥を与えて、またすぐに目を閉じてしまった。

「……別に、おまえに謝罪される筋合いはない」

素直に謝らせてもらえないところも相変わらずだったが、こんな場合にはさすがに少し切ない。

C・Cはその切なさを埋めるようにして、ルルーシュの髪の毛の生え際付近に片手を添えた。

それを払い除けられなかったことに勇気を得て、思い切って質問を重ねた。

「ルルーシュ……どうして私を遠ざけた？ そばに置いておくのも許せないほど、怒らせてしまったのか？」

ルルーシュはずいぶん長く口を閉ざしていたのだが、やがてはつきり「そうだ」と答えた。

想像はしていても、声に出して断言されてしまうと思った以上に

つらかった。

心臓がキリキリとリアルに縮み上がり、息をするのすら苦痛に感じる。

「だが、おまえが想像しているような理由じゃない」

「……え？」

「おまえの望みは何だ、C・C・？」

静かな太刀捌きで一瞬で切り付けるようにして訊いてくる。

私の 望み？

もう『死にたい』と思わないこと。

だが、それは望んでいたことの愚かさを知って反省しているだけだ。

言ってみれば目標のようなものだったから、決して望みに掲げているわけではない。

とつさに返答に詰まってしまうと、ルルーシュが薄く目を開いて天井を見つめながら瞬いた。

「……ナナリーは……」

「え……？」

「……ナナリーは、たった15年しか生きられなかった。そのうち五体満足に暮らせたのはわずかに半分だ。守るという口実で実の両親に迫害され、元々あった自由をすべて奪われ放逐された挙句に、実の兄の思い上がりで儚い命を奪われた。我が妹ながら、さんざんな人生だよ。それでもナナリーは、ただの一度も自分の命を粗末に扱おうとはしなかった。生きている自分の命に疑問を感じるようなことはしなかった。そんなことをすれば俺を悲しませることを知り尽くしていたからな、あいつは。永遠の時を生きる魔女にはくらない話かもしれないが、それでもナナリーは自分の意思で一生懸命に生きる努力を続けていたんだよ。

それに比べておまえはどうだ？ 死にたいだと？ だったらそう早く言ってくれたら、クロヴィスのやったように一生寝覚めぬようにカプセルの中に放り込んでやったんだ。生きる目的も気力もない

のなら、永遠に眠っていても同じことだろう？」

いつもに比べて張りも艶も失った声音で淡々と、C・Cの胸元に断罪の剣を刺してくる。

そして、今のC・Cだったらルルーシュの気持ちも理解できるのだが、それでも、C・Cにだってその願いはルルーシュに会うまでの自分には至極正当なものだったのだ。

生きることに絶望しか感じていなかった頃の自分には。

「おまえに……なにが」

だから力なく反論を口にする、ルルーシュはヒュツと短く息を吸い込んで一気に吠えた。

「わかってたまるかッ！ ナナリーだけじゃない、シャーリーも、ロロもだ！ 最後の瞬間まで誰ひとりとして『死にたい』なんて自分を甘やかしはしなかった。懸命に生きることだけを目標に自分の幸福を探して、どうにかしてそれを手に入りたいと足掻き続けていたんだよッ。」

『死ねない』身体だからどうした？ いったい何人分の人生を無駄に浪費してきたのかは知らないが、おまえは『死ねない』からこそそれ以外の人間を生涯通して冒瀆し続けているんだ」

「ルルーシュ……それはちがう」

「どこが、ちがうッ？」

鎮静剤が効いていても話しているうちに激して傷が疼いてしまうのだろ。ルルーシュが短く言葉を継いで、ゼイと荒い呼吸で酸素を貪った。

天井を見つめる両の目が冷徹に笑みを含んでいる。

「……ふっ……最後くらい笑って死ね」か？ 我ながら何も知らずによく言ったものだ。おまえが本気でそれを望むなら、今でも叶えてやらなくはない。だが、俺はごめんだね。『死にたい』人間に生きる道理を説くなんて時間潰しは。今の俺にはそんなくだらしないことに費やしている時間はない。そんなに死に拘泥していたいなら好きにしろ。俺はそんなおまえには用はない。どこへでも好きな場

所に…消えてくれ」

「……ルルーシュ……ッ」

「それが嫌ならッ！ 今からでも死ぬ気で生きる目的を見つけろッ！ 自分の手でッ！！ 自分の力でだッ！！」

最後に一度だけ訊いてやるッ！ 本当のおまえの望みは何だッ？

！ 心の底から希求して止まない望みは何なんだッ？！」

もう止めてくれとC・Cは思った。

ルルーシュが痛む身体に鞭を打ってまで心配されるほど重要なことなんかじゃない。

そんなに大切にされるほどの価値はない。

それでも、そう思うほどに、真剣に自分と対してくれているルルーシュの気持ちが切なくて。

思い通りにならない感情に、また喉の奥が引き絞られてゆくから苦しい。

自分は身体のどこも痛めてないはずなのに、必要な言葉さえ自由に操ることできないもどかしさに血が滲むような思いがした。

「……私は…。私は、おまえさえ……望んでくれるなら、ルルーシュ……おまえと一緒に生きていたい」

「だったらッ！ 少しはそれらしく努力をしろよッ！ 何なんだよ、おまえはッ！ フラフラしているから、スザクなんか騙されて…ッ！」

「あれは……だって、おまえが…許してくれるはずなどないと思っていたから。私は今までさんざんおまえを騙して、人生を狂わしてしまったわけだからな。憎まれても当然だと思っただろう？」

「だから馬鹿だというんだッおまえはッ！ いったい今まで俺の何を見て、何を聞いてきたんだ？ 最初から俺のほうこそおまえの存在を利用していただろう？ 最初からそういう契約だっただろう？

俺たちは！」

「でもおまえは……まさかこうまでなるとは想像もしていなかったはずだ。だが、私は…最初からすべてを知っていて、それでもおま

えを今の状況に追い詰めた。おかげで何もかも失ってしまったのに……その代わりに残されたのが私では、あまりに割に合わないだろう?。」

「くだらない。だったら、割に合うように努力をしると言っているんだ。それとも自信がないのか? 何百年も生きてきて、人ひとり幸せにする方法も知らないのか?」

幸せ?

そんなものがはたして自分の努力次第で手に入れられるものなのだろうか?

いつだって自分は、他人の幸福を羨ましげに見ているだけだった。幸福はいつだって、他人のものであるはずだった。

そんな自分に。

「ああ、……私はずっとひとりで生きてきたからな」

「だったら、ちょうど良い暇つぶしになるだろう? 俺はこの先も

当分は他人のために人生を浪費するので精一杯で、ロクに自分の幸福を追求する時間も残ってそうにならないからな、暇ならおまえがせいぜい頭を使え」

「おまえを幸福にするための方法か?」

「そうじゃない。あくまでおまえが幸福になるための方法だ」

すなわち俺の幸福が、おまえにとっても幸福なんだろう? と暗に匂わされ、C・Cはくたりと力を無くしたように微笑んだ。

「……この自信家め」

「ああ、悪いがな、俺にはおまえを幸福にするなんて軽々しく約束はできない。むしろ苦しませる自信ならいくらでもあるのだがな。そんな状態が続くと知っていて、おまえに何かを強制するなんてことはできない。だから、おまえがどうしたいかは、おまえが自分で見つけて、選んで、実行してくれ」

ルルーシユの幸福が自分にとっての幸福を意味するならば、すな

わちそれは苦痛に対しても同様だ。

ルルーシュの感じる苦痛は、きつとC・C.にとっても同じ分量の苦痛を味わわせてしまうことだろう。

「……………安心しろ。それなら私のほうが慣れている。伊達に何百年も生きてないからな」

それでも、望んだ相手に望まれてそばで過ごしていられるなら、二人でひとつの苦痛を分け合うこともできるのだ。

「だったら、そういうことだ。……………あとは好きにしてくれ」

ぶつきらばうに呟いて、疲れたのだろう、慎重に深く息を吐き出して目を閉じた。

C・C.は少し迷ったが、思い切って身体を傾けるとルルーシュの肩の上に頬を押し付けた。

「……………何だ？」

やさしさの欠片もない声音が無表情に問いかけてくる。

C・C.は、そんな声音にすらどうして自分が笑えて仕方がないのか理解できずに困惑した。

それでも、笑いが止まらないのだから仕方がない。

「……………だから、私の好きにしているんだ。……………しばらくの間で構わないから……………このままでいさせてくれ」

ルルーシュの体温を間近に感じる事ができている。

それだけで胸が張り裂けそうなくらいに苦しい。

自分がそれを望んでいる限り好きなだけこの温もりのそばにいられるのかと思ったら、それだけで望みはすべて叶えられてしまったような幸運に感じる。

湿布の匂いがたまらなく目に染みてしまったが、この格好付けの男が自分のために我を忘れて暴れた結果かと思ったら、そんな青臭いところまで愛しくてたまらないように感じた。

ルルーシュは身じろぎもしないでそのまま身を任せていたのだが、しばらくするとフウと小さく吐息した。

指先でC・C.のつむじ付近をトントンとノックして呼びかける。

C・Cはルルーシュの温もりから離れるのが忍びないような気がして激しく未練を感じたが、呼ばれた手前仕方なく顔を上げると、おもむろにルルーシュの手が強引にC・Cの首の後ろを掴んで引き寄せた。

技巧もそつけないただ触れるだけのキスだったが、C・Cは一瞬で何も考えられなくなってしまうた頭の片隅で、漠然と幸福の意味を感じ始めていた。

一週間後、C・Cはルルーシュに頼まれていた資料を片手に皇宮の中庭をのんびり散歩をかねて歩いていた。

贅沢に人の手間と労力を掛けられる場所だったから、無駄に殺虫剤などを使用しないおかげで、庭園の至るところに虫やそれを狩る鳥の姿を見かける。歩いている目前に小さな羽虫が飛んできて、それに目を奪われているスズメが鋭く羽ばたきながら横切っていくことなどたびたびだ。

朝からよく晴れている一日だったので、からりと乾いた気候の割りには少し蒸していて、布の面積の広い拘束衣で過ごしているには少々暑かった。

どう見てもダラダラ覇気のない様子で、時折ふわアとあくびを噛み殺す。

それだけでなくも生きる気力をなくしていた魔女の時代にさんざん怠惰を極めていたわけだから、これから先はもう少しシャキシャキ活発に行動しても良さそうなものだが、ただでさえ周り中が非常に殺伐と多忙を極めているこのご時勢に自分まで付き合っただけで忙しく

する必要はないように感じた。

それでは一緒に居るルルーシュも気の休まる暇がないだろうし、せめて自分ひとりくらいはいつだってゆったり構えてあげようと判断した結果だ。

ルルーシュは、わずかに一日ベッドの上で静養しただけで忙しく公務に戻ってしまった。

だが、その間ずっとC・Cはルルーシュのそばで過ごしていたので、暇に任せて「どうしていまさら拘束衣なんだ？」と訊いてみた。

そしたらルルーシュは真顔で、「皇帝が直々に捕らえている人間に手を出す馬鹿はいないだろう？」と答えた。

皮肉なことだが、父王シャルルの話した昔話が影響したのだ。

ルルーシュ自身、結果的に複雑な要因が絡み合っていたとは言え母親を皇族関係者に殺されている。

しかし、あくまでそれは母親が平民の出身だったからと思い込んでいたわけだが、実際は皇族に関係するものならば誰でも簡単に命を狙われる可能性を秘めた魔の巣窟だったのだ。

知識としてはルルーシュも十二分に知り抜いていたつもりでも、直系の血族であるシャルルの母親ですらそんなふうにあっけなく命を落としていたとはそれまでまったく知らずに過ごしていた。

あの場に限っては、それに構っている場合ではなかったが、自分がいざ父王シャルルでさえ戦慄させた魔の巣窟に足を踏み入れるのかと思ったら、後になって危ぶむ気持ちが沸いてきた。

そして自分の命だったら自分自身で守れるし、いざとなったらスザクがいる。

だが、C・Cは？

スザクと相談を重ねた結果により、言葉で皇族たちの説得が成功しない場合には「我を認めよ」とギアスの力で強制することが決ま

っていた。

まさにその力でユーフェミアを殺された恨みの消えないスザクだったから、基本的に今でもルルーシュがギアスを使用することを嫌っていた。だから何度も話し合いを重ねた末の最善の妥協案だった。そのため、ルルーシュ個人の安全は保障されたようなものだったが、今となつては率先力として起用することもできないＣ・Ｃの立場が微妙な存在になることは初めからわかつていたことだった。だったら、常に目の届く場所に置いておくのもひとつの防衛手段かもしれない。

けれども、それでは自分にとって大切な相手だという印象を強めてしまっただけだった。

「我を認めよ」というギアスにより帝位を争う自体は避けられるだろうが、それでも人の世には立身出世を願う欲だけは変えられないものだった。その欲に関しては人の業であるのと同時に、確かに現状からの成長をうながす行動の原動力でもあるから、むやみに押さえ付けてしまうわけにもいかなかった。

結果、存在価値が高まるほどに身の危険が高じてしまうと考えたのだ。

だから最初から一切の権利を剥奪した。皇帝に囚われている虜囚の身分なら、Ｃ・Ｃに害を与えて出世を目論む輩は減るはずだ。万が一にも、虜囚という身分を蔑んで手を出す不遜な輩が現れても、その程度の安直な相手だったらＣ・Ｃが単身排除できるはずだと考えた。

そうしてルルーシュは独断でＣ・Ｃの処遇を決めてしまったわけだったが、いかんせん人の興味が発するエネルギーを侮っていたものだから、ルルーシュの感知しないところで噂は漫然と広がりを見せていたのだし、そもその理由を肝心のＣ・Ｃに伝えなかったのが間違いだった。それでもなんとかして自分にできる方法で未然にＣ・Ｃの身に降りかかる危険を避けたいがために考え出した方策だったのだ。

「しかし結局は、俺の真意も理解できない天然バカが一番身近にいたわけだがな」

ルルーシュは説明の際、そうして思い出した怒りに静かに憤慨していた。

それを言われると、さすがにC・Cも反応に困ってしまったが、あれはあれであのときの自分たちには必要だったのだ。

今の幸福を認めるならば、どんなに愚かな過去の過ちも否定したくはない。

それが苦しいと思うならば、二度と道を踏み外さぬように大事な轍にすればいいわけだ。

とはいってもなかなか実際は割り切るのに時間が掛かりそうではあったが。

散歩の途中でアーニヤに出会って、お茶に誘われたのでしばらくアーニヤの部屋で雑談に励んだ。

三日前に一度アリエスの離宮に戻って荷物を片付けてきたアーニヤは、今ではスザクの部屋の真向かいに用意された自分の部屋でゆったり流れる時間を過ごしている。言ってみればC・Cと唯一暇を分かち合える相手だったから、顔を合わせれば頻繁に話に花を咲かせていた。

最近アーニヤは心理学の勉強を始めたらしく、自分の内面を見つめ直す努力の一環に知識を用いるのと同時に、できればそうした分野にいずれは進むつもりでいるようだ。

ひとしきり話して、腹の具合も気分も満たされたところでC・Cはアーニヤの部屋を後にすると、ようやく当初の目的の場所に向かった。

件の執務室は結局、全面改修するしかなかったので、別の部屋が新たに執務室として用意されていた。

執務室前の近衛兵に用件を告げると、しばしの間があつて中から扉が開かれた。

皇族以外はギアスの力でなく自由意志に基づく忠節心でルルーシ

ユに仕えている者が大半だった。だから一時期は枢木スザクの愛人として噂の流れてしまった自分が平然と皇帝に謁見を求めるのに難色を示す者も多かったが、直接文句を言ってくる連中もいなかった。今回の件に懲りたルルーシュがおそらく裏から何らかの手を回しているのだろう。

C・Cはいつもどおりに注がれる視線の意味には気付かぬフリを装って、ブラブラと執務室の中に足を踏み入れた。

中の配置は以前と若干違っていた。まず入ってすぐの壁の両側に設けられたスペースで皇帝の指示で迅速に作業を進める事務従事官、その奥にかなり広めに取られた会談スペース、別室に大会議室を備えているところまでは同じだが、皇帝の執務スペースが別室に分けられているのが変わった点だった。

万が一にも、ふたたび執務に必要な品々を壊されてはたまらないと配慮した結果だったが、なんだか小さな子供を危険な場所から遠ざけるようなやり方に、皇帝として大切に扱われているのか怪しいところだなとC・Cは苦笑を洩らした。

皇帝の部屋の扉の前に陣取っている直近の近衛兵に用件を告げると、C・Cは自分で扉を開けて部屋の中に足を踏み入れた。

ルルーシュがひとりで過ごすにはずいぶんと贅沢な広さだったが、皇帝としての威厳を保つためにも多少の演出は必要だ。重厚に仕上がった室内装飾は、一昔前の王様が過ごしていたようなゴシック調で整えられていたのだが、三方の壁に映し出されているスクリーン、それを操るコンソール。イカルガの通信スペースを知っているC・Cの目にはなんだか郷愁を誘われる雰囲気だった。

もっぱらルルーシュはこの部屋でひとりで過ごしているわけだが、必要のある際にはこの部屋にも要人を招き入れているようだった。

今はスザクが何かの報告をしている最中で、例の一件以来初めて顔を合わせたC・Cは自分のほうから挨拶した。

ルルーシュに比べたら怪我の程度は笑ってしまうくらいの軽症だったが、それでもまだ頬の腫れは引いておらず、普通でいるのにな

にやら拗ねているように見えてしまうので笑ってしまった。

そしたら、どうやら本当に拗ねていたらしく、いつになくぶつきらぼつにスザクが声を掛けてきた。

「ご機嫌だね、Ｃ・Ｃ・？」

「それはもう、おかげさまで」

ニコニコと機嫌良く微笑みながら、スザクには一瞥を与えただけでまっすぐルルーシュの元に向かった。

ルルーシュは革張りの大きな椅子に深く身体を預けているのだが、別に威張るのが目的でなく、怪我の影響でどうしてもその体勢をとらざるを得ないだけだった。

だからＣ・Ｃも気にした様子もなく持ってきた資料を渡して、手早く説明を加えて用件を済ませると、そのままくるときびすを返した。

だがその際、あまりにさりげなくルルーシュの肩に触れていたたので、そのさりげなさゆえに余計に目に留まってしまった親しげな接触到、ワザと当てられていることを察したスザクが思わせぶりに目を眇めた。

Ｃ・Ｃが通り過ぎてゆく瞬間を狙って、ルルーシュに視線を合わせながら訊ねた。

「ところで、きみたちもう寝たの？」

「なッ……！」

瞬間沸騰する勢いでルルーシュは顔を赤くして固まってしまったが、Ｃ・Ｃはけろりとした表情で振り向くなり笑顔で答えた。

「いいや、まだキスだけだ」

「馬鹿かッ！ おまえも答えるなッ……！」

あまりに大きな声を上げてしまったものだから、怪我に響いたルルーシュが顔を顰めた。

しかし、スザクは見るからに不貞腐れた様子でフンツと鼻を鳴らした。

「キスだけでそれじゃア、これから先が思い遣られるね」

「スザクッ!!」

顔を顰めながら尚も怒鳴るルルーシュに、C・Cは軽く肩をすくめると歩いた道をまた戻った。

なにげない様子で激昂しているルルーシュの肩に手を置いて、軽く上体を傾けると唇の上に触れるだけのキスを落とした。

「ッ!!」

なおさら赤くなるルルーシュの肩をポンポンと数回叩いてから、そのまま外野に目を合わせもしないで真っ直ぐに執務室を後にした。呆気にとられた様子のスザクを前にして、どう反応したらよいのかわからずにルルーシュは頑なに沈黙を守った。

やがてスザクが嫌そうに肩から息を吐き出すのと同時に問いかけた。

「幸せかい？」

ルルーシュはグツと言葉に詰まって視線を外した。

「…わ、わからん。…まだ考えている最中だが、むやみに疲れるのだけは事実だ」

「認めなよ。言っておくけど、僕もまだあきらめたわけじゃないからね」

「おま…ッ、スザクッ!!」

「では、陛下」

切りつけるように言って、スザクはルルーシュの追求を遮ると、迫力のある瞳で微笑み。

「今しばらくは我々の幸福を追求して頂くとうましようか、世界の幸福を」

騎士の立場に帰ってうながした。

「 e n d e 」

TURN 21・555 「猫が飼いたい」(前書き)

ルルタニア@準備中。むしろこんな感じではのぼのして欲しかった願望篇。

「なあ、ルルーシュ、猫が飼いたい」

「……今なんだか激しく幻聴が聞こえたような気がするが、気のせいかな？」

「枢木スザクが連れていた猫がいただろう？ アーサーとかいったかな。あんなに大きな猫じゃなくても構わない。もっと小さい猫で良いんだ。毛色はそう……純白か、ブルーグレーというのも豪華で可愛いな」

「知っているか、C・C・？ 大きい猫よりも、小さな猫のほうが世話に手間隙が掛かるんだぞ？ それに毛色まで指定すると言ったとは、」

「ああ、オスとメスのどっちのほうが可愛いかな？ まあ、どっちでもいいか。世話をしているうちに愛情が移ってしまうからな。どっちだって可愛いに決まっている」

「……おまえには、人の話を最後まで聞くとする最低限の礼儀も通用しないのか？」

「だからな、ルルーシュ。私は今ものすごく猫が飼いたい」

「ああ、わかった。皆まで言うな。それはつまり、俺に毛色は白かブルーグレーの子猫を探してこいと言うことで、なおかつエサの用意も、トイレの始末も、寝床の洗濯も俺の仕事。子猫のうちは活発に動き回るのが仕事だから、飽きさせないように手ごろな遊び道具を見つけてくるのも俺の仕事で、もちろん定期的に動物病院に連れて行くのも俺に課された任務で、万が一体調を崩したときには、当然俺が徹夜をしても看病する。ただおまえは気が向いたときだけ子猫の相手をして、可愛いなア〜と猫可愛がりをしていられる状況だけを用意しろと俺に求めているわけなんだろう？」

「ふふつ、良くわかつているじゃないか、ルルーシュ」

「ふつ、あんまり褒めるな。うれしくないからな。そんなおまえに最後にひとつだけ聞いてやる。どうして、俺が、そこまで、おまえに、尽くさないといけないんだ？」

「だって、おまえは私の笑顔が見たいんだろう？」

（にっこり）

「……………（結論的には決して間違いではないのだが、さすがにそれは要約しすぎていやしないか？ たしかに俺は『おまえに笑顔をくれてやる』とは言った。だからと言って、尽くしてやるなどと言った覚えはカケラもないわけだが）……………」

「どうした、ルルーシュ？ おまえらしくもない。言いたいことがあるなら、ハッキリ言えばいいだろう」

「……………そ、そんなに、どうしても猫が飼いたいのか？」

「うん？ 別に犬でもいいけどな。何かをおまえと一緒に育ててみたいと思っただけだ」

（さらににっこり）

「……………（こ、こいつは？。素直になったらなっただ、どうしてわがまま度合いがアップしているんだ？ というよりも、どうして俺はこんな責められ方で追い詰められなきゃいかんだ？ 落ち着け、俺！）……………わかった、やはり毛色は白がいいんだな？」

「いや、別に本当はなんでも構わないんだ。おまえが好きな種類を選んでくれ」

「そういうわけにもいかないだろう、仮にも言い出したのはおまえだ。そうだな、さっそく週末にでもブリーダーのところに見学に出かけてみるか？」

「私はいつだって構わないが、本当におまえはそれでいいのか？」

「…（はっ）……………い、いいに決まっている」

「そうか、やっぱりおまえは頼りがいのある男だよ。ルルーシュ」

（ものすごく幸せそうににっこり）

出かける約束を交わしたついでに、いそいそと他にも見て回りた

い店のラインナップを始めたＣ・Ｃ・を目前に、ルルーシュは今頃ここに至った経緯を茫然と反芻し始めていたのだが、なぜだかＣ・Ｃ・がニコリと微笑むたびに頭の中で何かがリセットされてしまうので、最後にはあまり深く考えないことにした。

どのみち、こいつの笑顔は金では買えないわけだからな。そんなことを思って、後でこっそりひとりで赤面した。

「 e n d e 」

TURN 21・655 「彼女の好み」(前書き)

ルルタニア@準備中。むしろこんな感じではのぼのして欲しかった願望篇。

「なあ、C・C・？　ぜひとも単純に答えて欲しいんだが」

俺はおまえにとってタイプなのか？　とルルーシュが藪から棒に真顔で訊ねてきた。

そのときちょうど食べていたピザの最後のひとくちに齧り付いていたC・Cは、一瞬で味などわからなくなってしまった腹いせに、眉間にギョツと深く皺を刻んだ。

それはまあルルーシュという男は、本人的には理路整然と思考を重ねているつもりでいて、それを全部露わに口に出すわけではなかったから、一部分を訊かされてしまう方に見れば時にはかなり突飛な奴だったが。

「単純に答えてやりたくとも、あまりに唐突過ぎて困ってしまうわけだが」

そのまま見た目ばかりは冷静に咀嚼してから飲み下すと、C・Cは空いたピザの皿を折り曲げながら少し憮然と、いつもの態度でやり返した。

ルルーシュは「まあ、そうだろうな」と神妙に頷いて見せている。「いや、おまえが記憶を失くしていた時期があっただろう？　実際にそばにいた時間はほんのわずかなはずだったんだが、おまえがあまりに簡単に俺に懐いていたのが不思議でな」

「待ってくれ、ルルーシュ。その言い方にはかなりの語弊を感じるぞ？　懐いていたのは私ではない、あくまで記憶を失くしていたほうの私だ」

「別に意味が通じれば言い方など気にする必要はないだろう？」

「大いに気にするぞ。あれには私の記憶がなかったように、私にはあれの記憶がないわけだからな。ただ、時々気になって覗いていたおかげで、多少は事情に通じているのは事実だが」

適当なサイズに小さく折り畳んだところで、珍しく律儀にダストボックスまで歩いて行って始末した。

その背中にルルーシュが、淡々とした調子で突っ込んだ。

「そうか。やつぱり覗いていたのか」

「ッ、……し、仕方がないだろう？ 考える時間が欲しかったとは言え、おまえに無断で入れ替わってしまったわけだしな。ただ、記憶が無いなりに私的な観点で言わせて貰えば、あれは懐いていたというよりも、新しい主人が優しい奴だったので単純に安心していただけだろうさ」

口早に言って元の場所に腰を下ろすと、ルルーシュが食事の最中は避けて置いてくれたチーズくんの人形を渡してくれながら続けた。「だから、そこだよ。俺には安心されるようなことは一つもした覚えがないんだが」

「あつたじゃないか。」

第一に、遺跡からあいつを連れ出す際に、おまえもまだ動揺していたはずなのに、怖がらせないように何かと声をかけていた。

第二に、イカルガに戻ったおまえは文句も言わずに、私の散らかしていた部屋を片付けた。その際、極力大きな音は立てないように気を配っていただろう？ そうした細かい気遣いには慣れていなかったから、それだけでも第一印象はかなり違ったはずだ。

第三に、私もしてもらったことがないくらい親切にピザを食わしめてやっていたな。あんなに上手いものを食った経験は皆無だったろうから、あれだけでもかなりの高ポイントだ。

第四に、たしかに仮面で殴ってしまったのは頂けなかったが、その後のフォローは満点だった。あいつの話聞いても、安っぽい同情の言葉一つ掛けはしなかっただろう？ むしろあのときはおまえのほうこそ、なんだか無性に守ってやりたい感じだった。

第五に、やっぱり絆創膏だな。衣食住を世話してもらうつ以外に人から物を貰ったことがない様子だったからな。珍しさも手伝って、単純にうれしかったんだろう。

第六に、掃除の道具を渡してやったのが正解だったな。おまえは特に何も言わなかったが、あれひとつがあいつに居場所を与えてやったんだ。

とまあ、総体的に考えて、私から言わせて貰えば、あれならあいつでなくても安心して当然だと思っわけなんだがな」

滔々と流れるように流暢に語り終えたC・Cは、ルルーシュの差し出してくれたミネラルウォーターを素直に受け取って、何も考えずに口に含んで嚥下した。

ルルーシュは心底感心している声音で呟いた。

「で、結局俺と一緒にいた時間は、たまたま全部覗いていたわけなんだな」

「ツツぐ…ッ！ …ッ！ …ッ！」

飲み込んだばかりで充分に潤っている口腔内の水分にすら思わず咽てしまったC・Cは、ルルーシュにしばらくのあいだポンポンと背中を叩かれながら苦しんだ。

「…ぜつ、ぜつたいつ、ワザとだろう…ッい、今の…はッ！」

「バカか。そのつもりなら飲み込む前にするだろう？ …ところで、落ち着いてからで良いんだが、ひとつ折り入ってお願いしたいことがあるんだが」

「…は、…はア？」

「いや、おまえの事情は深く訊ねると嫌がるだろうから何も訊かない。それでも、はじめをつけておきたい用件があるから、今からおまえをあいつだと思って言わせて貰っても構わないか？」

そういうと同時に神妙な表情で顔を覗き込んでこられて、C・Cはらしくもなくとつさに返事も出来ずに軽く目混ぜで頷いた。

ルルーシュは、律儀にも声音の調子までわずかに変えて言った。

「あのときはたびたび大人気ない真似をしてしまっって悪かった。で

も、だからこそ、俺にはおまえの気持ちがありがたかったよ」

やさしげに微笑さえ浮かべて、最後は子供にするようにC・C・の頬を片手で包んで撫で上げた。

その感触を追うようにカア…と赤面してしまったC・C・は、やはり何も言うことはできなかったのだが、手を離すと同時にいつもの調子に戻ったルルーシュは、皮肉に笑んと言った。

「だから、どうしておまえが赤くなる？」

C・C・は、中身が半分以上残ったペットボトルを投げつけながら、「知るかッ！」と怒鳴った。

「 e n d e 」

TURN 21・755 「双眼ギアス」(前書き)

ルルタニア@準備中。むしろこんな感じでほのぼのしていて欲しかった願望篇。

ロイドに乗馬に誘われたので着替えるために部屋に戻ってきたC・は、洗面所でじっと自分の顔に見入っているルルーシュの背中に気付いて思わずしばらく凝視した。

基本的に視線は自分の顔の上に据えたまま、上下左右に忙しなくわずかに顔を動かし続けている。

「いったい何をしているんだ？　とは思ったが、しばらく見てもわからなかったので素直に訊いてみることにした。」

「ルルーシュ、美顔体操でも始めたのか？」
「バカか」

一瞬だけ眉間に皺を刻んで、けれども視線はやっぱり自分の顔を見つめたまま動かない。

「どこからどう見ても、今はおまえのぼうがよっぽど馬鹿だろうと思いつながらC・C・は軽く嘆息すると、好奇心に負けて自分のほうからルルーシュの背後に近づいた。」

「だったら、何をしているんだ？」

ルルーシュは眉間に皺を刻んだまま、低く唸るようにしてそれに答える。

「…さつきから妙に違和感を覚えているんだが、見た感じゴミが入っている風でもなくなつてな」

「なんだ、それなら眺めているより洗ったほうが早いだろう。舐めてやろうか？」

「　　ばっ」

「冗談だ。いいから、ちょっとこっちを向いてみる」

言うなり、ルルーシュの細くどがった顎に手を掛けて、なかば強引にクリッと顔を捻じ曲げさせた。

とは言え、身長160センチ台のC・Cと、180センチ台のルルーシュでは、この体勢にはかなりの無理が生じた。

結局、少々行儀が悪いが洗面台の上にルルーシュを軽く腰掛けさせて、C・Cは正面から両手で顔を挟んでマジマジと瞳の奥を覗き見た。

「おい、顔を顰めるな。見えないだろう？」

「おまえがちよっと顔を近づけ過ぎなんだ」

「近づけ過ぎないでどうやって覗き込むんだ？ いいから、もうちよっと可愛くぱっちり目を開けてみる」

「…いちいち癪に障る奴だ」

そうは言いつつも、よっぽど正体不明の不快感に難儀をしているのだろ。ルルーシュは割合素直にC・Cの要求に従った。

まだまだ少年期の姿かたちから完全な脱却を図っていないルルーシュだったから、顔の輪郭も造作もどちらかと言えば美少女的に整い過ぎている。そんな男が、本当に可愛くぱっちりと目を見開いてみせたものだから、思わずC・Cは吹き出した。

ルルーシュは、それはもう嫌そうな表情でそれを睨めつける。

「おまえは…喧嘩を売りたいなら、今なら喜んで買ってやるが？」

「お、怒るな。悪気は無かったんだ」

さすがにC・Cも慌てて謝罪を割り込ませはしたのだが、内心では、本当に男にしておくのが勿体ないくらいだなと今更のように関心を深めていた。

特に手入れに気を使っている風ではないのに、頬はツルツルと白桃のようなすべらかさ。もちろんシミのひとつも見当たらない。

軽く息を吹きかければ顔の産毛に当たってしまいそうな間近から覗き込んでいるにも関わらず、まったく毛穴が目立っていないのは、少々女性の視線的に嫉妬を覚えてしまいそうなほどだった。

上下の睫毛も綺麗に生え揃っていて、その上にクッキリ影を落としている眉の形も整える必要がないくらいだ。

そういえば、こいつは両親共に美形だったからな…。

なんとなくそんなことを思ったＣ・Ｃは、良心の呵責からわずかにツクンと胸の奥に刺激を感じたが、見た目ばかりは何事もない様子を装って、眼科医きどりの診察を終わらせた。

「ああ……たしかにゴミらしきものは見当たらないな。ひょっとして角膜でも傷付けてしまったのじゃないのか？ 汚い手でしょつちゅう触るから」

「誰の手が汚いんだ？」

ルルーシュは軽く頭を振って顔の自由を取り戻すと、それが常態であるかのように眉間に再び皺を刻んだ。

「触ってるじゃないか。ギアスを使う前には必須だろ？」

Ｃ・Ｃは軽く指先でルルーシュの鼻梁の線を撫で下ろした。あと数年もすればここらあたりを中心に、さぞかし精悍に成長しそうな予感を秘めていたので、内心では思わずふふっと少しほころんでいる。

ルルーシュは、凶星を言い当てられてしまった様子で、ムツと口を噤んでしまっている。

仕方ないなアと思いながら、Ｃ・Ｃは自分のほうから助け舟を漕ぎ出した。

「どうしても困るようなら、制御の方法を教えてやっても構わないが」

「そんなことができるのか？」

たちまち驚愕の表情を露わにして見せるのに、こんなところは本当に歳相応だなとＣ・Ｃは思った。

「ああ、今なら大して難しくは無いはずだ。右目はまだ発現したばかりだからな、暴走している左の分を意識的に右に少し渡す感じで……充分難しいように聞こえるんだが？」

「御託を並べてないで、まずは先にやってみろ」

問答無用でＣ・Ｃは再び両手のあいだにルルーシュの顔を挟んでしまうと、親指をそれぞれ左右の下睫毛の下に押し当てた。

「ほら、左のほうに力が集まり過ぎている。少しずつ右目のほうに

分散させてみるんだ」

「…う、……やっではいるが…しかし」

「だったら、左は忘れて右だけでギアスを使ってみる。それならできらるう？」

「うん？ …あ、ああ」

とりあえず素直にギアスを発動させたルルーシュだったが、間近から顔を覗き込まれている状態で目の前にいる相手にギアスを使っているという状況に気後れを感じているようだ。集中力が足りなくて、すぐさま使い慣れている左目のギアスばかりが発動した。

意外な不器用さに業を煮やしたC・Cは、なおさらルルーシュの頬を驚掴みながら密着の度合いを深めてゆく。

「ほら、左は今しばらく休憩だと言っているだろう？」

「…わ、わかつているから、少し落ち着け！」

「見ているコツチのほうで、イライラしてくるんだから仕方がないだろうッ！」

ほとんど洗面台奥の鏡にルルーシュの背中を押し付けんばかりの勢いで迫ってくるC・Cに、呆れた様子で軽く嘆息したルルーシュは、ごくごくさりげない仕草でチュツとC・Cにキスをした。

「いいから、ちよつと落ち着け。おまえが怒ったからと言って、俺のギアスがどうにかなるわけでもないんだろ？」

冷静に諭されて、しばらくしてC・Cはムツとする余裕を取り戻す。

「……………だからといって、どうしてキスなんだ？」

「ああ？ ああ、まあ物のついでだ」

何のついでだッ！ とC・Cはもちろん激昂したのだが、唇の上にはまだリアルにルルーシュの唇の感触が残っていたので、なんだか迂闊に動かす気にはなれなかった。

なんかこう…ぷにゅってしたぞ。ぷにゅって。

よせばいいのにオノマトペ。なおさら感触がリアルに尾を引いてしまつて、C・Cは意識的に不機嫌な様子で続けた。

「……ああ、ほら、まだ左に力が入っている」

そののどがおかしかったのかは知らないが、たちまちルルーシュが肩を震わせながら笑い始める。

「お、おまえは……」

「バカ、笑うな。目を閉じたらギアスが使えなくなるだろう？」

「おつ、おまえのほうこそつ、い、いつだって、す、好き勝手にッ」

「ヘンな言い方をするな！ たったの2回だろう！ しかもあれは、ただの記憶の更新だ！ キスの範疇には入らない！」

「ふんっ、じゃアこれでおあいこだ」

クスクスと笑んだままの唇が、再びチュツとC・Cの唇に触れてきた。

一瞬だけの接触到過ぎなかったが、なぜだかとっさに目を閉じてしまったのがマズかった。

唇を離してからしばらくして、ひどく恐る恐るの心境で目を開けた時には、ルルーシュはもう笑っていないかった。

視線を注いでいる感じから、目を閉じている最中の顔を見られてしまったことに気付いたが、あんまり真面目に見つめてくるものだから迂闊に動き出せないでいるうちに、フツとルルーシュの瞳の幅が狭まって、わずかに傾けさせた顔を再び寄せてきた。

我慢できる限界までそれを眺めていたC・Cは、唇の上に軽く吐息を感じてしまったところで、思わずギュツと目を瞑ってしまったが。

ガチャ。

すぐ右手側の扉が開けられるのと同時にスザクが部屋に一歩足を踏み入れて、髪の毛一本の距離を残すばかりの二人と目が合った。

「…………邪魔したね」

そのまま数秒経過したところでスザクが無表情にそう言い置いて、入ったばかりの部屋から出て行った。

その背中に、我を取り戻すなりルルーシュが叫んだ。

「……ス、スザクッ！　こっ、これはちがうッ！　ギアスのッ！　！」

「　　おいつ、ルルーシュッ！　！」

「ッほがッ」

だが、首をもぎ取るような勢いでＣ・Ｃに顔を引き戻されてしまったものだから、ルルーシュは首の筋を違えるかと思った。

「乱暴に扱うなッ！　！」

「バカッ、できてる！　できてる！　」

「…………はア？」

満面に笑みを浮かべて言うＣ・Ｃの様子に、ギュギュツと眉間に皺を寄せながら、示されるがままに鏡のほうを振り返った。

「　　おおッ！　」

「なっ！　」

「成功だッ！　」

鏡の中のルルーシュは、両眼ともに平常時の美しいアメジスト色の瞳をしていた。

歓喜のあまり二人で抱き合って喜んでいるのにも気付けない。

そこにまたスザクが、今度は明らかに意識的な無表情でドアを開いた。

「　　ッッ？　！　」

思わず抱き合ったまま固まる二人には構わずに、淡々と用件だけ伝えた。

「Ｃ・Ｃ、忘れてるみたいだけど、ロイドさん待ってるから」

「……あ、あああ、わかった。すまない、先に行ってくれと伝えてくれるか？ 後からすぐに追いかける」

「お安い御用だ。それとね、ルルーシュ、さつきから僕は、きみを待ってたはずんだけどね」

「わわわかった。先に行ってくれ、後からすぐに追いかける」

「後からねエ……」

しみじみ嘆息しながら言い置いてスザクがドアを閉めて去ってゆく。

とりあえず後に残されてしまった二人は、この腕の始末をいったいどうすればいいんだ？ としばらく悩んでしまったが、ややあつてどちらからともなくぎこちなく腕を放した。

「……まあ、なんだ。とりあえずは、おめでとうルルーシュ」

「……いや、まあ、なんだ。……ありがとう」

なんだか目線を合わせられないような感じで、いかにも不自然にたがいに顔を反対の方向に向けながら、先に若干の冷静ぶりを取り戻したC・Cが続けた。

「と、当分の間はその方法でなんとかできるはずだ。じきに右目のほうも力を増してくると思うが、今のうちにその感覚を身体に馴染ませておくことだな」

それにはさすがにルルーシュも真面目に反応した。

「その程度で、制御し続けられるものなのか？」

「人によりけりだが、まアおそらくは」

「ふん？」

言って、鏡を覗き込んだルルーシュは、しばらくそうして意識的にギアスのオンオフを繰り返していたのだが、やにわにニッコリ笑って振り向くと、

「さすがは俺のセンセイだ」

とワケのわからないことを言い、表情だけは嬉しそうに笑った。

「ッだ、だれが誰の先生だっ」

とっさにそう憎まれ口で返しつつも、なぜだかルルーシュの笑顔

を直視できない自分に気付いていた。・は、逃げるようにして
着替えるために奥の部屋に向かった。

「 e n d e 「

TURN 22・025 「午後のひととき」(前書き)

ルルーシュが皇帝時代、つかの間の休息。ほのぼのです。

冬の陽射しが温容に、皇帝専用の休憩室の飾り窓越しに差し込んでいる。

変わりのない多忙に明け暮れている日々ではあるけれど、意識的に精神的な休息を必要としたルルーシュは、軽く吐息しながら窓際のソファに身体を横たえると、持参していたペーパーバックの琴を解いた。

内容は、W・S・モームの短編集だ。

特に愛好しているわけでもなかったが、他愛無い日常に起こった些細な出来事を、いささかシニカルに描いてある単調な文章には、思考するのに疲れた脳細胞を心地好く癒す効果に富んでいた。

それほど込み入った内容でないのを良いことに、頭の片隅では別なことを考えながら文字の羅列を読み流す作業に打ち込むうちに、ふいにルルーシュは、傍らに人の気配のあるのに気付いた。

「何だ？」

薄いガラス窓の向こうから小鳥のさえずりが聞こえる以外は、無音に近いような静かな空間。

ページを繰る音をパリリと響かせながら、ルルーシュが目線も向けずに訊ねると、相手のほうからも、まるきり言葉を惜しんでいるような短い返事だけが返された。

「邪魔だ」

「何が？」

「おまえの足」

言われてルルーシュは素直に自分の姿に目線を落とすと、たしか

に三人掛けのソファをひとりで占領しているのに気付いた。

「別の場所に座ればいいだろう？」

言いながら、それでもあつさり場所を融通してやったのは、下手をすると「おまえがあつちへ行け」と強引に追い出しかねない相手であるのを知っているからだ。

ほとんど無意識に気のない動きで、片方の足だけ床の上に下ろすと、もう片方を邪魔にならない場所まで折り曲げた。

すかさずC・Cは、ルルーシュの立て膝をクッション代わりに酷使できる場所に、ドサリと音を鳴らして腰を下ろしてきた。

それにはルルーシュも、思わずムツと顔を顰めながら苦言を呈した。

「ほこりが立つだろう？ もう少し女らしく振る舞えないのか」
何が可笑しいのか知らないが、C・Cはクスクスと喉を鳴らして笑っている。

「女らしいのが好みか？」

「別に？」

「言っていることが支離滅裂だな」

「ああ、見てのとおり読書中だからな」

結局そのまま、その場所に落ち着いてしまったC・Cは、興味深げにルルーシュの手元を覗き込みながら訊ねた。

「何を読んでる？」

ルルーシュは、やっぱり視線も返さない。

「見ればわかるだろう？」

「私の本を勝手に読んでる奴が、えらそうに言うな」

「正確には、ジェレミアの本棚から勝手に拝借してきた本だがな。いつからおまえの本になったんだ？」

「前にあの男が、好きに読んでいいと言ったんだ。退屈な本ばかりだな」

「難しい本が好みなら、ロイドもあれで結構な読書家だぞ？」

「ああ、ジャンルが多岐にわたり過ぎていて、一体どういう了見で

集めているのか逆に疑問に思ったが。アレはなかなか面白かった」

「フン、暇人め。とうの昔に攻略済みか」

「おまえの命令で、仕方なく暇人に甘んじてやっているんだ。ところで、どこまで読み進んだ？」

「今、主役の男が、ある芸術家の屋敷に訪ねて行っている最中だ」

「ああ、あの話か。オチがなかなか、おまえみたいで笑ったぞ？」

「言うな、馬鹿。読んでいる最中だ」

「だったら、早く読め。それより、ルルーシュ？ 忘れないうちにスザクから伝言だ。ジェレミアの到着が予定より遅れるから、自分達は先に試運転のほうを片付けたいのだそうだ」

「知ってる。さっき通りすがりにロイドを見かけた」

「何だそれは？ スキップでもしていたか？」

「セシルと一緒に、いつもより三割増し歩くスピードが速かったかな。奴らの言動に慣れていれば、誰でも容易に想像がつけられる」
そっけなく言うなり、ルルーシュは唐突にボタンと音を鳴らして本を閉ざしてしまった。

そして、眉間に皺を刻みながら言ったものだ。

「俺は、こんなに間抜けな男ではない」

「そうか？ 案外そのままだと思うがな」

そのとき初めてC・Cの格好に気付いたルルーシュは、そのまましばらく呆気にとられた様子で口を閉ざした。

C・Cは、そんなルルーシュを横目に流し見ながら、耳の上を飾った小さな羽根飾りを思わせぶりに指で弾いた。

「どうだ？ なかなか似合うだろう？」

ルルーシュは愕然と、眉間の皺を量産しながら叫んだ。

「どうして、そんなに大きく胸元が開いているんだ？」

つい一時間ほど前まで、いつもの拘束衣姿でゴロゴロ退屈を持て余していたC・Cは、ルルーシュの執務室を訪ねて来た女官たち

に連れられて、しばらく姿を消していた。

時期的なことを考えても、おそらく作らせておいたドレスが完成したのだろうと予想して、忙しさにかまけているうちに、今まですっかり忘れていたのだが。

たしか俺の考えたデザインでは　と怪訝そうに呟く様子に、Ｃ・

Ｃ・は初めて気付いたような仕草で、自分の胸元に視線を落した。

「ああ、これか。おそらく誰かの命令で、女官たちが気を利かせたのだろうさ。対面上、私は独り身の皇帝を慰める立場にあるからな」とつさに意味の理解できなかったルルーシュは、怪訝そうに眉間に皺を刻んだ。

「だからと言って、どうしてそんな部分の布を節約する必要があるんだ？」

「さあな、私はむしろ、おまえの反応を問い質したい気分だが？」

さすがの私も、返答次第では容赦しないが？　とソファに腰を下ろしたまま、両手を腰に大威張りで胸を張るＣ・Ｃ・の姿に、ルルーシュはさんざん思案した後で感想をポツリと口にした。

「まア、馬子にも衣装だな。もつとも、俺のデザインなら……って、いてッ」

「せっかく一番に見せに来てやったのに、言うに事欠いてそれが！」

「人の頭を殴るな！」

と、ほとんど条件反射で返したまでは良かったが、ルルーシュはふいに眉をひそめながら訊ねた。

「……ひよつとして、他にも誰か見せて回るつもりか？」

「いけないか？」

きょとんと目を瞪る女の様子に、ルルーシュは思い切り慚然と顔を顰めた。

仮にも自分の口で、「独り身の皇帝を慰める立場」を認めておきながら、ソレ用にデザインされたドレスを嬉しげに見せて回る女の心理が理解できない。

が、その気持ちを無難に言い表す言葉が見つからなくて。内心で

舌打ちしながら視線を逸らすと、ふとＣ・Ｃの肩口が血で汚れているのに気付いた。

「おいまさか、その格好で喧嘩でもしてきたのか？」

「はア？」

驚きながら、示された場所に視線を落としたＣ・Ｃは、すぐにも思い出した様子で吹き出した。

「バカ、違う。おまえが勝手に執務室から姿を消しているから、仕方なくこっちに向かっていている最中に、木の上からアーサーが降ってきたんだ」

「アーサーが？」

「そうとも。飾りの部分が、どうやら気に入りの様子でな。ときどきスザクも同じように襲われているぞ？」

ルルーシュは内心で、『スザクには嚴重抗議だな』と呟きながら、純白の皇帝服のポケットから取り出したハンカチを軽く唾液で湿らせて、既に止血して乾いてしまっている肩口の血を拭い落とした。

おそらく肩の上で一度着地して、驚いたＣ・Ｃの動きに合わせて傷の面積が広がってしまったのだろう。小枝で引っかいたような傷跡は、薄く滲んでいた血痕さえ綺麗に拭い去ってしまえば、後には毛筋の傷跡すらも残っていなかった。

ただでさえ傷の回復スピードが常人離れている彼女のことだ。これしきの傷など本人にはなんともない様子だったが、なんとなく以前の不手際を思い出してしまったルルーシュは、Ｃ・Ｃの左手をそつと掴むと、しばらく何も言わずに記憶の場所を観察した。

「……何の真似だ？」

ややあつて訊ねたのは、Ｃ・Ｃが無言でルルーシュの頭をヨシヨシと撫でてきたからだ。

「おまえが、らしくない真似をするからだ。それとも、こっちのほうが良かったか？」

言うなり、強引にルルーシュの首の後ろに手を回して、胸元まで抱き寄せてしまったＣ・Ｃは、まるきり子供にするようにルルー

シュの頭を腕の中に抱きしめた。

もちろん子供ではないのだから、一連の行為自体に不満のあったルルーシュは、「保護者ヅラをするな」とまたいつものように反論しようとしたのだが、デコルテの部分が大きく露出しているドレスの胸元に鼻先を押し付けられている格好では、何を言ってもサマにならないことに思い至り、そのまま無言でＣ・Ｃの身体を押し離した。

「ん？」

しかしその際、目線の位置の加減で、乳房と脇の下の境目にポツリと薄い影のようなものを見つけたルルーシュは、『アーサーは、一体どれだけ暴れたんだ？』と思わず目を凝らしたが、それは傷ではなくホクロが完成する寸前で時間を止めてしまった、ごくごく小さなシミだった。

ルルーシュの様子でそれを察したＣ・Ｃは、自分もその位置を覗き込みながら、苦笑混じりに心配性の男をからかう。

「何だ、ホクロが珍しいのか？」

「別に？ ……単に、初めて見つけたので感心しただけだ」

「感心？ ならついでに、背中ホクロも見せてやるのか？」

「要らん！」

というよりも、「どうしてそんな場所にあるホクロを、自分で知っているんだ？」と、疑問に感じたままを問い返すと、クスクス笑い出してしまっているＣ・Ｃは、

「どこにもホクロが見当たらないといって、以前マリアンヌに押し倒された経験があるだけだ。息子のおまえなら、特別に許可してやるからありがたく思え」

言うなり、さっさとうなじの部分で長い髪をかき上げながら、既にルルーシュに背中を向けてしまっている。

どうして俺が　と内心では愚痴を呟きながらも、その昔、母親が見つけたのだというホクロの位置には、逆らいがたいような魅力を感じた。

仕方なく、そっけない手付きでＣ・Ｃの背中に手を伸ばしたルルーシュは、『捜す』という名目に従って、遠慮なく背中のファスナーを１０センチほど引き下ろした。

しかし、見える範囲に目当てのものが見付からないものだから、そのうち意地も手伝って同じ行為を三度ばかり繰り返して、ようやく腰骨に近い背骨の部分に微小なホクロのようなものを見つけた。

「……ああ、これが」

見つけた安堵にホツとしながら思わず呟いてしまったが、それ以外には、本当にシミひとつ見当たらない雪原のような肌だった。

「どんなホクロだ？」

「別に？　普通に小さなホクロがポツンとあるだけだ」

むしろ、こんなものをよく見つけられたな？　と感心しながら呟くと、ルルーシュが背中中のファスナーを元の位置まで戻すのに合わせて、さりげなく服の乱れを直したＣ・Ｃは、

「あのときは私も、本気で貞操の危機を心配したぞ？」

と思い出した記憶にクスクスと喉を鳴らしながら笑った。

一体、どういう付き合い方をしていたんだ？　とルルーシュは疑問に思ったが、それを問いたですより先に、思わぬところから邪魔が入ったので驚いた。

「むしろ僕はキミたちの反応に、呆れて声も出ない気分なんだけどね？」

「スザクツ?!」

「何だ、いつから居た？」

別に見られて困る真似など一切していないと知りつつも、条件反射で焦るルルーシュとは対照的に、平然と訊ねるＣ・Ｃに向かって、ほとんど扉の影に姿を隠していたスザクも平然と姿を現しながら答える。

「えっと、『馬子にも衣装だな』って、ルルーシュが答えて殴られたところから？」

「……おまつ」

だったら、その段階で声を掛けろッ！ と憤るルルーシュを軽く無視して、スザクは続けた。

「というよりも、『背中ホクロも見せてやろうか？』ってものすごい直球な誘い方だと思うんだけどね、僕は。ルルーシュって、あそこでフアスナーを上げられちゃう人なんだ？ てつきり出歯亀になる覚悟をしたのに、心配して損したよ」

「……………はア？」

何を言っているのか理解できないルルーシュの隣りで、C・C・がクスリと愉しげに微笑んだ。

「コイツにそんな甲斐性があるものか」

「おい、何の話だ？」

「ハイハイ、邪魔者は退散しますよ」

結局、部屋の中には半歩だけ踏み込んだ形のスザクは、言うなり本気で扉を閉ざしてしまった。

しかし、きっかり一秒後に扉を開けたスザクは、

「たびたび変更して悪いけど、午後から予定していた会議は、明朝早くまで延期したからね、よろしく」

と、今度はわざとらしく扉の影から用件だけを伝えてきた。

要するに、自分の与り知らないところで、残りの仕事の一切が明朝まで延期になってしまったわけだから、ルルーシュも、さすがに焦った。

「しかし、それでは後の予定が！」

「だったら、鶴の一声でロイドさんを止めてくれる？ セシルさんも一緒になって、目の色を変えてしまってるけどね」

「……………ッ」

思わず齒噛みするルルーシュの隣りで、やはりC・C・は呑気にクスクスと笑った。

「いいから、連中がおまえを連れ戻しに来る前に、持ち場に戻れ。そのために、こっちには私が派遣されているんだ」

「うん、わかった。　そうそう、C・C・？」

新しいドレス、よく似合ってるね。綺麗だよ。と齒の浮くようなセリフを残して、スザクは急ぎ足で持ち場に戻った。

ひとり取り残された形のルルーシュは、返す刀で横目にＣ・Ｃを睨んだ。

「派遣？」

しかし、そんなルルーシュには慣れているＣ・Ｃは、構わず鷹揚に足を組んでルルーシュと向かい合うと、クスクスと妙に色っぽい表情で含み笑った。

「連中なりに、おまえの身体を心配しているのさ。私が言うのも何だが、最近のおまえは働きすぎだ」

「だからといって、どうしておまえが俺のところに派遣されて来るんだ？」

淡々と脅しつけるようにして訊ねると、Ｃ・Ｃはクスリと鼻を鳴らしながら、思わせぶりにうなじの髪をかき上げた。

「たとえば今のタイミングで、私が全裸でおまえを訪ねて来たらどうした？」

露骨に言われて苦虫を噛み潰したルルーシュは、ようやく話の道筋が見えた様子で傲慢に鼻を鳴らした。

「何だ、そういう話か」

ヘソで茶を沸かすといった態度で言うなり、そっけなく背中を向けてしまったルルーシュは、そのままゴロリと怠惰に寝転んだ。

Ｃ・Ｃが訪れる直前と、ちょうど上下の位置を入れ替えた形だが、唯一違うのはＣ・Ｃの膝を強制的に枕にしていることだ。

Ｃ・Ｃは若干驚きの表情を浮かべながら、しばらくルルーシュの表情を覗いたが、何食わぬ顔つきで既に読書を始めている男の姿を眺めるうちに、納得するものがあつたのだろう。

「おまえは本当に、負けるのが嫌いだなア」

クスクスと呆れ半分で苦笑を洩らす女の反応に、ルルーシュは気にした様子もなく平然と受けて流した。

「要するに、今のおまえは貢ぎ物なんだろう？ だったら、一日く

「はいは文句を言わずに働け」

「フン、そして明日の朝には、せいぜい気だるげにアクビの一つも洩らしながら過ごしていればいいのか？」

「演技の必要があるのか？ どうせ毎朝見慣れた光景だろう」

「まったく…。実際は、この程度の関係とも知らずになア、よくよく連中も余計な気を回せるものだ」

客観的には、たしかに文句なく女らしさを強調してあるドレスの胸元を眺めながら、しみじみ呆れた口調で言うC・Cを、ルルーシュはふいに視線を上げると何も言わずにじっと見つめて。

窓から差し込む太陽光線に、^{アメジスト}紫水晶色の瞳を思わせぶりに光らせながら、人の悪い表情で微笑んだ。

「本になア、実際は、この程度^{、、、}の関係とは誰も知らずに」

先に自分が言ったセリフとは微妙に違うニュアンスで重ねて言われて、とつさに言葉の意味を図りかねたC・Cは、思わずしみじみルルーシュの顔を覗き込んでしまったが。

その頃には、やっぱり何食わぬ顔つきで既に読書を始めている男の姿を眺めるうちに、なぜだか知らず笑えてしまった。

ルルーシュの顔の輪郭に被さる黒髪に、さりげなく指の先を絡ませながら訊ねた。

「ところで、どの話まで読み進んだ？」

ルルーシュは答える。淡々と。

「今ちようど主人公の男が、旅先のスペインで医者を」

「あ、駄目だ、言うな！ 私はまだそこまで読んでない！」

「おまえ、異様に読むのが遅くないか？」

「当然だろう？ 一晚に読むのは一話だけだと決めているんだ」

「ふうん？」

気のない返事を寄越したルルーシュは、それから4、5分ほどで残り全部を読んでしまうと、ボタンと閉じた本を手渡しながら、「しばらく寝る」とアクビ混じりに呟いた。

C・Cも、さすがに呆気にとられながら男の顔を覗き込んだが、

その頃には、とつくにルルーシュは寢息を立てていた。

なんとなく手慰みにルルーシュのひたいに被さる髪を掻き分けていたC・Cは、一瞬眠りの邪魔になるかと躊躇してしまったが、ほとんどルルーシュのトレードマークでもある眉間の皺が確認されなかったため、そのままペタペタと満足するまでルルーシュの顔の輪郭を触って愉しんで。

仕方なく、ルルーシュが目覚めるまでの時間潰しに、本の続きを読み始めた。

「 e n d e 」

TURN 22・025 「午後のひととき」(後書き)

この二人はあくまで「共犯者」です。

当人たちにはその自覚が無いのに、傍から見てみると眼のやり場に困ってしまう二人が好き。

ありがとうございます！

TURN 24・125 「魔女の願い」(前書き)

魔女の願いを叶えてくれるのは、ルルーシュではなくスザクです。

「おい、ルルーシュ？ 枢木スザクを知らないか？」

そう言いながら、おもむろに皇帝専用の執務室のドアを開けて入ってきたC・Cは、ルルーシュのことをロクに眺めもしないで、部屋の中をキョロキョロ眺め渡した。

ルルーシュは、自分でも判然としない理由で、とつさに慚然としながら返した。

「さアな、俺はアイツの見張り役ではない。それより、おまえがアイツに何の用なんだ？」

C・Cは、ほとんど上の空の様子で「ん？」と小首を傾げると、結局そのまま踵を返してしまった。

「いや、別に大した用件ではないんだが……」

言葉半ばでボタンと閉ざされてしまった扉を、ルルーシュは何ともいえない心境で、しばらく無言で睨んだ。

「……大した用件でも無いのに、おまえがアイツを捜すのか？」

どうでもいいけどな。

内心で呟きつつも、思わず眉間に皺を寄せてしまう自分が不快だ。ルルーシュは、意識的に溜息をかみ殺すと、慚然とした表情のまま手元の書類に視線の先を戻した。

その、およそ三時間後。

C・Cが、またおもむろにルルーシュのところに訪ねて来た。

「なア、ルルーシュ？ 枢木スザクを見なかったか？」

さつきと微妙に訊ね方が変わっているだろう？

とつさにそれを思うルルーシュは、C・Cの発言を逐一覚えて
いる自分に気付いて、条件反射で顔を顰めた。

「さつきも言ったと思うが、俺は」

「そうか」

「おい、C・C・！」

ルルーシュが言い終えるより先に、閉ざされてしまったドアを眺
めながら、慌ててそう呼び止めてしまったが、しばらく待っても、
閉じたドアは一向に開かれる気配もなかった。

「……まったく、いったい何の用なんだ？」

憤然と苛立ちながら舌打ちして、そんな自分の反応に、またルル
ーシュは不快指数を募らせる。

それから、ふたたび三時間後。

「ルルーシュ？ 枢木ス」

「知らんツー！」

今度はルルーシュが、C・Cの言葉を遮るように声を荒げると、
C・Cは驚いている表情で大きな瞳をパチクリと見開いた。

「なんだ、何をそんなに怒っている？」

「怒る？ フン、おまえの目は節穴か？ 俺は、至って普段どおり
に冷静沈着だ。おかげで、仕事がかどって」

「そうか？ さつき通りすがりに文官たちが、『今日の陛下は一段
と人相が悪い』とぼやいていたぞ？」

「しつこいぞ！ そんなに俺を怒らせたのか？」

「どうしたんだい、ルルーシュ？ そんなに怖い顔をして怒って」
そのときC・Cの背後から、ひよっこり顔を覗かした枢木スザクが、不思議そうな表情で小首を傾げた。

ワケもわからず、一方的にルルーシュに怒鳴り散らされてしまったC・Cは、露骨に迷惑そうな顔付きで眉間に皺を刻んだが、待ち人の出現に、あっさり興味の矛先をスザクに移した。

「お、スザク、ちょうど良いところに帰ってきたな」

「フツ、帰ってきた早々大変だな。この女に厄介事を押し付けられて」

「何を言う？ 私は別に」

「別に？ 大した用件でも無いのに、本気で6時間以上もスザクの帰りを待っていたのか？」

「まアまア、二人とも。ルルーシュの言い方だと、大した用件でも無いがぎり、C・Cが僕の帰りを待ってちゃいけないみたいだけど。なんだい、C・C？ 僕に頼みごとって」

「おい、あんまりこの女を甘やかすな」

「ん、きみがそれを言っちゃう？」

「どういう意味だ？」

「そうとも。私はルルーシュに、ただの一度も甘やかされた経験など無いぞ？」

「真顔で否定するな。冗談に聞こえなくなる」

「誰が冗談を言っている？」

「まアまア、だから二人とも」

埒が明かないアと困惑顔で続けたスザクは、ふいに何かを思い付いた表情でルルーシュの前に立ちはだかると、ニコツと気持ちの良い笑顔で微笑んだ C・Cに向かつて。

「今後は一切、僕の背後霊が何を言っても気にしなくていいからね？」

「誰が誰の背後霊だッ！」

「背後霊みたいなものじゃないか。今の僕達が、毎日忙しくしているのは何のため？」

「……そ、それは……」

婉曲にゼロ・レクイエムの一件を匂わされ、思わず二の句を失ってしまふルルーシュの様子を眺めながら、Ｃ・Ｃは一言冷静に「シニールだな」と呟いた。

「安心しろ？ おまえが大事を果たした後の面倒は、私が仕方なく引き受けてやる。何しろ私は、ルルーシュの『盾』だからな」

「そうだよ、Ｃ・Ｃ、きみはルルーシュの共犯者。僕は彼の剣だ。彼の敵も弱さも、僕が排除する。だからＣ・Ｃ、守るのはきみの役目だ」

「共犯者……か」

「不満かい？」

「私とルルーシュは……いや、少し不安だな」

「どういう意味だ？」

そのときルルーシュが、とっさにスザクの背後から顔を覗かせようとしたのだが、スザクは素早く自分の身体でそれを遮ってしまう。「幻聴だよ、気にしないで」

その間にも、ムキになつて顔を覗かせようとしているルルーシュの動きを、俊敏な動きでスザクが難なく阻止していた。

Ｃ・Ｃは、憂いを含んだ表情でフツと物悲しげに微笑んだ。

「どうせなら、私に全ての悪を押し付けて、本物の魔女に仕上げてくれれば良いものを……。そうすれば私も」

「そんな真似が出来るかッ！」

「そうだよ、Ｃ・Ｃ。きみが、ルルーシュの共犯者なんだ。僕は、彼の剣以外の何者にもなれない。きみが、ルルーシュを守るんだ」

「フツ……共犯者、か……。フツ、……。フフツ」

「いったい何なんだ？ その微妙に嫌そうなニュアンスは？」

「ああ、いけない。また幻聴が」

「疲れているんだよ、Ｃ・Ｃ。もっと気を楽しにして掛からなきゃ、

なにしろ先は長いんだから」

「フフッ……おまえはゼロの仮面で、この先一生世界の平和を引き受ける。その代わりに私は、この先一生ルルーシュと……くッ！」
「大丈夫だよ！ 愚痴ならいつだって聞いて上げられるから！ そのためのゼロの仮面なんだし！」

「何の話だッ……！」

ようやく二人して、ゼロ・レクイエム後のルルーシュの面倒を押し付けあっている事実気付いたルルーシュが声を荒げると、Ｃ・とスザクは、まるきり申し合わせたように声を揃えてハアと深く吐息した。

「これが、私たちの選んだ……」

「ゼロ・レクイエム」

「私とおまえは……」

「似てなんかいないよ。たとえ愚かだと言われても、立ち止まることは出来ない」

「そうだな、スザク」

「……おまえたち……、いい加減にしろ」

今にも怒髪天をつきそうになる雰囲気で、一気に加速している怒りのオーラを背中越しに感じたスザクは、ニツコリ気持ちの良い笑顔で微笑みながら訊ねた。

「で、何？ 僕に折り入ったの用件って」

「ああ、実はコレなんだがな」

「ツな……ッ……！」

思わずルルーシュが絶句してしまうのも道理で、Ｃ・Ｃ・がおもむろにポケットから取り出したのは、瓶詰めのパクリスだった。

「どうやら蓋が噛んでる様子でな、私の力では埒が明かないんだ」
「お安い御用だ。貸してみて？」

「ちよつと、待て」

今にも二人の間で授受されようとしていたピクルスの瓶を、ルルーシュが強引に奪い取るようにして掴んでいた。

「なんだ？」

「どうしたんだい、ルルーシュ？」

ルルーシュを間に置く形で、左右から同時に怪訝そうに問いを投げかけられ、ある意味ではおまえたち、充分すぎるほどに似ているだろう？ とルルーシュは眉間に皺を刻みながら、怒りに肩を震わせた。

「……こんなモノのために、おまえは本気で6時間以上も俺を煩わせ続けていたのか？」

「こんなモノとは何だ！」

「そうだよ、ルルーシュ！ あのセシルさんが、唯一まともなレシピで漬けてくれたピクルスだよッ！！」

「そうだとも！ それでも、なぜだか『らっきょう』の味がするけどな！」

「でも、それもイイ！」

「……おまえらっ……いいから、少し黙っているッ」

ルルーシュは、小刻みに肩を上下させながら、おもむろにピクルスの瓶と格闘を始めた。

「ふん…ッ！」

が、そのまま一分経過したところで、小脇に汗のシミを浮かべながら、極めて冷静に微笑んだ。

「焦るな。こういう場合には、瓶ごと少々熱湯に漬け込んで、膨張する中身の空気圧の変化を利用して」

「ガスの無駄だよ。いいから貸して？」

「おい、スザクッ！」

「はい、どうぞ」

「おお、さすがだな！ 6時間待った甲斐があったぞ」

「……………」

「お安いご用さ。じゃア、僕は急いでいるんで、これで」

「邪魔したな」

「気にしないで、僕はルルーシュの剣だから」

涼しげに去ってゆくスザクの背中を見送りながら、ややあつてルルーシュは、さっそく隣りでポリポリとピクルスを齧り始めている共犯者に訊ねた。

「……………恨んでいるのか？」

「うん？」

「だから、その……………おまえを引き止めてしまった件だ」

その間にも隣りからは、ピクルス独特の甘酸っぱい匂いが漂ってきていて、ルルーシュは、色んな意味で眉間に濃い皺を寄せていた。C・Cは、三つほどピクルスを完食するまで沈黙を守り続けていたのだが。

「おい、ルルーシュ」

「ん？……………んんうツ?!」

おもむろに唇の間にピクルスを4、5本差し込まれ、ルルーシュは目を白黒させながら、C・Cの顔を凝視した。

C・Cは、わずかにフツと表情を緩めながら苦笑して、

「私の今の気持ちさ」

そう言いながら、寛容な態度で踵を返すと、ゆっくりその場から歩み去る。

満足そうに、ポリポリとピクルスを齧る音を響かせながら。

「……………『私の今の気持ち』……………?」

ルルーシュは、眉間に更なる皺を刻み込みながら、深まる疑問に首を傾げた。

仕方なく、口の中のピクルスを咀嚼しながら。

やがて嚥下してから気付いたが、それは本当に『らっきょう』の味がしていた。

「 e n d e 」

TURN 24・125 「魔女の願い」(後書き)

ルルタニア時代が好きです。

どこまでいったも「共犯者」のクセして、C・Cには独占欲を感じてしまうルルーシュ。

そういうお話が大好きです。

ありがとうございました！

「……ギアスという名の王の力は、人を孤独にする。……ふふつ、少しだけ違っていたか。 なア、ルルーシュ？」

空は快晴。平和な田園風景に、藁を積んだ荷馬車がカタコトと穏やかな振動を響かせながら進んでいる。

整備もされていない農道で、車輪が時折小さな石を踏み潰しては、荷台に仰向きで横たわるC・Cの身体を不規則に揺らしている。すがしい空気を肺の中一杯に吸い込むと、なにやら数ヶ月前までの激動を遠い夢物語のように誤解してしまいそうだ。

C・Cは胸元をフリルで飾った白いブラウスに落ちた藁を指の先で摘んだり、珍しく束にして編んでいる髪の毛の先を弄んだりしながら時間を潰していたのだが、しばらくしてゴロリと腹這いに寝返りを打つと、さらなる独り言を続けた。

「なんだ、まだ怒っているのか？ 執念深い男だな」

言いながら、出立の際にアヴァロンから持ち出したチーズくんの人形の腹の上に顎の先を押し付けた。

ついでに膝を曲げて、子供のするように両の足先をブラブラとリズムカルに揺らし始める。

ずいぶんと久方ぶりに少女趣味的なスカートを穿いているものだから、そんなことをすれば背後からスカートの中身が丸見えだったが、空を行く小鳥ぐらいしか見ている者はいなかった。

C・Cは、鼻歌さえ内心では交えながら、不思議な独白をさらに続けた。

「契約は守るものだと言ったろう？ ましてや、約束ともなれば尚更だ。おまえがそれを行使しようとしなから、私のほうから履行

を見届ける努力をしたまでだ。そもそも、こんなことは言いたくないのだが、おまえは私と交わした契約のことごとくを反故にしないじゃないか。最初に私の願いをひとつ叶えろと言って契約を交わしたはずなのに、いざとなったら私が殺せと言っても躊躇った。おまえが魔女なら俺が魔王になる、だからひとりじゃないと言ったくせに、言った直後に記憶を失って丸一年も私を放逐した。今度は約束まで持ち出してきたくせに……私が責められる謂れはないと思うんだがな？」

ゆるやかに前方から吹き付けてくる風が、やさしくＣ・Ｃの睫毛の先を揺らしている。

ほのかに微笑みながらゆっくりと過ぎてゆく景色を眺めていたのだが、にわかに小首を傾げると怪訝そうに問いかけた。

「はア？ だからと言って、それを『騙っていた』範疇に入れるのか？ おまえが正しく理解していなかっただけじゃないか。私はひとつも騙してなんかない。責任を私に押し付けるな」

最後は突き放すように言い切って、チーズくんを抱えたまま寝返りを打つと、また仰向きに空を眺めた。

目に優しい深さの青空に、絵画に描かれるのに良いアクセントになるような淡い雲が浮かんでいる。

中天に差し掛かっている太陽が、すこし眩しくＣ・Ｃの顔を照らしている。

それが心地好いわけでもないだろうに、今度はいささか唐突にクスクスと笑い始めた。

「相変わらずだなア、おまえは……。いい加減あきらめろ。言っておくがな、私だって完全に最初から結果を見通していたわけではないんだからな」

「そうなのか？」

それまで思考で会話をしていたクセに、思わず声に出して訊いてしまったルルーシュは、それに気付いて露骨にチツと舌を鳴らした。それで本格的に笑い出してしまったＣ・Ｃは、身体を起こすと

動いている馬車の荷台から飛び降りた。

とは言っても、地上にはない。馭者席に腰を下ろしたルルーシユの隣りにだ。

いくらC・Cの体重が軽いとは言え、突然の振動に先導する二頭立ての馬が驚いたようにヒヒンと嘶いた。いみな

ルルーシユは完全に黙殺の態度を変えることなく、目線を馬の背から少しも動かさない。

C・Cは、それでもふふつと軽く微笑んで、ほどよく距離を離れた位置に腰を下ろすと、ブラブラ足を揺らしながら話を続けた。

「ああ。だから大変だったんだからな」

『ゼロレクイエム』と称して、枢木スザク扮するゼロに自分を殺させるお膳立てをしていたルルーシユは、計画通りに一度は完全に死んでしまったのだ。

その死と引き換えに、世界を震撼させていた悪逆王の压制は終わりを迎えた。

本来ならば国を挙げて丁重に祭られる立場にあるはずだったが、皇帝の死を悼む者など存在しなかった。

それどころか、もろ手を挙げてその死を喜ぶ者が大半だったから、迂闊に目立った場所に埋葬してしまえば、これ幸いとばかりに、彼に恨みを持つ国民たちに遺体を損壊されてしまう可能性も考えられた。

だから今はゼロである枢木スザクと、その側近のシュナイゼルとの取り決めで、ブリタニア本土のとある教会の地下霊廟に目印になる墓標は立てないで安置された。

それでも、どこから情報が漏れてしまったのだろう。やがてC・Cがその場所を訪れたときには、もう既に石造りの質素な棺には、かなりの暴行を加えられていた。

所狭しと書き殴られている罵詈雑言。石櫃の至る所に削り取られ

たような後が残されているのは、その遺体がブリタニア人であることを示すために彫られた国章をこそぎ落とされてしまっているせいだった。石櫃の至るところが原型を留めないほどに崩されてしまっていて、明らかに誰かがそれをこじ開けようとした痕跡を留めていた。

ただ死んだだけでは気の済まなかった連中が、腹いせに死者に鞭打つ暴挙に及んだものだろう。

それを予測していたC・Cだったから、せめて自分の手で静かな場所に埋葬し直してやるつもりで、夜陰に乗じてその地下霊廟を訪れたのだ。

やり方はたしかに不味かったかも知れない。けれども、ルルーシユの真意を知る数少ない理解者の一人としては、やはりその光景には胸が潰れるような痛みを覚えた。

中途半端な抑圧ではそれを苦痛に感じない人間もいるはずだから、ルルーシユはあえて思い切った断行に踏み切ることで、人に戦うことの愚かさを思い知らせたのだ。

最初から恨まれることを前提に行動していたわけだから、ルルーシユは、こうなることすら予測していたのかも知れないと思いがながら、陵辱の限りをし尽くされている石櫃を悲しい思いで眺めていた。

おまえは本当に、こんな最後で本望だったのか？

そう問いかけていたときだった。

「私だって自分の耳を疑ったさ。V・V・やマリアンヌが逝って以来、久しぶりのことだったからな」

石櫃の中からごくわずかな思考の波長を感じて、慌てて頑丈に固定されていた石蓋を破壊した。

最初からそのつもりで訪れていたわけだから、工具なら充分に揃っていた。

思っていたよりも棺を囲った石はぶ厚く、その内部にはナイトメ

アの装甲にも使われる特殊な合金が箱状に遺体を包み隠していた。

どうりで監視も付けずに放置していられたわけだ。底の部分も床に埋め込む形でがっちり厳重に固定してあった。これを外に持ち出そうと思ったら、それこそ教会ごと破壊しなければ迂闊に手は出せないだろう。

おかげでＣ・Ｃはさんざん苦心して、それでもどうにかこじ開けた棺の内部に、血の気は失せているものの、息を吹き返しかけているルルーシュと対面したのだ。

構造上気密性は完璧だったから、おそらく最初に残っていた酸素も数時間で消費してしまったに違いない。

それでも不死の身体の特徴で、死んだら嫌でも身体が勝手に甦り始めてしまうから、ひよっとするともう何度もルルーシュは生と死を循環していたのかもしれない。

なにしろＣ・Ｃが訪れた時には、遺体が安置されてから１週間以上が経過していたのだ。

監視の目が緩む機会を待つ必要があったから、どうしてもそれだけの期間を要した。

その期間も死んだはずのルルーシュが地獄を味わわされ続けているのかと思えば一瞬で手足が冷たくなるほどにゾツとしてしまったが、悠長にシヨックを受けている場合ではなかった。

軽く仮死状態に陥っていたルルーシュの身体を抱えて、Ｃ・Ｃは用意していた手段で無事に連れ出すことが叶った。

「あの後おまえは烈火のごとく怒ったがな、私だって、まさかシャルルのコードに細工がされているとは思わなかったのだから仕方がないだろう？ おまえがギアスを失わなかった時点で、つきりコードの継承は行われなかったのだと予測していたんだ。おまえのほうこそ何の自覚もなかったのか？」

問うてはみるが、ルルーシュが答えないことは知っていたので、Ｃ・Ｃは構わず先を続けた。

「少なくとも私は、おまえにまた会えてうれしいと思っているぞ。」

ルルーシュ」

それでもルルーシュは視線も向けずに憤然と憤り続けている。
どうやら生き返った本人は心底それがうれしくないらしい。

おまえには、生きるための理由があるらしい。

それをルルーシュに訊ねた時の、燃えるような生に対する希求を
C・C・はまた如実に覚えている。

だから、こいつなら生爪を剥がして岩に齧り付いてでも絶対に寿命が尽きるまで生きることをあきらめはしないと思っていた。

そのルルーシュが、自らの意思で命を絶とうと決意を固めたのが
C・C・には意外だったのだ。

いくらでも死を回避する方法は考えられたはずなのに、ルルーシュは最初からその選択肢を捨てていた。

自分の行動の起点となった憎しみが、結局何の結果すらもたらし
ていないことに気付いて、だったらまずそれを世界から駆逐しようと行動を起こした。

憎しみの対象にシュナイゼルやダモクレスを利用しなかったのは、
本来自己完結型のルルーシュらしいといえばその通りだが。

いずれにせよ、ルルーシュが生きるために必要だった反逆の終結
は、ルルーシュが死ぬことを前提に計画された『ゼロレクイエム』
で結実したのだ。

それなのに。

「おまえのことだ。こうなることがわかっていたなら、スザクにゼ
口として生きる人生を押し付ける必要はなかったと悔いているのだ
ろうが、止めておけ。もうおまえが世話を焼かないでも、人類は好
きなように生きていくだけさ。それよりせつかく生きる機会を与え
られたんだ。ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアができなかった生き方

を、今のおまえが満喫すればいいじゃないか」

意識的に軽い調子で言っではいるが、そのかたわらでは最悪だなと考えている。

ルルーシュの感知しないところで、呪いをかけたシャルルのやり方を。

『神を殺して、嘘のない世界を作る』という大願成就を邪魔されてしまったものだから、ルルーシュには気付かせずにこっそりコードを継承させていた。

ルルーシュが死んだときに初めてその効力が発露するように細工を施して。

何をどうやったのかC・C.にも察することは出来ないが、自分の能力の開発には元のコード保持者であったV・V.も熱心に時間を費やしていたから、シャルルもそれと同じことをしたのだろう。

人の記憶や意識を操ることはギアス能力者であった時代からシャルルの得意技ではあった。

シャルルに呪いを授けられたその直後に死んでしまったから、18の少年の身体のまま時を止めてしまったが、万が一ルルーシュが天寿を全うする道を選んでいたら、老いさらばえた身体で永遠の時を長らえなければいけなかったわけだ。

おかげで、一度は幕を引いたはずの人生からまんまと呼び戻されてしまったルルーシュは、いまさらどうにもならない怒りを抱えて黙然と黙り込んでしまっている。

かれこれ生き返ってから3日ほどが経過しているのだが、その間ずっとこの調子だ。

だが、C・C.にその怒りをぶつけているのはただの八つ当たりだった。

生前の習慣からそれを継続させているだけだ。

だからC・C.も口では文句を言いながらも、ルルーシュの気持ちが悪くまで付き合うつもりでいたのだが、ただ黙って眺めているような真似はしなかった。

「　　そういえば、つい先日ゼロが暴漢に襲われたぞ」

極力なにげないふうを装って話題を変えると、さすがにルルーシュはそれには機敏な反応を示した。

とは言っても、手綱を引く手に若干力が籠もっただけだった。

Ｃ・Ｃは横目にそれを確認しながら続けた。

「もちろん、あいつのことだ、無事だったがな。しかし、ゼロに家族を殺された連中にとっては、あくまで仇はゼロだったというわけさ。それでも、さすがに人類は戦うことにうんざりしているからなしばらくの間はおとなしくしているだろうが……さて、持っでどのくらいかな？　１０年？　いや、直接的な被害の少なかった地域なら、３年もすればおまえのことなんかすっかり忘れてしまう。当たり前のように続く平和に慣れて、そのうち退屈し始める。世界の活性化と称して、また戦争のひとつも始めてしまいかもしれないな。」

そのへんはシュナイゼルの得意分野のはずだから、あるいは上手く切り回すのかもしれないが。それでも、完全に世界から憎しみや紛争が無くなるわけでは決してない。欲の心が消えない限り、いつまでだって愚かな行動を繰り返す。人間とはそういう生き物だ」

淡々と語るＣ・Ｃに追従するようにして、ポクポクと歩みを進める馬のひづめの音が温かな雰囲気をもし出している。

だが、もちろんルルーシュは呑気に構えていられる場合ではなかった。

しばらくして隣りからルルーシュが奥歯を噛み締めている音が聞こえたが、ギアスの関係の断ち切られてしまったＣ・Ｃには以前のようにルルーシュの怒りの波長を間近に感じることは出来なかった。

それを『さびしい』と思ってしまふのは、さすがにわがまま過ぎるかなと思いいながら苦笑を洩らした。

「　　さすがは魔女だな。今の俺にそれを言うのか？」

ルルーシュは、ようやく気持ちを押さえつけるのに成功したのだろつ。彼独特の高飛車に突き放している声音で、そんなふうに切り

替えした。

C・Cは空中に投げ出している足先を、ブラブラ呑気に揺らしながら他人事の調子で続ける。

「ああ、いくらだって言ってやる。おまえにはこれから色々と学んでもらわなければならないことがあるからな。ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアとして生きてきた18年で導き出したおまえの答えには、私も心から敬意を表している。だが、今後はもっと別な方法で解決することも可能なはずだ」

「スザクたちの犠牲の上に成り立っている現在を侮辱するつもりか？」

「そうではなくて、いずれあいつたちが死んだ後はどうする？ おまえのことだ、目の前でまた似たような愚行に走ろうとしている連中を見つけたら、黙って見過ごすことができるのか？ 私にはとてもそうは思えない」

当分の間は、人も痛みを覚えているからおとなしくしているのだろっ。

それでも、その痛みを知らない人間はすぐにまた生まれてくるのだ。

そしてまた成長した暁には

ルルーシュはギリギリと奥歯の間で怒りの塊をすり潰しながら、獰猛に唸るように呟いた。

「……だから、それを今の俺に求めるのかッ？」

「おまえが起こした行動の結果だろう？ せつかく生き返ったんだ、ついでに見守ればいいじゃないか。私は賛成しないがな、止めたって素直に聞くようなおまえじゃないだろう？」

「勝手に、決めるなッ」

「私が決めたわけじゃない、ただの経験だ。私を誰だと思ってる？」

ギアスの力を行使して数多の人間を殺してしまった良心の呵責に苛まれていたから、ルルーシュは結果的に自分を生かさず殺す道を選んだ。

結果など知らないで済ませられたなら、ルルーシュは本当に幸福な最後を迎えたと言えるだろう。

完全に自分の思い通りに行動して、完全に思い通りの結果を手にしたわけだから。

だからなおさらシャルルの残していった呪いはタチが悪いのだ。

まさかルルーシュの行動を予測していたとも思えないのだが、完全に否定できるほどの自信はない。

なにしろアレは、このルルーシュの実父なのだから。

「だから、それが嫌なら、新しく得られた人生をせめて満喫しろと言っているんだ。一度死んで義理は果たしたのだろう？　だったら別にいいじゃないか」

そう言っただけで割り切れるような男なら苦労しないかと内心では独り言を言いつつＣ・Ｃが反論すると、言葉に窮したルルーシュは正攻法に打って出た。

八つ当たりではなく、攻撃の対象をＣ・Ｃに変更したのだ。

「ふんッ、俺が約束を反故にしたから嫌がらせのつもりか？　本当にタチの悪い魔女だよ、おまえは」

Ｃ・Ｃは思わず笑ってしまいながら、ルルーシュの横顔を流し見た。

死んだはずの人間の正体がバレるのを恐れて、全身を野暮ったい農民服で覆い尽くしているものだから、なんだかルルーシュを相手にしているようには見えなかったが、顔覆いと帽子の下にわずかに覗いている目元はやっぱりルルーシュのものだった。

今は純粹な紫水晶色に輝いているその瞳。
アメジスト

「馬鹿だなア、本気にしているのか？　おまえは私の願いを全部叶えてくれたクセに」

「　　はア？」

その瞳が鋭く動いて、怪訝そうに問うて横目で睨んでくるルルーシュを見ながら、Ｃ・Ｃはクスクスと愉快そうに笑った。

C・C、俺はギアスに負けたりなんかしない。この力を支配して、使いこなしてみせる。この世界を変えてみせる。俺の願いも、おまえの願いもまとめて叶えてみせる。奴に果たせなかった契約を俺は実現してやる。だから

それはルルーシュのほうから契約を持ちかけてくれた時に言った言葉。

本当にうれしい言葉だったから、C・Cは一度も忘れたことはなかった。

たしかにC・Cの願っていたようには愛してくれなかったかもしれない。『死にたい』という願いすら叶えてくれなかったかもしれない。

それでもひとりの人間としてルルーシュはC・Cを愛した。今までC・Cが契約を交わしてきた誰ひとりが実現できなかった方法で、その短い人生を通して本当にギアスの力を使いこなし、世界を変えてしまった。ギアスに関係した者すべてが不幸になるわけではないのだと、言葉通りの生き様で証明してしまったのだ。そうして結果的にC・Cの『死にたい』という願望すら変えてしまったわけだから。

ルルーシュがその生涯の結末に人類に教えたかったのは戦うことの空しさ。

おかげで今しばらくの間は、人は戦うことを忘れている。

間接的にC・Cから笑顔を奪うことになる原因すらすっかり取り除いてしまったわけだから、本当はおまえは私の願いを願っていた以上に全部叶えてしまったんだよ。

言葉ではなく思考でそれをルルーシュに伝えたと、ルルーシュは露骨に顔を顰めて視線を外してしまった。

コード保持者だけに許される精神感應に、まだかなり戸惑ってい

るらしい。

Ｃ・Ｃ・のほうにとっても、時折頭の中に直接ルルーシュの声が聞こえるのは慣れないのと同時に、どこかしら照れ臭さを感じてしまっただけだった。

それでも、とＣ・Ｃ・は思う。

「これから先は私のエゴさ。ひとりの人間として、私はおまえに愛してもらった。だから今度はひとりの女として、私がおまえを愛してみようと思っただけ」

本当に言いたいことは、これまでと同じに口に出して伝えたいと思った。

そのほうが記憶に残るような気がしていた。

シチュエーションと、その場に漂う雰囲気、実際の声で聞く言葉の重さ。

ルルーシュに言われた言葉はすべて、そんなふうにしてＣ・Ｃ・の記憶に焼き付けられている。

だから意識的に感じている喜びを声に含んで伝えたと、いかにもルルーシュらしく鼻の先で笑った。

「ふん、愛だと？ そんなもの……」

「そう言うな。けっこう捨てたモンじゃないと思うがな」

なにしろ、その想いひとつで、願いつけて何百年の『死にたい』欲求すら満たしたの１年ちよつとで変えてしまったわけだから。

「もちろん、どうしても嫌だというのなら言ってくれ。私がおまえのコードを引き取ってやるから。そしたら多分おまえは、身体の寿命が尽きたところで天寿を全うするはずだ」

ニコニコ微笑んでいる声音でそう言くと、ルルーシュが露骨に怪訝そうな横目でＣ・Ｃ・の様子を窺った。

「……悪趣味な奴だ。そうしておまえはまた地獄の人生に逆戻りか？」

「戻りはしないよ。おまえが私の人生から地獄を全部引き取ってくれたおかげでな」

「死なない人生を、生きているとは言わなかったんじゃないのか？」

そんなことまで良く覚えているなと思いながら、C・Cは苦笑を洩らした。

「それは以前の私だ。今の私には、おまえに愛された自信があるからな。その自信が私の中から消えない限り、これまでのようにただ生きていることを無為に感じる必要はなくなったんだ。だから、本当はおまえと別れた瞬間から新しく人生をやり直すつもりでいたんだが、せつかくおまえが生き返ってくれたことだしな。だったら私も素直に欲しいものを求めたい。人生に意義を求めたいのなら、待っているだけじゃなく全力で掴み取れ　おまえが、そう教えてくれたんだ」

言葉ではなく、その生き様で。

C・Cが欲していた生きる希望を示してくれたから。

「だから、おまえは好きにしてくれていいんだぞ？」

「言われなくてもそうするさ」

路肩の草を揺らして届いたぬるい風に、青々とした生命の息吹を感じる。

眼前に遥か遠く連なる山の景色も、稜線が空の青さを映したようにキラキラ輝いていて、まるきり地上に落ちた楽園のようだった。

何も起こらず平穏で、だからこそなおさら生きることが純粹に愉しませてくれもする貴重な時間の連なり。

「で、どうするんだ？」

しばらく行ったところで、どうでも良さそうな感じに訊ねると、ルルーシュは少しイラついている声音でこう言った。

「だから、好きにしているんだ」

「そうか」

ポクポクと歩みを止めることのない馬のひずめの音が続いている。

C・Cは、ふふつと息を洩らして幸福そうに微笑んだ。

】 e n d e 【

その短い生涯に数多の変遷を辿ってきたつもりでいた。

なにしろ九つの誕生日を迎えた頃には母を失って、同時に父の存在も失ったのだ。

拳句の果てに、人身御供として敵対国のど真ん中に送られて。

それに反旗を翻す目的でさんざん抵抗を試みた拳句に、実際は身内の情念が引き起こしたファルスの登場人物の一人として利用されていたに過ぎなくて。

我ながら、その人生には、スタンディングオーベイションで皮肉の喝采を送ってやりたいような心境だ。

それでもルルーシュは、ただの一度も、赤貧を洗うが如しの経験だけはないのだった。

すべてにおいて丸抱えになっているのが癪だったから、自主的に料理を覚えて、生活費の切り詰め方を覚えて、後には賭けチェスにまで手を出して、せいぜい小遣い稼ぎに精を出したものだ、生活の基盤となる住居だけは、枢木家なり、アッシュフォード家なりが必ず用意してくれたのだ。

その後ろ盾が、今の自分には一切存在してないわけだから、数多に山積している問題を一体どのように解決する気なのかと、ルルーシュのほうでは非常に懐疑的だったわけだが。

いざ蓋を開けてみれば、人生経験が人並み外れて豊かだったC・C・が独自のルートで裏から手を回して、生きるのに必要になる最低限の書類を、二、三日のうちには簡単に偽造してしまったのだから驚いた。

「一体どうやったんだ？」と問い詰めても、飄々とした態度を崩さない魔女は、「企業秘密だ」と言っただけで、さっぱり要

領を得ない。

たしかに、これまで数百年もその細腕一本で天涯孤独な人生を過ごしているわけだから、嫌でも必要に迫られて身についてしまった特技なのだろうが。

そうとも知らずに、その相手を今まで下にも置かない持て成しぶりで厚く庇護してきた立場にあるルルーシュにしてみれば、少々くらは複雑な感慨を覚えないではいられないわけだった。

いずれにせよ、今現在のルルーシュは、以前とは完全に立場の逆転してしまった状態でC・Cの用意してくれた家に住み、C・Cの用意してくれた仕事で日銭を稼いでいるような毎日だ。

フランスのノルマンディ地方然り。

海に面した大陸の果てには断崖絶壁が付き物である。

大西洋の荒波と、そこに吹きつける強風の相乗効果によって、遮るものが何もない大陸は容赦なく波に削り取られてゆく。

まさしく古の欧州人たちが「ここが世界の西の果て」と信じて当然の景観である。

海面から高さ200メートルの崖が8キロに渡り大西洋に突き出すモハーの断崖。

モハーはゲール語で「廃墟になった崖」を意味する。

しかし晴れた日には、そこから遠くにぼんやりとある島の存在を確認することができる。

ゴールウェイ湾の沖、大西洋に浮かぶアラン諸島。

『ケルト文化の聖地』とも言われるその諸島は、大中小の三つの島からなり、ケルトの伝統・民話・言語などを昔ながらの形で残している。

そのうちのいちばん小さな島がイニシニア島だ。

とにかく石と草だけが存在する、寂寞とした原風景。

総人口が300人足らずの寂しい島だ。

ルルーシュがそこで生活をはじめてから、今日で三週間になる。

案内された家は、周囲一帯を十重二十重に腰丈くらいの防風塀が蛇行する牧草地の真ん中にぽつんと立っていた。

啞然とするほど見渡す限りに何も無い。

それよりルルーシュを驚嘆させたのは、家の前に立つ一本の木の木だ。

今もそれなりに風は吹いているのだが、特に風圧を意識するほどでもない。

耳元では休みなく風の音が鳴っているのだが、ほどよく風が肌をなぶりゆく感触はいつそ心地良いほどだった。

しかし、その家の前に立つもみの木は、まるきりハリケーンレベルの突風に今にもなぎ倒されんばかりに一方向へ激しく枝葉をしながら、死に物狂いで大地にしがみ付いているようにしか見えないのだ。

「気になるのか？」

茫然と視線を奪われて立ち竦んでいるのに気付いたＣ・Ｃが、通りすぎりにクスリと笑みを含んだ声音で面白そうに揶揄してくる。正直力チンと来てしまったルルーシュは、一瞬黙殺することもあるが、今は興味を満たしてくれることが先決だった。

説明しろと目線で促すと、Ｃ・Ｃは尚も陽気に微笑み、何が愉しいのかわからない口調で歌うように語った。

「この立地条件に、この地形だろう？ 年中潮風が止まないものだから、どうしても風の吹くまま曲がって成長してしまうのさ」

まるきり、「ヒマワリは日の当たる方角に向かって、花を咲かせるのが当然だろう？」と言わんばかりの口調で。

そんな馬鹿な話があつてたまるかと、ルルーシュが二の句を失っている最中にも、構わずＣ・Ｃはさつさと家の中に姿を消してしまっていた。

いつまでも茫然としていても仕方がないので、ややあつてルルーシュもその後が続いたが、踏み込んだ室内は薄暗く、一見して質素な生活ぶりがうかがえた。

しかし必要最低限の調度類が壁際に機能的に配されているので、小さな家ゆえの息苦しさは感じない。住んでいる人間の機知の表われだ。

「おまえの知人の家なのか？」

暗に、「ここで誰かと同居を始めるのか？」と訊ねると、Ｃ・Ｃは隣の部屋から声だけで返してきた。

「いいや、私の家さ」

「はア？」

「いいから、先に掃除を手伝ってくれ。話なら、手を動かしながらだつて出来るだろう？」

すっかりＣ・Ｃ主導で進められる話に、ただでさえ苛立ちの沸点が高いルルーシュは、思い切りムツとしてしまったが、もっともな判断だと理解する理性だけは残っていたので、ひどく不承不承ながらに従った。

室内は定期的に人の手が入っている様子で一見した感じでは綺麗に保たれているのだが、至るところに埃が堆積していた。

おそらく無人になってから、一、二年といった辺りだろうか。

部屋を移動する際に目に付いた蛇口をなんとなく捻ると、手応えのないままにカラカラと数回空回りした後で、赤茶けた鉄臭い水がドツと一気に溢れ出た。

「そのまま水が澄むまで出しておいてくれ。私は今からバケツを探してくる」

言うより先に移動を始めていたらしく、また別の部屋から声だけが聞こえた。

なんだか本当に魔女みたいだなと不貞腐れた気分で思いながら、ルルーシュはただ漠然と流れる水を眺めていた。

その水が、完全に澄み切る前にC・Cは戻ってきた。

さっそく手にしたバケツに水を溜めながら、ルルーシュの目の前には赤サビの浮いている真鍮製の鍵を一本差し出す。

「こっちは先に始めておくから、裏の蔵を見て来てくれないか？ 備蓄してある食糧が、いくら残っているはずだから」

言うだけ言って、鍵を差し出している片方の腕だけ残して、自分は今も別の作業の段取りを始めている。

以前に比べれば、人が変わったような積極性を発揮して、きびきび動き回るC・Cに違和感を覚えたせいもあるのだが、なんだか肝心の話から上手いように遠ざけられているような感じもした。

露骨にイラついている表情で返事もしないルルーシュに、さすがにC・Cも少し困っている表情でクスリと温容に苦笑して、自分のほうからルルーシュの片手を手にとって、その手のひらの上に鍵を乗せさせた。

「妙な勘繰りをしないでも、誤魔化しているわけじゃない。話ならいくらでも後でしてやるから、とにかく今はゆっくり出来る場所を用意するのが先決だろう？」

「だったら、ここの掃除は俺がしてやるから、おまえが蔵にでもどこへでも行ってくるがいい」

言うなり、手の上の鍵を突っ返したが、今度はC・Cが受け取るうとしなかった。

とっさにルルーシュは、奥歯を噛み締める必要があるくらい怒りが高じてしまったが、それにすらC・Cは困った風な顔をしてただ微笑む。

「適材適所という言葉を知っているか？」

「……………だからどうだと言っただ？」

「自慢じゃないが、私は料理が得意でない。せいぜい出来るのは、野菜の皮むきくらいだ」

肩をすくめながら言ったセリフに、ルルーシュも思わずハツとする。

記憶を失くしていたC・C・Cが、似たようなことを言っていたのを思い出したせいだった。

しかし、今現在のC・C・Cは、才女と言っても過分でないほどに数多の知識の持ち主だ。

その女が、どうして料理の腕だけ上達していかないかと大いに不満を感じたが、だからと言ってC・C・Cの手料理を喜んで食したいと思うほどルルーシュは冒険家ではなかった。

結局、ムツとした表情を隠しもしないで踵を返した。

「出てすぐを右手にぐるりと回ったほうが近道だからな」

もちろん、それには返事もしないで、唯一把握している玄関口から足早に外に抜け出した。

まだそれほど室内では過ごしてないはずだったが、それでも外に出た瞬間にルルーシュは、腹の底から溜息を吐き出さずにはいられなかった。

子供か、俺は。

今にも神経が焼き切れそうな気分ですらあった。

今の自分がC・C・Cに向けている感情は、ただの八つ当たりだ。それが嫌というほどわかってはいるはずなのに、どうしたわけか、あの魔女の平然と取り澄ました顔つきや、時折ホツとしている内心を隠しもせずに向けてくる安堵の眼差しが、どうしても我慢ならぬのだ。

なぜなら、自分は死んだはずだった。

これまで自分が起こしてきた行動の責任をすべて背負って。

これまで自分が奪ってきた数多の生命が、たった自分ひとりの命で贖えるほど高尚であると傲慢に思い上がっているわけではない。

ただ、自分には『明日が欲しい』という気持ちがあったから。

生きたいと、思ったから。

だから、自分以外の人々を生かすための手段に及んだはずだった。

それなのに。

どうして、俺はまだ生きている？

死ねない身体だと？

何様だ？

どうして、俺一人ばかりが、そんな特権を手に入れて、厚顔を晒してのうのと生きている？

本当は、生き続けたいと思っていたからこそ、自分自身に与えた罰だった。

自分が、これまでに奪ってきた命の持ち主たちも、すべからくそれを望んでいたはずだったから。

だから、それを奪った自分自身も当然そうするのが道理だと思った。

だから、完璧なシナリオを用意して、スザクには『生きる』という罰すら与えて、ナナリーやシュナイゼルに後の面倒を一切任せて、自分は完全に人生から身を引いたはずなのに。

そう思うだに、あまりに色濃く内心に荒れ狂っている怒りの塊に、ルルーシュはしばらく視力を失っているような状態だったが、視線の先は無意識のうちにも、やはり例のもみの木に吸い寄せられてしまっていた。

忌々しい存在だからこそ、気になってしまふのだ。

朽ちて倒れてしまったほうが簡単だろうに、重力にすら必死で逆らって大地に縋り付いているような姿が、なんだか今の自分の姿と

重なってどうしても気鬱に塞ぎ込んでしまふのだ。

一度は死んで、精神的な懊悩からすべて解放されたはずだったのに、何の因果でこんな僻地で、コソコソ隠れて生き続けなければならぬのか。

C・C・に言われたとおり右手の砂利道をぐるりと回って歩いてゆくと、家の裏手には伸び放題の大麦が茂っていて、家屋にさえぎられた風にそよそよと揺れていた。

それを横手に眺めながらしばらく歩くと、やがて簡素な小屋のようなところに到着した。

とはいえ、こうした気候の土地に建つ家だ。壁面はレンガ造りの立派なものだ。

ここから遠く離れた景色の果てにも、家が一軒建っているのが見えていた。

だが、無人であるのは屋根を見れば一目瞭然だった。

壁面は石造りなので、物理的に崩されない限り永遠にもそこに残るが、長年の風雨に木の屋根のほうは手入れを怠れば朽ちてなくなる。ここに来るまでに見かけた廃墟の村も、ことごとく屋根を失い切妻だけが昔年の名残をみせていた。

こんな場所でしか、今の自分は生き長らえることができないわけなのだった。

まったく、とんだ生き地獄だなとルルーシュは、憎々しげに内心で父親の姿に思いを致す。

これが実の息子に与える報復か？

物心がつく以前から顔を合わせる機会が少なくて、ロクに話した覚えもない相手だった。

だが、母親が殺される以前までは、それでもまだ幾許かの信頼を寄せていた自分の本音を知っている。

だからこそ、尚更。

どうして母を守らなかったのかと、最後まで問い続けてきたわけなのだった。

自分の記憶にある父親だったら、たとえどんな犠牲を払っても母を守ろうとするのが当然だと思っていたから。

そして、何よりも忌々しいことに、裏を返せば、自分にはそれを父に訊ねる権利があると、少なくともその程度には愛されていると信じて疑いもなかったからこそ、何度も挫けず正面から立ち向かっていくことの出来た無意識による真実。

あれほど憎んでいたはずなのに、それでもまだ心の奥底では、『父親』に対する情の部分が残っていたのかと思ったら、その真実が何よりもルルーシュを打ちのめしてしまうくらいに屈辱的だった。

蔵の中に備蓄してあった食糧は意外なほどの種類を備えていた。

豆類と根菜類がほとんどだが、明らかに長期間保存するのが目的で念入りに手間をかけてあったから、少なくとも当分の間は食うのに困りはしないだろう。

虫が寄り付かないように敷き詰められている乾燥ハーブ。

燃料に用いるのだろう泥炭も蔵の片隅にはたっぷり備蓄してあった。

けれども、なにしろ憤然と怒り狂っている状態を続けているわけだから、食欲など微塵も沸いてくるはずもない。

それよりC・Cの言いなりに行動させられている自分自身にいまさら押し殺し切れない怒りが湧いてきて、ルルーシュは何ひとつ手につかない状態で薄暗い蔵の中にしばらくたたずんでいたのだが、

結局カラ手のまま踵を返すと、憤然とした足取りで家のほうに引き返した。

癩症に唇の内側の肉を噛み締めながら、部屋の中にＣ・Ｃの姿を探した。

Ｃ・Ｃは、どうやら寝室と思しき薄暗い部屋の片隅で、棒の先にタオルを数本くくり付けたハタキを使って、上から順に埃を落としている最中だった。

明かり取りの小窓から射し込む陽光に、部屋中にもうもうと舞っている細かい塵がキラキラ輝く。

「そっちの用は済んだのか？ こっちは私がするから、ルルーシュは、」

自分自身が耳元でバタバタと騒音を生み出しているものだから、しばらくはルルーシュの来訪にも気付いてない様子だったが、そのうち気配で察したのだろう。Ｃ・Ｃが視線も向けずに、やはり淡々と次の作業を指示してくる。

ルルーシュは、何も言わずにＣ・Ｃの二の腕を鷲掴むと、乱暴に引いた腕を反動に任せてベッドの上に突き飛ばした。

「……ッ……！」

抵抗する暇もなくそれに従うしかなかったＣ・Ｃの瘦身が、埃よけに被せてあったシーツの上に無造作に投げ出され、結っていた緑の髪が空中に四散すると同時に、ドツと白い埃が舞い上がる。

ルルーシュは、何も考えないようにしながら、柔らかな女の身体の上に押し掛かると、口元を覆っていたマスク代わりのタオルを乱暴に剥ぎ取って、その下に潜んでいた唇に噛み付いた。

「……ッ……ッ……！」

ガツンといきおい良く互いの歯が正面から打ち合って、その一瞬だけＣ・Ｃは苦痛に大きく顔を歪めた。

だが、じきにルルーシュが、慌ただしくスカートをたくし上げながらＣ・Ｃの膝を大きく割り広げ、問答無用でブラウスのボタンを外し始めてしまっても、焦りの色ひとつ浮かべはしなかった。

焦るどころか、冷静にその一部始終を見守りながら、クスリと艶然に微笑み言ってくれたものである。

「最後の二ヶ月間のおまえは紳士的だったのになア」

べったり塗り付けられたルルーシュの唾液に、その口元を妖しく光らせながら、これ見よがしに残念そうに微笑まれ、ルルーシュはさらにひとときわ激昂した。

「……俺を愛すると言ったのはおまえだ」

腹の上までスカートをたくし上げられているものだから、小さな下着の先からしなやかな両脚がルルーシュの身体のサイドにすっかり露わにさらけ出されている。

元々ブラウスは胸ぐりが大きく開いたデザインだったから、ボタンを三つも外せば胸元もすっかり寛いでいる状態だ。

ものの数秒で半裸に近い状態にされながらも、それでもＣ・Ｃは女王然とした風格を失わずに微笑んだ。

「おまえを愛したいと言ったのは私の意志だ。だからといって、この身体をおまえの弱気の慰みに提供する謂れはない。私は、おまえとの間に愛を育みたいと望んでいるのであって、おまえの愛人になりたいわけではないからな」

「……ッ……！」

屈辱と羞恥の余り、声も出せなくなっているルルーシュに、一瞬で腹の底まで冷え切るような物言いで、高飛車にＣ・Ｃは命令を下した。

「どうせ、今は考えようにもマトモに頭の働かないことを知っているから、おまえの代わりに私が考えてやると言っているんだ。いいからおまえは、黙って私に従ってろ。それとも、何か？　ひとりになるのが淋しくて単独行動もできないのか？　あんまり私を、笑わせるな」

最後は露骨に蔑むように鼻の先で嘲笑され、一瞬で頭に血が上ったルルーシュは、バネが弾けるように身を起こすと、脱兎のごとくに部屋から飛び出した。

「考えたんだがな、C・C。やっぱりおまえとも、ここで別れたほうが懸命だと思うんだが」

ダモクレスの掌握後、ナイトオブゼロ枢木スザクの死亡を公式に発表したところで、ルルーシュは臨時の皇宮で自分のほうからそんなふうに切り出した。

それに最後まで、首を縦に振らなかったのがC・Cである。

「私に契約不履行の汚名を着せるつもりか？　一緒にいると約束しただろう」

「しかし」

「自分の身くらい、自分で守れるさ。今まで何百年もそうしてきたんだ。だからおまえは、余計なことを気にするな」

そこまできっぱり言われてしまうと、ルルーシュにも何も言うことが出来なかった。

ルルーシュは当初の計画通り世界の憎しみを一身に引き受けるための行動を起こして、C・Cはその傍らで最後まで寡黙にそれを見守った。

日々の折々に交わす言葉は無数にあったが、それでも唯一過去を振り返るような話は一切しなかった。

アッシュフォードで暮らしていた時代と同じに、ルルーシュの部屋で寝起きを共にしていたが、ただそれだけだった。

C・Cの存在は、ルルーシュにとって影のような存在。

そばにるのが当然で、当然だからこそ何の変化も起こりはしない。

ただそばにいてくれるだけで満足だったのだ。

今まで過ごしてきた時間を一瞬で水泡に帰すが如く、自分の信じてきた者たちが実にあっけなく自分の存在を見限っても、最後まで自分の行動に迷いが生じなかったのも、常に傍らにC・C・が存在したから。

ナナリーを含めた皇族と、黒の騎士団の公開処刑を行うその日の朝、ルルーシュは出かける用意を済ませると、いつもと同じになにげなくC・C・に伝えた。

「じゃア、そろそろ行ってくる」

C・C・も、いつもと同じようにそれに答えた。

「ああ、行つてこい」

それきりあっさり踵を返してしまうので、あまりのらしさにルルーシュも思わず笑ってしまった。

だから、すっかり余計なひとことを口にしてしまったのかもしれない。

「C・C・、どこか行く宛てがあるのか？」

C・C・は少し驚いている表情で振り向いて。

だが、ルルーシュを見つめる眼差しは、少しも潤むことなく至って普通のままだった。

「まアな、それなりに何とかなるだろうさ。人生経験だけは豊富にあるからな」

ルルーシュは、なんとなく肩をすくめながら、C・C・の強がりな水を差しておくのも忘れない。

「あんまり無茶はするな」

C・C・は、ルルーシュに視線を据えたまま、なぜだか呆れたふうに肩を揺らして笑った。

「私を誰だと思ってる？」

「フン、そうだったな」

そして、互いに笑顔のまま見つめあい、やがて申し合わせたように同時に踵を返した。

結局C・Cは、ルルーシュの前では一度も涙を見せはしなかった。

泣いている気配すら覗かせはしなかったから、だから余計にルルーシュも最後まで落ち着いて過ごしていられたのだと思う。

その安心感を与えてくれた相手に、たった今自分が仕掛けた行為を冷静に思い起こしたルルーシュは、ひとりになるや自分自身を絞め殺したい激しい苛立ちに身悶えた。

C・Cが、黙って傍にいてくれるから調子に乗って、苛立ちをぶつけるのすら当然のように思っていた。

C・Cが、どんな気持ちでそばにいるのか考えもしないで、憤りに任せてルルーシュは、家の外壁に拳を振り下ろした。

切りっぱなしの花崗岩の表面は岩場のように乱雑で、二度、三度と殴り続けているうちに切れた皮膚の下から鮮血が吹き出した。けれども、ロクに痛みを感じる暇もなく傷口はあつという間に塞がって、血痕だけが後には残された。

これが呪いの正体だ。

傷ひとつ満足には負うことの出来ない不老不死の身体。

こんな身体になっているのを知っていたなら、もつといくらでも方法は考えられたはずだった。

それなのに、完璧を信じて一度は死んだ俺を嘲笑うようにして、まんまと甦ってしまった。

自分には、もうどこにも戻る場所は残されていないのに。

人の心に平和を望む気持ちを刻み付けておくためにも、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの存在は未来永劫悪の象徴であらねばならない。だから、万が一にも残された者たちの判断がルルーシュの望む世界と乖離してしまっても、もう今のルルーシュには黙って見守るしか方法がないのだ。

スザクや、ナナリーが、苦しんでいるのを知っていながら、もう

自分にはどうしてやることも出来ない。

実にあまりに的確に、ルルーシュのために用意された拷問だった。

およそ三時間で集中的に寢室を磨き上げたC・Cは、少し離れた場所から部屋を見渡すと、満面に笑みを浮かべた。

その気になれば、ここまで『出来る子』であることを結局最後までカレンに知らしめることが出来なかったと思えば少々腹の虫が収まらないような気もしたが、それくらい今のルルーシュの心中と比べれば、あまりに些細な問題だった。

掃除に夢中になっている最中にも、部屋の向こう側で何度か人の足音を聞いたので、ルルーシュが家に戻っていることは姿を見ないでも知っていた。

C・C・自身が不老不死のコードを継承させられた当時のことは、正直言つて、あんまり昔の出来事すぎて記憶に残っていない。

それでも、漠然と今のルルーシュが抱えている不安の正体だけなら知っていた。

少なくとも、知っている、つもりだ。

自分の身体でありながら、死ぬことすら満足に叶わない。

その絶望に加えて、ルルーシュには、実の父親に呪いを掛けられてしまった恨みもある。

それを取り越えるためには、一体どれくらいの時間を要するのかC・Cにもわからない。

なにしろ自分は何百年も要して、ようやくルルーシュのおかげで生きる気力を与えてもらっているわけだから。

この先ルルーシュは、生きている限り自分の起こした行動の結果を、正視し続けなければならない。

おそらくC・Cが今まで味わってきたよりも凄惨な人生の始まりだろうと容易に想像できたから、本当は先ほどルルーシュに押し倒された瞬間にC・Cは迷ってしまったのだ。

本音を言えば、このまま抱かれてやつても構わないかと一瞬だけ思った。

だが、それではルルーシュをむしろ傷付けてしまいそうな気がして、とっさにあして突き放してしまったわけだが。

今でもその判断に間違いはなかったと自信はあるのだが、いかにせん可愛げのない反応である自覚は持っているわけだから、少々迷いを引きずってしまうわけだ。

思っている背中に、答えのほうから自主的にやって来た。

「ああ、こつちもずいぶん綺麗に片付いたな」

突然声を掛けられて、C・Cはビクリと飛び上がるくらいに驚愕した。

「お…、おどかすなっ!」

完全に虚を衝かれてしまったものだから、叫んだ声音が上ずった。が、ルルーシュはあっさりそれを黙殺してしまうと、さっさと踵を返した。

それきり歩みを進めてしまうものだから、呆氣にとられたC・Cは怪訝そうな小声で呟いた。

「……ルルーシュ?」

ルルーシュは、コツコツと快足を進めながらそれに応じる。

「こつちも大方完成だ」

「はア?」

「だから、作業を分担してたんじゃないのか?」

なにしろ狭い家のことだから、そこまで言ったところで、ルルー

シュの背中とは別の部屋の中に移動した。

C・Cは眉間に皺を刻みながら、その場に立ち尽くしてしまっ
たが。

「C・C？」

ややあつて、少しイラついているような大声で呼ばれて、埃よけ
に結った後ろ頭をガリガリ掻きながらヤケのように叫んだ。

「わかつてる、すぐに行くから！」

「……」

いつの間にやら、すっかり自分のペースを取り戻してしまってい
る。

ブツブツ文句を呟きながら掃除の際に使ったバケツや雑巾を片付
けて、ルルーシュが向かったと思しきキッチンへ足を運んだ。

が。

「……」

瞬間的にC・Cは、激しい屈辱感に打ち負かされた。

当座の優先順位は低い廊下、玄関先などは相変わらず雑然とした
ままだったが、リビング・ダイニングとキッチン周りを中心に見違
えるほどの輝きを放っていた。

C・Cが寝室ひとつを磨き上げている時間で、ルルーシュはそ
の何倍もの範囲を自分がしたよりも完璧に磨き上げてしまっている
のである。

しかも、C・Cに言われたとおり、料理をするかたわらで、だ。
ルルーシュは得意がるでもなく、キッチンで残りの作業を進めて
いた。

C・Cは、気の抜けたようにハア…と肩から息を吐き出すと、
素直に敗北宣言を口にした。

「……完敗だ。おまえの得意分野で対抗しようというのが、間違い
だったな」

ルルーシュは「バカか」と謂わんばかりの表情で視線を向けてきた。

「それより、埃を被ったろう？ 飯の前に風呂に浸かってこい」

「そうしたいのは山々だが、今はまだ水しか使えないはずだろう？」

「だから、キッチンで湯を沸かしてバスタブに溜めてある。早くしないと冷めるじゃないか」

どこまで手際が良いんだ、おまえは と呆れたように思ったが、ありがたいことには違いなかったたので、この際、素直に従うことにした。

交代で湯を使って、簡単な部屋着に着替えると、小さな食卓を間に挟んで向き合った。

ガスや電気が通されてなかったから、キッチンで使用できる火力はすべて薪の力によるものだ。

かまどなどおそらく初めて使ったはずなのに、ルルーシュはそれでパンを焼き、根菜と豆類を中心とした料理を数品作り上げていた。もはや対抗意識など、埃と一緒に風呂場で洗い流してしまったＣ・Ｃは、やっぱりこの役割分担で正解だったなと、素直に自分の手柄を喜んだ。

「ん、出来る嫁をもらって私は幸せだぞ？ ルルーシュ」

「ふざけるな」

そっけなく言いながら、ルルーシュがオニオンスープを供してくれるのを待ち、ようやく腰を落ち着けたところでＣ・Ｃはスプーンを取り上げた。

「いただきます」

言って、なぜだかニコニコと微笑んでしまいがら、Ｃ・Ｃは料理を口に運んだ。

ルルーシュの前でピザ以外を食べるのがあまりに少ない経験だったので、それが面映かったせいもあるのかもしれない。

ルルーシュは寡黙にスプーンを口に運んでいたのだが、ややあつて、気の進まぬ様子で、溜息混じりに呟いた。

「……C・C」

「ん、なんだ？」

答える間にも、焼きたてのパンに噛り付く。

さすがにドライーストまでは備えがなかったのだろう。パンの食感よりも、ピザ生地のもっちり感に近かったが、外側をしっかりと香ばしく焼き上げてあったので、咀嚼するたびにパリパリと口の中に崩れてゆく感覚がなおさら美味を誘った。

だから依然として、C・Cはニツコリ微笑みながらついでのように訊ね返したが、ルルーシュは横目で一瞬だけ恨めしそうにそれを睨んで、やがて不明瞭な声音でボソボソ呟いた。

「だから、その……さっきは、わるかったな」

言うなり、不味そうな顔をしてスプーンを口の中に運んで、苦いものでも食ったような表情で眉間に皺を刻んだ。

溶け崩れるほどには煮込んでいる時間がなかったせいだろう、半透明のオニオンが白濁したスープの中に漂っている状態ではあったが、味のほうは何の遜色もなかった。

C・Cは、何度かその美味を味わった後で、おもむろにクスリと微笑んだ。

「ルルーシュ、どうして私がおまえを愛したいかわかるか？」

ルルーシュは、それには答えず困惑した様子で食事を続けた。

C・Cは、喉の奥でクツクツと笑いを弾ませながら先を続けた。「おまえが、私の前では素直でいてくれるからさ。怒りも、悲しみも、憎しみも、忌憚なく全てをさらけ出してくれるから、おまえと一緒に居るだけで安心するんだ。なにしろ私は魔女だからな」

ルルーシュは、スープを執拗にかき回しながら、ぶっきらぼうに呟いた。

「フン、魔女にもいろいろ種類があると思ったが、おまえは人の悪意を糧にしているわけか」

「そうとも。だからおまえは、何より最高のご馳走なのさ」

だから、変な遠慮などしないで、これから先も、みつともなく悩んで苦しめ。

言外にそう匂わすと、ルルーシュは無言でキリキリと眉間に皺を刻んで見せるだけで、何も言い返そうとしなかった。

少し風が強くなってきているようで、部屋のどこかでは薄いガラスが絶えずカタカタ鳴っている。

とつぱり日も暮れてしまっていたから、唯一の光源は、かまどの火と食卓の上の蝋燭だけだった。

ゆらゆらと頼りない明かりに照らされているルルーシュの顔を眺めるのは、本当に見ている者にとっては目のご馳走だなど思いながら、C・Cはクスクスと愉しそうに笑った。

「だいいち、だ。私のことを抱きたいなら、おまえも私を愛するときは。こんなに可愛い女が相手なら、簡単なことだろう?」

だから、好きになったらいつでも言ってこい。喜んで抱かせてやるぞ?

そつけない調子で付け加えると、ルルーシュは音を立てそうな勢いで激赤して、湯が沸いたのを口実に、ガタンツとうるさく音を鳴らして席を立つ。

「……………誰がッ」

吐き捨てるようにそう言うが、明らかに思い出した羞恥に、身の置き所を失くしているのが明白だったので、C・Cは、やっぱり女王然とした余裕の態度でふふふっと愉しげに笑みを零した。

「 e n d e 」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1984m/>

コードギアス 本編派生短編集

2010年10月8日13時15分発行